

平安京左京六条二坊十二町跡

烏丸綾小路遺跡



2019

公益財団法人 元興寺文化財研究所

平安京左京六条二坊十二町跡
烏丸綾小路遺跡

2019

公益財団法人 元興寺文化財研究所

序

古代都城平安京は、その後形を変えて京都となり、幕末に至るまでの長い間日本の首都であり続けました。平安京すなわち京都には、日本の歴史が凝縮されているといっても過言ではないでしょう。こうした日本の原点ともいえる京都ですが、現在、大きな変化の時期を迎えています。東京オリンピック、大阪・関西万博を控え関西は大規模な開発ラッシュが続いていますが、京都もまた例外ではなく、多くのお客様を迎えるための様々な施設が作られ、まちの景観が大きく変わりつつあります。新しいまちの誕生の陰で、地下に眠る遺跡が失われてゆくことも事実です。こうした遺跡の声を聴き取り、新しいまちづくりに生かしてゆくことこそ、今、最も必要とされていることかもしれません。

さて、このたび平安京左京六条二坊十二町跡・烏丸綾小路遺跡の発掘調査報告書が完成しました。発掘調査の結果、摂関期から院政期に転換する11世紀前半頃に遺跡が出現し、11世紀末～12世紀初頭には、立派な庭園のある邸宅が造られること、その後、鎌倉時代初頭頃にも大量の土師器皿を使用する屋敷的な施設があったことが判明しました。当地は古くから源氏累代の屋敷である堀川六条館の伝承地でありましたが、残念ながら源氏存在を証明できる遺構・遺物は見つかりませんでした。しかし、京都の歴史はこうした名のある人々だけではなく、声なき民の営みで紡ぎあげられたものでもあります。発掘調査はこうした声なき人々の声を聴く作業ともいえるでしょう。遺跡があげる声は決して大きなものではありませんが、これを着実に積み重ねることで、大きな「語り」へと繋がってゆくことと思います。本書がそうした「語り」の一部を担えたら幸いです。

最後になりましたが、今回の発掘調査に際してご協力いただきました株式会社プレサンスコーポレーション様、調査の指導を頂きました京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課様、検証委員として何度も現場に足を運んでいただいた網伸也先生、國下多美樹先生、調査に際してご理解ご協力いただきました周辺住民の皆様に深く感謝申し上げます。

平成31年4月25日

公益財団法人 元興寺文化財研究所
理事長 辻村泰善

例言

1. 本書は平安京左京六条二坊十二町跡・烏丸綾小路遺跡において、ホテル建設に先立ち実施した発掘調査成果をまとめたものである。
2. 調査地は、京都市下京区油小路通六条上るト味金仏町181番・184番1・186番に所在し、開発面積1,336㎡のうち、調査対象面積は170㎡である。
3. 調査は株式会社プレサンスコーポレーションより委託を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所が京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下京都市文化財保護課）の指導のもと行った。現地調査は平成30年2月19日～同年4月25日に実施し、平成30年4月26日～平成31年4月25日を整理期間とした。
4. 発掘調査は佐藤亜聖、村田裕介（公益財団法人元興寺文化財研究所）が担当し、上井佐妃、近藤史昭（京都府立大学院生）、芦塚晶太、清水真好、出井和真、吉兼千陽（龍谷大学学生）が補助した（いずれも所属は当時）。
5. 調査地の座標および基準点測量は株式会社文化財サービスが行った。座標基準は世界測地系平面直角座標系VI、基準点はTPによるものである。
6. 発掘調査における重機等土工部門については全京都建設協同組合、作業員派遣については株式会社京カンリに委託した。
7. 遺構写真撮影は佐藤、村田が、遺物写真撮影は大久保治（公益財団法人元興寺文化財研究所）が行った。
8. 出土遺物の実測および浄書は仲井光代、武田浩子、吉田芽依（公益財団法人元興寺文化財研究所）、上井、近藤、出井、川島行彦（奈良大学院生）、中原七菜子、税田脩介（奈良大学学生）が行った（いずれも所属は当時）。
9. 本書に使用した土器の分類、年代については以下の文献を参照した。本文中で触れる分類名、年代表記はこれらの文献に依拠している。

九州陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』

尾上 実・森嶋康雄・近江俊秀 1995『瓦器』概説中世の土器・陶磁器 中世土器研究会編 真岡社

小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年の研究—日本律令の土器様式の成立と展開、7～19世紀—』京都編集工房

大阪大学文学研究科考古学研究室 2012『篠塚跡群大谷3号窯の研究』〈大阪大学文学研究科考古学研究报告〉第5冊

中世土器研究会事務局 2015「東播系須恵器鉢の分類と編年」『中近世土器の基礎研究』26

重根弘和 2016「備前 - 分類と分布 - 」『国産陶器の系譜と暦年代』第36回中世土器研究会資料集

新田和央 2012「京都出土の瓦器盤について」『中近世土器の基礎研究』24 日本中世土器研究会

（財）京都市埋蔵文化財研究所 2003『平安京左京四条二坊十四町跡』（京都市埋蔵文化財発掘調査概報 2003-5）

平尾政幸 2016「平安京およびその周辺から出土する11世紀～13世紀の土師皿」『手づくね「かわらけ」の西・東—年代・技法・地域色—』発表資料「手づくね「かわらけ」の西・東」実行委員会

藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

森 隆 2000「柿葉型黒色土器 B 類碗と初期柿葉型瓦器碗」『中近世土器の基礎研究』XV 日本中世土器研究会

10. 本書の執筆は第 4 章を山口繁生（公益財団法人元興寺文化財研究所）が、その他を佐藤が行い、芝 幹（公益財団法人元興寺文化財研究所）の補助のもと佐藤が編集した。
11. 発掘調査および整理報告書作成にかかる費用については、株式会社プレサンスコーポレーションが全額これを負担した。
12. 発掘調査で出土した遺物、実測図、写真は京都市文化財保護課において保管している。
13. 発掘調査および整理報告書の作成に際しては、以下の方々、機関からのご助言、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

（個人）

網 伸也（近畿大学）、國下多美樹（龍谷大学）、鈴木康高、松吉祐希、南 孝雄、山本雅和、吉崎 伸（（公財）京都市埋蔵文化財調査研究所）、陳 彦如（京都大学）、中井淳史（兵庫県立大学）、中塚 良（（公財）向日市埋蔵文化財センター）、橋本久和（同志社大学）、藤本史子（追手門学院大学）

（団体）

株式会社アクセス都市設計、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

（敬称略、五十音順）

目次

第1章 調査に至る経緯と調査体制	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査の経過（調査日誌抄）	2
第2章 周辺における既往の調査と調査の課題	4
第3章 調査の成果	7
第1節 基本層序と遺構面の認定	7
第2節 整地層ほか出土の遺物	7
第3節 第1遺構面の遺構	15
第1項 江戸時代の遺構	15
第2項 江戸時代の遺構出土の遺物	20
第3項 室町時代の遺構	26
第4項 室町時代の遺構出土の遺物	28
第4節 第2遺構面の遺構と遺物	30
第1項 平安時代後期～室町時代初期の遺構	30
第2項 平安時代後期～室町時代初期の遺構出土の遺物	32
第5節 第3遺構面の遺構と遺物	34
第1項 平安時代後期の遺構	34
第2項 平安時代後期の遺構出土の遺物	34
第6節 第4遺構面の遺構と遺物	35
第1項 平安時代後期の遺構	35
第2項 平安時代後期の遺構出土の遺物	39
第4章 SEO34 出土国産陶器椀付着顔料の蛍光 X線分析	44
第5章 調査のまとめ	46
第1節 遺構の変遷	46
第2節 遺構変遷からみた調査地周辺の歴史的景観	47

図版目次

図1 調査地位置図 (S=1/25,000)	4
図2 中古京師内外地図	5
図3 今回の調査地と既往の調査地 (S=1/5,000)	5
図4 遺構配置図(1) (S=1/150)	8
図5 遺構配置図(2) (S=1/150)	9
図6 壁面土層断面図 (S=1/40)	11
図7 整地土・ベース土出土遺物実測図 (S=1/3)	14
図8 SEO10 平面・土層断面図 (S=1/40)	15

図 9	SE020 平面・土層断面図 (S=1/40)	15
図 10	SE030 平面・土層断面図 (S=1/40)	16
図 11	SE034 平面・土層断面図 (S=1/40)	16
図 12	SE037 平面・土層断面図 (S=1/40)	17
図 13	SE038 平面・土層断面図 (S=1/40)	17
図 14	SK024 平面・土層断面図 (S=1/40)	18
図 15	SX040 平面・土層断面図 (S=1/40)	18
図 16	SX070 平面・立面・土層断面図 (S=1/40)	19
図 17	SE010・020・030・034 出土遺物実測図 (S=1/3)	21
図 18	SE037・038 出土遺物実測図 (S=1/3)	22
図 19	SK024 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	23
図 20	SK024 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)	24
図 21	SX040・070 出土遺物実測図 (S=1/3)	25
図 22	SD031 土層断面図 (S=1/40)	27
図 23	SG100 平面・土層断面図 (S=1/80)	27
図 24	SK019 平面・土層断面図 (S=1/40)	28
図 25	SD031、SG100、SK019 出土遺物実測図 (S=1/3)	29
図 26	SA170 平面・土層断面図 (S=1/40)	31
図 27	SD106 平面・土層断面図 (S=1/40)	31
図 28	SK090 平面・土層断面図 (S=1/40)	32
図 29	SA170 (SPO54) 出土遺物実測図 (S=1/10)	33
図 30	SD106 出土遺物実測図 (S=1/3)	33
図 31	SK090 出土遺物実測図 (S=1/3)	34
図 32	SK110 平面・土層断面図 (S=1/40)	35
図 33	SK110 出土遺物実測図 (S=1/3)	35
図 34	SB160 平面・土層断面図 (平面 S=1/80・断面 S=1/40)	36
図 35	SD130 平面・土層断面図 (S=1/40)	36
図 36	SG150 平面・立面図 (平面 S=1/80・立面 S=1/40)	37
図 37	SG150 土層断面図 (S=1/80)	37
図 38	SK088 平面・土層断面図 (S=1/40)	38
図 39	SK140 平面・土層断面図 (S=1/40)	38
図 40	SB160、SD130 出土遺物実測図 (S=1/3)	39
図 41	SG150 出土遺物実測図 (S=1/3)	40
図 42	SK088・120・136 出土遺物実測図 (S=1/3)	41
図 43	SK140 出土遺物実測図 (S=1/3)	43
図 44	SE034 出土国産陶器碗 (○：試料採取箇所)	45
図 45	蛍光 X 線スペクトル (左：赤色顔料、右：白色顔料)	45
図 46	遺構配置略図 (1) (S=1/200)	51
図 47	遺構配置略図 (2) (S=1/200)	52

表目次

表 1 計数率	45
表 2～8 報告遺物一覧 (1)～(7)	53～59
表 9～13 検出遺構および出土遺物一覧 (1)～(5)	60～64

写真図版目次

図版 1	図版 11
調査前風景 (南東から)	SK019 土層断面 (南から)
第 1 遺構面検出状況 (西から)	SK019 完掘状況 (東から)
図版 2	図版 12
SE010 土層断面 (東から)	第 1 遺構面完掘状況 (西から)
SE010 完掘状況 (東から)	第 1 遺構面完掘状況 (東から)
図版 3	図版 13
SE020 土層断面 (東から)	第 1 遺構面完掘状況 (北東から)
SE030 土層断面 (東から)	第 1 遺構面完掘状況 (北西から)
図版 4	図版 14
SE034 土層断面 (北から)	SA170 礎石検出状況 (南東から)
SE034 完掘状況 (南東から)	SD106 土層断面 (東から)
図版 5	図版 15
SE037 土層断面 (北から)	SD106 礎出土状況 (東から)
SE038 土層断面 (北から)	SK090 土層断面 (南から)
図版 6	図版 16
SE038 完掘状況 (西から)	第 2 遺構面全景 (西から)
SK024 土層断面 (南から)	第 2 遺構面全景 (東から)
図版 7	図版 17
SX040 土層断面 (北から)	第 2 遺構面全景 (南東から)
SX040 完掘状況 (北から)	SK110 土層断面 (南から)
図版 8	図版 18
SX070 土層断面 (東から)	第 3 遺構面全景 (西から)
SX070 完掘状況 (南から)	第 3 遺構面全景 (東から)
図版 9	図版 19
SD031 土層断面 (南から)	SB160 全景 (東から)
SG100 礎検出状況 (北東から)	SD130 と石組 (東から)
図版 10	図版 20
SG100 完掘状況 (北西から)	SD130 と石組 (西から)
SG100 土層断面 (東から)	SD130 礎と SG150 州浜礎 (東から)

図版 21

SG150 完掘状況（西から）
SG150 完掘状況（北西から）

図版 22

SG150 景石（東から）
SG150 西端石組検出状況

図版 23

SK088 土層断面（北から）
SK140 土層断面（東から）

図版 24

SK120・136・140 完掘状況（東から）
第4遺構面完掘状況（西から）

図版 25

第4遺構面完掘状況（東から）
北壁土層断面1（南から）

図版 26

北壁土層断面2（南から）
北壁土層断面3（南から）

図版 27

北壁土層断面4（南東から）
断割1（北西から）

図版 28

断割2（西から）
断割3（西から）

図版 29

整地土、ベース土出土遺物

図版 30

SE034・038、SK024 出土遺物

図版 31

SK024 出土遺物

図版 32

SK024、SX040 出土遺物

図版 33

SX040・070、SD031、SG100 出土遺物

図版 34

SG100、SA170、SK019・090、SD106
出土遺物

図版 35

SK090・110、SG150、SB160 出土遺物

図版 36

SG150、SK088・120・140 出土遺物

図版 37

SK140 出土遺物

第1章 調査に至る経緯と調査体制

第1節 調査に至る経緯

平成29年11月21日、株式会社プレサンスコーポレーションより、京都市下京区油小路通六条上るト味金仏町181番・184番1・186番の埋蔵文化財発掘の申請が、京都市文化財保護課へ提出された。株式会社プレサンスコーポレーションは、窓口となる同課との事前協議を経て平成29年12月11・13日に実施された試掘調査の結果から、開発範囲の東半部については発掘調査の必要を通知されたため、平成29年2月9日に公益財団法人元興寺文化財研究所と発掘調査の委託契約を締結した。公益財団法人元興寺文化財研究所は、委託契約締結後速やかに元文研第29-33号において埋蔵文化財発掘調査の届出を行い、京都府教育委員会の通知を受けて平成30年2月19日に現地調査を着手した。

第2節 調査体制

調査は以下の体制で行った。

調査主体：公益財団法人元興寺文化財研究所

理事長 辻村泰善
所長 辻村泰善（兼務）
副所長 狭川真一

総合文化財センター センター長 塚本敏夫

文化財調査修復研究グループ

グループリーダー 金山正子
サブリーダー 角南聡一郎

主任研究員 佐藤亜聖（現場・整理報告担当）

研究員 村田裕介（現場担当）

研究員 坂本 俊（現場担当）

調査指導：京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

発掘調査検証委員会

委員 網 伸也（近畿大学教授）

委員 國下多美樹（龍谷大学教授）

第3節 調査の経過（調査日誌抄）

平成30年

- 2月19日（月） 資材搬入とバリケード設置、調査区設定を行い、京都市文化財保護課の確認を受ける。
- 2月20日（火） 重機、コンテナハウス搬入、重機掘削を開始する。予想以上に攪乱が多く、遺構の残存が危ぶまれる。
- 2月22日（木） 重機掘削完了、排土整備を行う。京都市文化財保護課来訪。
- 2月23日（金） 第1遺構面遺構検出作業開始、その日のうちに検出を終える。第1回発掘調査検証委員会を開催する。
- 2月26日（月） 第1遺構面遺構掘削を開始する。近世遺構が多く存在するが、昭和52年の調査で検出されている近世墓は見当たらない。
- 3月2日（金） SX070の掘削を行う。予想以上に良好に石組が残存する。
- 3月5日（月） 雨天のため現場中止。
- 3月7日（水） S-60、SX070の掘削を行う。SX070は底部に貼床がなく、砂底となっている。
- 3月12日（月） 第1遺構面完掘状況の撮影を行う。撮影後オルソ撮影を行い、整地土1の掘削を開始する。
- 3月13日（火） 整地土1の掘削を継続する。埋土内から14世紀頃の土師器皿が出土する。
- 3月15日（木） 第2回発掘調査検証委員会を開催する。調査区北東隅で切石礎石を検出、掘方から14世紀の遺物が出土する。
- 3月19日（月） 北東部礎石列の出土状況図を作成する。京都市文化財保護課来訪。
- 3月22日（木） SK090の掘削を行う。コンテナ10箱分の土師器皿が出土した。
- 3月23日（金） 第2遺構面完掘状況の撮影を行う。撮影後オルソ撮影を行う。
- 3月26日（月） 第3回発掘調査検証委員会を開催する。整地土2の掘削開始。SG100は整地土2の一部と考えていたが、第1遺構面から切り込む池状遺構であったことが判明したため、急速優先して掘削を開始する。京都市文化財保護課来訪。
- 3月27日（火） SG100最下層から14世紀の土器が出土し、年代が確定する。
- 4月3日（火） 第3遺構面完掘状況の撮影を行う。
- 4月4日（水） 第4回発掘調査検証委員会を開催する。北西隅で池を検出、景石が作うことを確認する。
- 4月9日（月） 第4遺構面完掘状況の撮影を行う。撮影後オルソ撮影を行う。第5回発掘調査検証委員会を開催する。
- 4月10日（火） SD130の掘削を行う。11世紀の土器が多数出土する。京都市文化財保護課来訪。
- 4月11日（水） 京都市埋蔵文化財研究所古崎氏、南氏、鈴木氏来訪。池の構造について意見交換を行い、池底の認定に誤りがあったことを確認した。
- 4月14日（土） 地元向け説明会を開催する。約40名の参加を得た。
- 4月17日（火） 北西隅の池について、変遷検討を行う。同時に全景写真撮影および壁面写真撮影を行う。

- 4月19日(木) ベース土深掘を行い、弥生土器壺が出土する。第6回発掘調査検証委員会を開催する。
- 4月23日(月) 北西隅の拡張を行い、石列が北西方面へ延びることを確認する。埋め戻し開始。
- 4月24日(火) 拡張部の埋め戻しを行い、資材撤収を開始する。
- 4月25日(水) 現地調査完了。

第2章 周辺における既往の調査と調査の課題

調査地は平安京左京六条二坊十二町に相当する(図1)。当地は『延喜式』の記載では「苑」となっているが、これについては他に記述がなく、また伴う屋敷や施設についても不明なため詳らかでない。平安時代前期の状況は周辺を含め不明な点が多いが、平安時代中期以降になると記録上にも記載が増える。東に隣接する十三町には、10世紀前半に宇多天皇皇女学子内親王の御所である「桂宮」が存在した。ただし町内のどの程度を占地していたのか詳細は不明である。その後、寿永2年(1183)には後白河法皇が十三町へ入り、六条第が形成される。文治4年(1188)には邸宅を1町規模に拡大し、持仏堂を配した巨大な邸宅へと変貌させる。この持仏堂が巨大な荘園群を持つ長講堂である。その後当地域は六条第と長講堂を核として繁栄してゆくと考えられる。『山槐記』文治元年(1185)8月26日条には調査地が所在する十二町に藤原親雅の邸宅が存在し、六条第の仏事に際して宿所として使用されていたことが知られ、六条第を中心に、その周辺には院近臣の邸宅が存在したことが窺える。

さて、こうした院邸宅を中心とした地域には、その近臣として武家の姿も見いだせる。当地周辺には六条第の北にあたる十四町に源仲国の邸宅があったとされ(『明月記』建永元年(1206)11月29日条)、



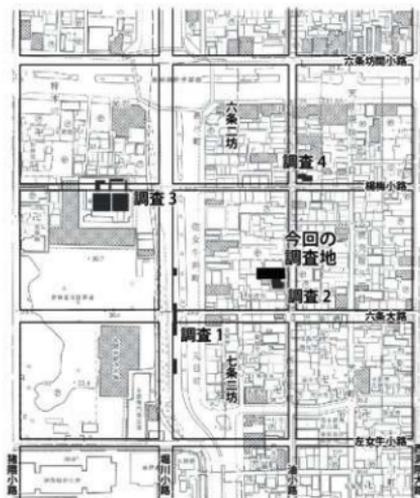
図1 調査地位置図 (S=1/25,000)

十五町には源頼義が前九年・後三年の役の戦死者の耳を切り取って埋めたとされる「みのお堂」が存在したとされる（『古事談』巻5）。さらに『保元物語』『平治物語』には源氏累代の六条堀川館の存在が書かれ、『百練抄』文治元年10月17日条には源義経が六条堀川館を宿所としたことが記される。注目すべきは寛延3年（1750）に作成された『中古京師内外地図』（図2）には調査地にあたる左京六条二坊十二町に「源氏累代堀川館」と書かれていることである。近世の段階では十二町が源氏の六条堀川館と認識されていたようである。ただし、この位置比定についてはすでに先学の指摘にあるように、六条堀川館に源義家が勧請した六条八幡が「六条左女牛八幡」「六条若宮」であり、現在東山区五条橋東にある今の若宮八幡が、もともと西本願寺境内東北付近にあったものを慶長10年（1605）に移転したものであり、その元位置が左京七条二坊九町に比定できること、ただしこれは義家勧請の八幡社を移したものであり、それ以前の位置は不明であることから、館の位置は必ずしも十二町に比定できるものではないといえる（魚澄 1920、海老名・福田 1992）。とはいえ、当地周辺地域が六条第設置以前からの武家の拠点であったことは間違いなく、本調査においてはこうした点に留意して検討を行った。

さて、調査地周辺ではこれまでに複数の発掘調査が行われている（図3）。今回の調査地と一部重なって隣接する調査（調査2）では2面の遺構面が見つかっており、平安時代から近世にかけての多くの遺構が見つまっている。なかでも20基にもおよぶ近世墓の検出は、寺院境内墓地の存在をうかがわせる（京都市埋文研 2011）。また、今回の調査地から100mほど北の十四町で行われた調査（調査4）では、基盤層を形成する礫層が古墳時代前期に安定化し、11世紀前半の大規模な整地層で平坦化が達成されること、13世紀前半にも整地



図2 中古京師内外地図
（国立国会図書館デジタルコレクションより）



調査1 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1991『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和62年度
調査2 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2011『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和52年度
調査3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2012『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和54年度
調査4 (公財)元興寺文化財研究所 2017『平安京左京六条二坊十四町 鳥丸小路遺跡』

図3 今回の調査地と既往の調査地 (S=1/5,000)

が行われることなどが判明し、9世紀から近代までの変遷を追える貴重な事例となった（元興寺文化財研究所 2017）。さらにここでは平安京唯一のウマの埋葬遺構が検出され、当地が源仲国の邸宅であったことと併せて注目を集めた。

以上の周辺環境から、本調査では特に現地形環境の形成過程の復元、六条第隣接地における宅地形態の解明、近世墓の検出などに注目して発掘調査を行った。

〈引用・参考文献〉

- 魚沼惣五郎 1920 「六條左女牛八幡宮に就いて」『歴史と地理』8-6
海老名典・福田豊彦 1992 「(資料紹介) 田中讓氏旧蔵典籍古文書『六条八幡宮造営注文』について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第45集
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2011 『京都市埋蔵文化財調査概況』昭和52年度
公益財団法人 元興寺文化財研究所 2017 『平安京左京六条二坊十四町 烏丸綾小路遺跡』

第3章 調査の成果

第1節 基本層序と遺構面の認定 (図4～6)

当遺跡の基本層序は上層から層厚約80cmの現代盛土、層厚約20cmの暗褐色中粒砂(整地土1)、整地土1直下に存在した層厚約25cmの暗灰黄色礫混細粒砂(整地土2)、整地土2直下に存在した層厚約25cmの黄褐色中粒砂(整地土3)、池(SG150)の上面に敷設されていた層厚約5cmの黒褐色中粒砂(整地土4)、ベース土直上に層厚約20cmで存在する灰褐色中粒砂(整地土5)により構成される。整地土4を除くそれぞれの整地土上面で検出した遺構面を第1～4遺構面として調査を行ったが、各整地土が調査区全域に均等に存在するわけではなく、別遺構面の遺構が同一面に存在している部分もある。

第1遺構面は標高約29.5～29.8mを測り東へ傾斜する。基盤となる整地土1はやや締まりが悪く、礫を含む。出土土師器皿の中には混入と考えられるやや新しいもの(1・4)があるが、概ね京VIII期新～IX期古段階の様相を呈し、14世紀中葉～後半の年代が与えられる。

第2遺構面は標高約29.4～29.6mを測り、東へ傾斜する。基盤となる整地土2はやや明るく締まりが良い。出土遺物は概ね京VI期中段階の様相を呈し、12世紀前半の年代が与えられる。

第3遺構面は標高28.9mを測り、ほぼ水平である。基盤となる整地土3は砂と黄褐色土のブロックを含む。出土遺物は概ね京VI期古段階の様相を呈し、12世紀初頭の年代が与えられる。

第4遺構面は標高28.8mを測り、ほぼ水平である。基盤となる整地土5は礫を含む黄褐色細砂で、いわゆるウグイス層に類似する。出土遺物は概ね京V期古段階の様相を呈し、11世紀前半の年代が与えられる。なお、整地土4はSG150の上面を覆う限定的なものであった。

基盤層は地表下約3m以下まで礫層であり、礫層の上に一部砂が見られる。礫からは弥生時代後期の器台(29)が、砂層からは緑釉陶器椀(30)が出土している。地形の安定化は古墳時代前期であり、その後9世紀前半に砂が流れ込んだと考えられる。

第2節 整地層ほか出土の遺物

整地土1出土遺物 (図7、図版29)

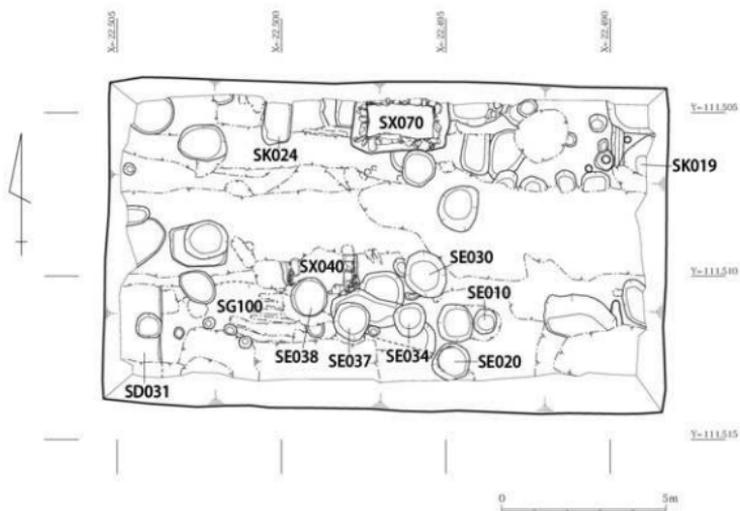
土師器皿(1～5) 1は淡灰褐色の胎土を持ち、内面は黒斑を持つ。16世紀後半頃のものであり、混入と考えられる。2は皿S小皿である。口縁端部を強くナデ調整する。3は白色の胎土をもち、へそ皿状に底部を押し上げる。京都では類例が少なく、大和に多いものである。4は橙褐色の胎土を持ち、口縁端部を小さく玉縁に造り出す。5は皿Sである。薄手で口縁端部を強くナデ調整する。

瓦器釜 6は土師質の胎土を持ち、外面のみイブシを施す。内外面ユビオサエの後、内面に板状工具によるナデ調整を施す。

須恵器椀 7は内外面回転ナデ調整を施し、外底面には回転イトキリの痕跡が残る。高台は貼付高台である。

灰釉陶器鉢 8は内外面回転ナデ調整の後、外面のみ施釉する。

第1遺構面



第2遺構面

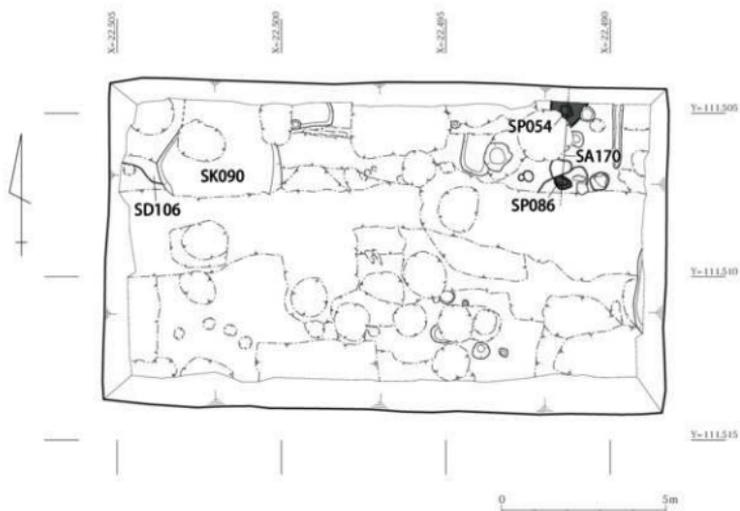
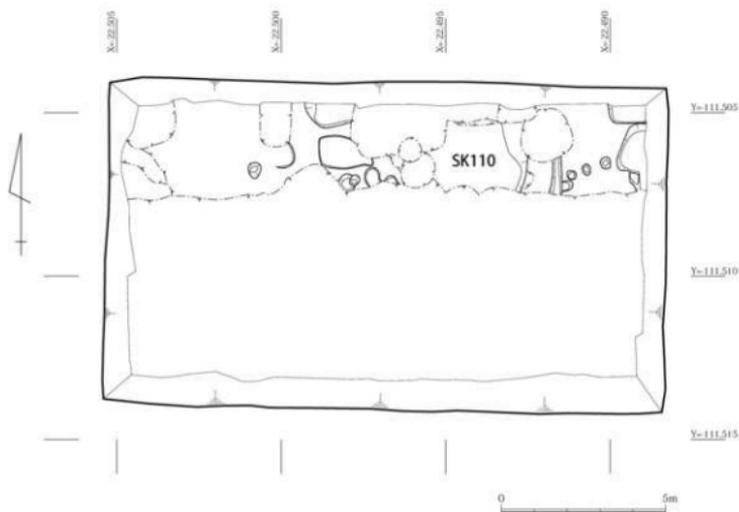


図4 遺構配置図(1) (S=1/150)

第3遺構面



第4遺構面

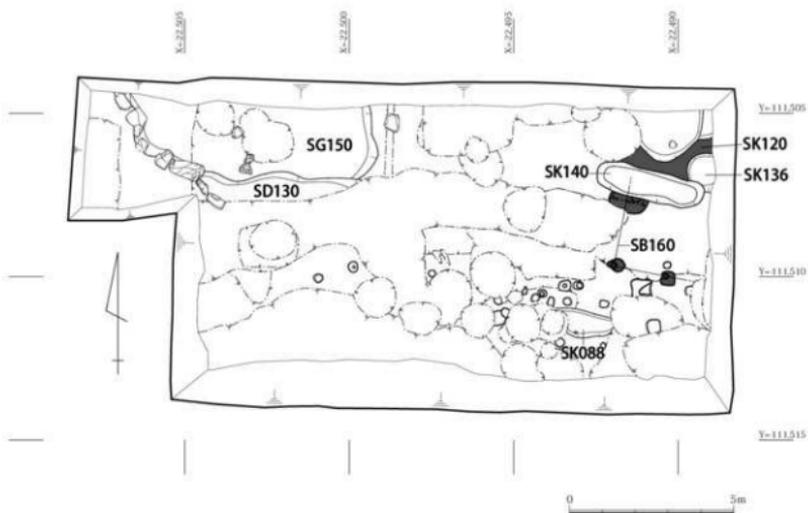
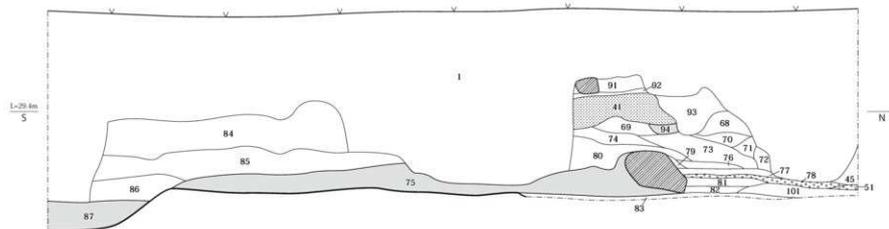


図5 遺構配置図(2) (S=1/150)

1. 暗黒 10YR3/3 細砂中砂 (焼土・炭化物・ガレキを多量に含む、造成土)
2. 黒 2.5Y2/1 中砂 (炭化物を主とし、焼土を多量に含む、船門門の底の火災層)
3. 黒 2.5Y2/1 中砂 (炭化物を少量含む、近世木の整地層)
4. 黒 10YR3/2 細砂中砂 (微細な土壌・焼土片を少量に含む) (S-28)
5. 黒 10YR3/2 中砂細砂 (微細な土壌・炭化物を多量に含む) (S-28)
6. 灰黄 10YR4/2 中砂細砂 (硬さを少量含む)
7. 暗黒 10YR3/3 細砂中砂 (焼土・炭化物を少量含む、土壌断片を多量に含む) (敷地土 1)
8. におい黄黒 10YR3/3 細砂中砂 (径 3cm 前後の準角礫状の細砂ブロックを含む) (敷地土 1)
9. 黒 2.5Y3/2 細砂中砂 (焼土をごく少量含む) (S-58)
10. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 細砂中砂 (焼土を多く含む)
11. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 細砂中砂 (下部にラミナ形成) (S-53)
12. 暗灰黄 2.5Y4/2 中砂 (径 3cm 前後の準角礫状の細砂ブロックを多量に含む) (敷地土 2)
13. 暗黒 10YR3/3 中砂 (径 0.5 ~ 1cm の礫を少量含む) (SP05-4)
14. 灰黄 2.5Y4/2 細砂中砂 (径 1cm の礫を少量含む、土断片を含む)
15. オリーブ褐 2.5Y3/3 細砂中砂 (径 3cm の礫を少量含む、土断片を含む)
16. 黒 10YR3/2 中砂細砂 (径 2 ~ 4cm の礫を含み、土断片を均一に含む)
17. 灰黄 10YR4/2 細砂中砂 (径 1 ~ 5cm の礫を含む)
18. 暗灰黄 2.5Y4/2 細砂中砂 (径 2 ~ 5cm の礫、少量の土断片・炭化物を含む)
19. オリーブ褐 2.5Y4/3 細砂中砂 (径 1 ~ 5cm 程度の礫・焼土・炭化物・径 2cm の準角礫状のブロック土を含む)
20. におい黄黒 10YR4/3 細砂中砂 (炭化物・焼土・径 5 ~ 8cm の準角礫状のブロック土を含む)
21. オリーブ褐 2.5Y4/3 細砂中砂 (炭化物・土断片・径 1 ~ 4cm の礫、径 3 ~ 5cm のブロック土を含む)
22. 暗灰黄 2.5Y4/2 細砂中砂 (径 2 ~ 8cm の礫・焼土・径 5cm の準角礫状のブロック土を含む)
23. 黒 2.5Y3/2 細砂中砂 (径 1 ~ 8cm の礫・土断片・炭化物を含む)
24. 黒 2.5Y3/2 細砂中砂 (径 0.5 ~ 6cm の礫・炭化物を含む)
25. 黒 10YR3/1 中砂細砂 (径 2 ~ 3cm の礫・土断片を含む)
26. 暗黒 10YR3/3 中砂細砂 (径 1 ~ 3cm の礫を含む)
27. 黒 10YR3/3 中砂 (径 2 ~ 10cm の礫を含む)
28. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 細砂中砂 (径 1 ~ 5cm の礫・土断片・瓦を含む) (SK070)
29. におい赤黒 5YR4/4 粗砂中砂 (多量の瓦・焼土・炭化物・漆喰を含む)
30. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂中砂 (径 2 ~ 3cm の礫・土断片を含む) (S-21)
31. オリーブ褐 2.5Y4/3 粗砂中砂 (径 1 ~ 5cm の礫・土断片を含む) (敷地土 2)
32. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂中砂 (径 0.5 ~ 4cm の礫・土断片・炭化物を含む) (S-105)
33. オリーブ褐 2.5Y4/3 粗砂中砂 (径 0.5 ~ 7cm の礫・炭化物を含む) (S-105)
34. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 粗砂中砂 (径 1 ~ 4cm の礫・炭化物を含む) (S-105)
35. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂中砂 (径 2 ~ 3cm の礫・炭化物・土断片を含む) (S-132)
36. 灰 2.5Y4/1 粗砂中砂 (径 3 ~ 5cm の準角礫・炭化物・土断片を含む) (S-132)
37. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂中砂 (径 1cm の礫・炭化物を含む) (S-132)
38. 灰 2.5Y5/1 粗砂中砂 (径 0.5cm の礫・炭化物を含む)
39. 灰 2.5Y5/3 粗砂中砂 (径 2 ~ 3cm の礫を含む) (S-132)
40. 灰黄 10YR4/2 中砂細砂 (径 1 ~ 3cm の礫を少量含む、土断片・炭化物を含む)
41. オリーブ褐 2.5Y4/2 細砂 (径 2 ~ 3cm の礫・土断片・炭化物を少量含む) (敷地土 1)
42. 暗灰黄 2.5Y4/2 中砂細砂 (径 1 ~ 4cm の礫・土断片・炭化物を少量含む) (SK090)
43. 黄 2.5Y5/3 中砂細砂 (径 2 ~ 3cm の礫を少量、土断片を多量に含む) (SK090)
44. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 粗砂中砂 (径 2cm の礫を少量含む、土断片・炭化物・黄褐色のブロック土を含む) (敷地土 3)
45. におい黄黒 10YR4/3 粗砂中砂 (径 5cm の礫・土断片・炭化物を少量含む) (敷地土 3)
46. 黒 2.5Y3/2 中砂細砂 (径 2cm の礫・土断片・炭化物を少量含む) (敷地土 3 相当)
47. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 中砂細砂 (径 2 ~ 3cm の礫・土断片・炭化物を含む)
48. 灰 2.5Y4/1 中砂細砂 (径 5 ~ 10cm の礫・土断片を少量含む)
49. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂中砂 (径 3cm の礫・土断片を少量含む)
50. 黒 2.5Y3/1 粗砂 (土断片を少量含む)
51. 黒 2.5Y3/2 中砂細砂 (土断片・ブロック土を少量含む) (敷地土 4)
52. 黒 10YR3/2 中砂細砂 (径 0.5 ~ 3cm の礫・ブロック土を含む) (敷地土 4)
53. 灰黄 10YR4/2 粗砂中砂 (径 0.5 ~ 5cm の礫・土断片を含む) (SG150 埋理土)
54. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂中砂 (径 2 ~ 3cm の礫を少量含む) (SG150 埋理土)
55. 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 粗砂中砂 (径 1 ~ 5cm の礫・土断片を少量含む、ブロック土を含む) (SG150 埋理土)
56. オリーブ褐 2.5Y4/3 中砂細砂 (径 0.5 ~ 3cm の礫を含む) (SG150 埋理土)
57. におい黄黒 10YR4/3 中砂 (径 2 ~ 7cm の礫・ブロック土を含む) (SG150 埋理土)
58. オリーブ褐 2.5Y4/3 中砂細砂 (径 1 ~ 2cm の礫・土断片を少量含む)
59. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂中砂 (径 1 ~ 10cm の礫・土断片を少量含む、炭化物を含む)
60. オリーブ褐 2.5Y4/4 中砂細砂 (径 1 ~ 4cm の礫を含む)
61. オリーブ褐 2.5Y4/4 中砂細砂 (径 1 ~ 5cm の礫・ブロック土を含む)
62. 灰 2.5Y4/1 中砂細砂 (径 0.5 ~ 3cm の礫を含む)
63. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂中砂 (径 0.5 ~ 4cm の礫・褐色土を含む)
64. 灰 2.5Y4/1 中砂細砂 (径 2 ~ 4cm の礫・炭結核を含む) (SG150 埋理土)
65. 灰 2.5Y4/1 粗砂中砂 (径 2 ~ 5cm の礫・土断片・ブロック土を含む) (SG150 埋理土)
66. 黒 2.5Y3/1 中砂細砂 (径 3 ~ 5cm の礫・炭結核を多量に含む) (SG150 埋理土)
67. オリーブ褐 2.5Y4/3 細砂 (径 3cm の礫を少量含む) (SG150 埋理土)
68. 灰オリーブ 5Y4/2 粗砂中砂 (径 0.5 ~ 1cm の礫・焼土・炭化物を含む)
69. オリーブ褐 2.5Y4/4 粗砂中砂 (径 1 ~ 2cm の礫・炭化物を少量含む)
70. 黄 2.5Y5/4 中砂細砂 (焼土・炭化物を少量含む)
71. オリーブ褐 2.5Y4/4 中砂細砂 (径 0.7 ~ 1cm の礫・焼土を含む)
72. 黄 2.5Y5/3 細砂 (径 3cm の礫・焼土を少量含む)
73. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂中砂 (径 2 ~ 4cm の礫・土断片・焼土・炭化物を含む)
74. 暗灰黄 2.5Y4/2 中砂細砂 (径 2 ~ 3cm の礫・炭化物を少量含む)
75. オリーブ褐 2.5Y4/3 粗砂中砂 (土断片・焼土・炭化物を含む) (SG150 表込め)
76. におい黄黒 10YR4/2 中砂細砂 (径 2cm の礫を少量含む)
77. におい黄黒 10YR4/3 中砂細砂 (径 2 ~ 3cm の礫・焼土を少量含む)
78. オリーブ褐 2.5Y4/3 (径 2 ~ 4cm の礫・焼土を少量含む) (敷地土 4)
79. 灰黄 10YR4/2 細砂中砂 (土断片を含む)
80. におい黄黒 10YR4/3 中砂細砂 (径 1cm の礫・土断片・炭化物を少量含む)
81. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂 (径 1cm の礫を少量含む)
82. 黄 2.5Y5/3 粗砂 (径 2cm の礫を含む)
83. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂中砂 (径 2 ~ 5cm の礫を多量に含む、炭結核を少量含む)
84. オリーブ黒 5Y3/1 粗砂中砂 (径 4 ~ 7cm の準角礫・土断片・焼土・炭化物を含む)
85. 灰オリーブ 5Y4/2 粗砂中砂 (径 2 ~ 3cm の礫・焼土・炭化物を含む)
86. オリーブ褐 2.5Y4/3 中砂細砂 (径 1 ~ 3cm の礫・焼土を含む)
87. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂中砂 (径 2 ~ 10cm の礫を多量に含む、土断片を含む) (SG100)
88. 黄 2.5Y5/3 中砂細砂 (土断片を少量含む、炭化物を含む) (SK120)
89. 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂細砂 (径 2 ~ 3cm の礫・炭化物を含む) (S-161)
90. 灰オリーブ 5Y5/3 中砂細砂 (径 2 ~ 10cm の礫・炭化物を含む)
91. におい黄黒 10YR4/3 中砂細砂 (径 3 ~ 4cm の礫・焼土・炭化物を含む)
92. オリーブ褐 2.5Y4/3 中砂細砂 (径 2 ~ 3cm の礫・焼土を含む)
93. 暗オリーブ 5Y4/3 中砂細砂 (径 3 ~ 9cm の礫・土断片・炭化物を含む)
94. 黄 2.5Y5/4 中砂細砂 (径 3 ~ 5cm の礫・焼土を含む) (SD106)
95. 暗灰黄 2.5Y4/2 中砂細砂 (径 1cm の礫を多量に含む) (湖底土?)
96. オリーブ褐 2.5Y4/3 粗砂中砂 (ブロック土を主とする、石の裏込めと一体)
97. 暗黒 10YR3/3 粗砂中砂 (焼土・炭化物を多量に含む)
98. 暗黒 10YR3/3 粗砂中砂 (径 0.5cm の礫を多量に含む)
99. 暗灰黄 2.5Y4/2 中砂細砂 (ブロック土を含む)
100. 黄 2.5Y5/3 粗砂 (ラミナ形成)
101. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂 (ラミナ形成) (SG150 埋理土)

西壁



- 整地土 1
- 整地土 2
- 整地土 3
- 整地土 4
- 遺構

北壁

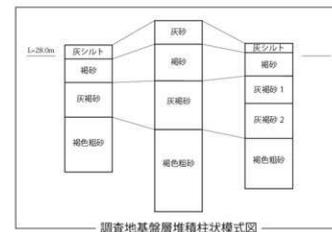
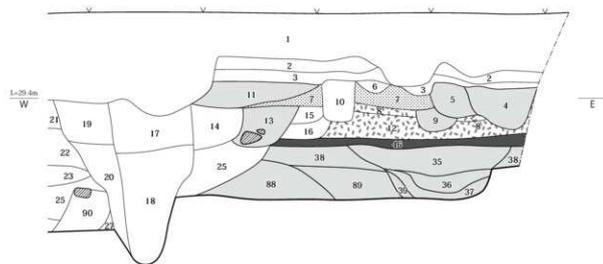
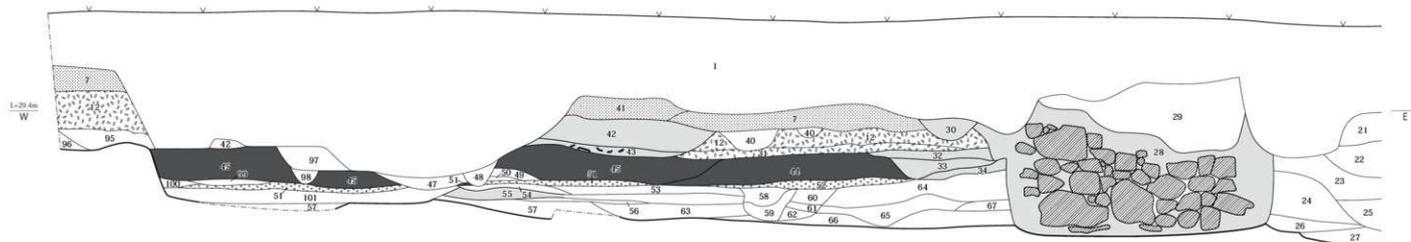


図6 壁面土層断面図 (S=1/40)

軒平瓦 9は唐草文軒平瓦である。凹面布目、凸面ユビオサエ調整し、瓦当下端裏面を広く面取りする。瓦当面は折り曲げにより成形する。胎土中に角閃石を含む。

これらの遺物のうち土師器皿は1・4を除き京Ⅷ期新段階～Ⅸ期古段階の様相を呈し、14世紀中葉～後半の年代が与えられる。

整地土2出土遺物(図7)

土師器皿(10・11) 10は橙褐色の胎土を有し、口縁端部を強く上方へ擴み上げる。11は橙褐色の砂粒を多く含む胎土を有し、口縁部を2段ナデ調整する。

須恵器皿 12は内外面回転ナデ調整を施し、外底面にはヘラキリの痕跡が残る。口縁部に暗色帯を持つ。

輸入白磁碗 13はⅡ類のものである。胎土中に黒色粒子を含み、やや青みを帯びた釉を施す。

軒丸瓦 14は蓮華文軒丸瓦である。外区端面には軽くヘラケズリを施す。

これらの遺物は概ね京Ⅵ期中段階の様相を呈し、12世紀前半の年代が与えられる。

整地土3出土遺物(図7、図版29)

土師器皿(15～17) 15は淡褐色の精良な胎土を有し、屈曲の緩やかな「て」字状口縁を有する。16は淡褐色で精良な胎土を有し、口縁部は2段ナデ調整を施す。17は橙褐色の胎土を有し、口縁部を強くナデ調整するため、端部が小さく外反する。

白色土器杯 18は内外面回転ナデ調整を施し、外底面にはイトキリの痕跡が残る。

土師器耳皿 19は淡褐色の胎土を有し、手づくね成形である。高台は比較的高いものを貼り付ける。口縁部は2段にナデ調整する。

土師器碗 20は淡褐色の胎土を有し、内面に密なヘラミガキ、外面に隙間のあるヘラミガキを施す。外面のヘラミガキは回転ヘラミガキの可能性はある。

輸入白磁碗 21はⅤ類のものである。外面露胎で内面には1条の沈線が巡る。

瓦器碗 22は楠葉型瓦器碗である。内外面に密なヘラミガキを施し、外面には分割ヘラミガキを施す。高台接地部は摩滅する。

山茶碗 23は常滑窯1a型式のものである。内外面回転ナデ調整を施し、外底面には回転イトキリの痕跡を有する。内面には自然釉が付着する。

これらの遺物は京Ⅶ期古段階の様相を呈し、12世紀初頭の年代が与えられる。

整地土5出土遺物(図7、図版29)

土師器皿(24・25) 24は淡褐色で精良な胎土を有する「て」字状口縁皿である。25は淡褐色でクサリ礫を多く含む胎土を有し、外底面には粘土帯の接合痕を有する。

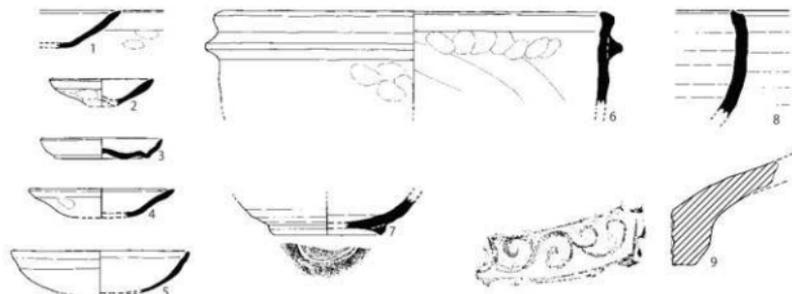
白色土器杯 26は内外面回転ナデ調整を施し、外底面には回転イトキリの痕跡が残る。

土師器碗 27は内外面回転ナデ調整を施し、内面には被熱痕が残る。

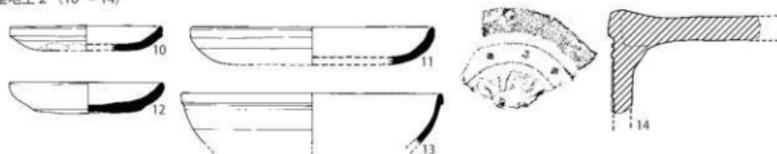
黒色土器碗 28はⅡ類である。口縁部に1条の沈線を有し、内外面密なヘラ磨きを施す。

これらの遺物は京Ⅴ期古段階の様相を呈し、11世紀前半の年代が与えられる。

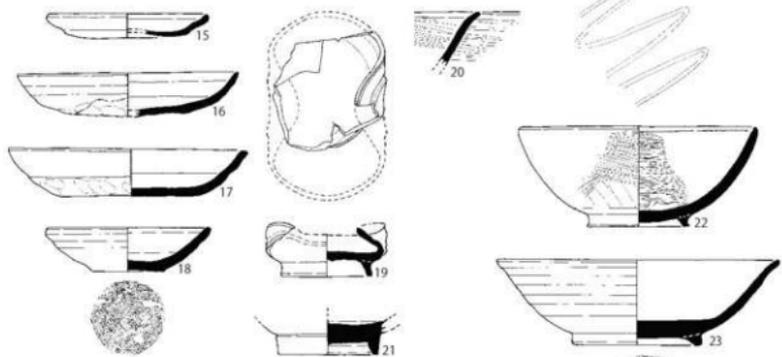
整地土 1 (1~9)



整地土 2 (10~14)



整地土 3 (15~23)



整地土 5 (24~28)

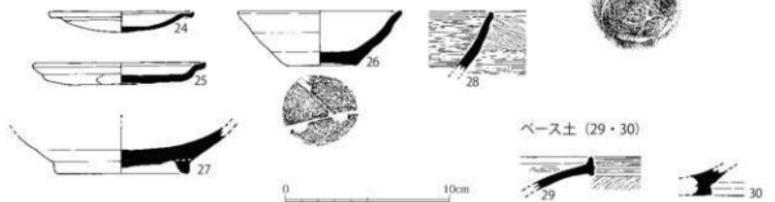


図7 整地土・ベース土出土遺物実測図 (S=1/3)

ベース土出土遺物（図7、図版29）

弥生土器器台 29は礫層からの出土である。口縁部縁帯には3条の沈線を持ち、外面は密なヘラミガキを施す。近江系のものである。

緑軸陶器椀 30は淡灰色の胎土を有し、内外面全面施軸する。小片のため時期等を決しがたい。

第3節 第1遺構面の遺構

第1項 江戸時代の遺構

井戸

SE010（図8、図版2）

調査区南半で検出した井戸である。直径120cm、深さ160cmの円形を呈する。井戸枠は残存しなかったが、埋土の観察から直径60cm前後の曲物が設置されていたと考えられる。1～5層は人為的な埋土で、上半の井戸枠は抜き取りが行われたものと考えられる。抜き取り埋土と枠内埋土には時期差がなく、比較的短期間で廃絶した遺構と考えられる。埋土に火災の痕跡は確認できない。

埋土内から17世紀中葉～後半の遺物が出土した。

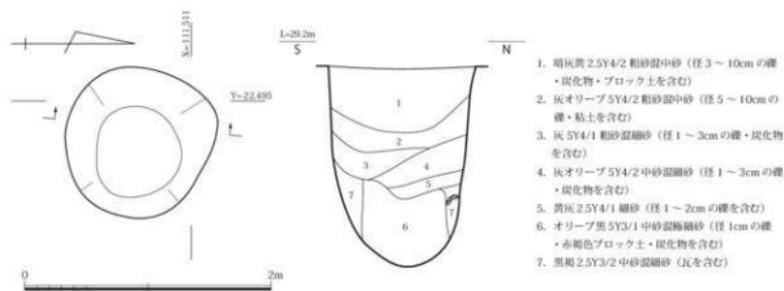


図8 SE010平面・土層断面図（S=1/40）

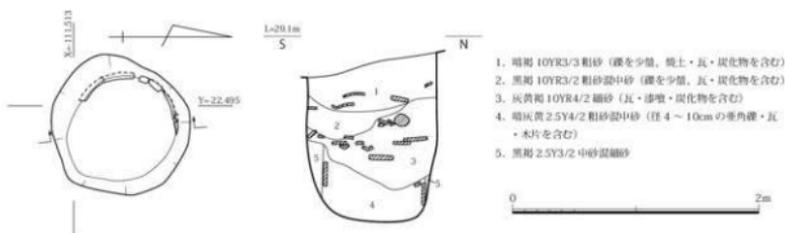


図9 SE020平面・土層断面図（S=1/40）

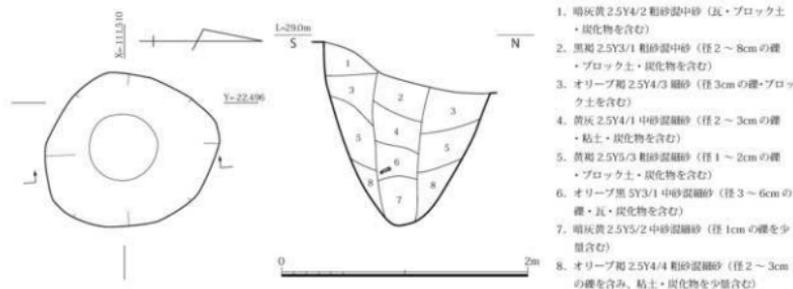


図 10 SE030 平面・土層断面図 (S=1/40)

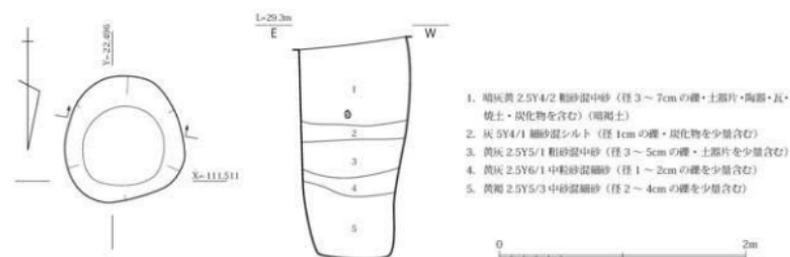


図 11 SE034 平面・土層断面図 (S=1/40)

SE020 (図 9、図版 3)

調査区南端で検出した井戸である。直径 118cm、深さ 138cm の円形を呈する。埋土下層には瓦裂井戸枠が残存している。枠内径は 80cm を測る。上半の井戸枠は抜き取りが行われたものと考えられ、瓦礫を多量に含む人為的埋土が充填されていた。抜き取り埋土と枠内埋土には時期差がなく、比較的短期間で廃絶した遺構と考えられる。埋土からは火災の痕跡と考えられる焼土、炭化物が多量に出土した。

埋土内から 19 世紀中葉の遺物が出土した。

SE030 (図 10、図版 3)

調査区中央付近で検出した井戸である。直径約 130cm、深さ 154cm の円形を呈する。井戸枠は残存しなかったが、埋土の観察から直径 60cm 前後の曲物が設置されていたと考えられる。井戸枠痕跡は上層まで明瞭に残っており、井戸枠の抜き取りは行われなかったと考えられる。埋土上層と下層に時期差はなく、比較的短期間で廃絶した遺構と考えられる。埋土に火災の痕跡は確認できない。

埋土内から 17 世紀中葉～後半の遺物が出土した。

SE034 (図 11、図版 4)

調査区南半で検出した井戸である。直径約 100cm、深さ 182cm の円形を呈する。井戸枠は残存せず、断面観察でも枠材の痕跡は明瞭でない。埋土にブロック土などはほとんど見られず、枠材の抜き取りが行われた痕跡はない。埋土上層と下層に時期差はなく、比較的短期間で廃絶した遺構と考えられる。埋

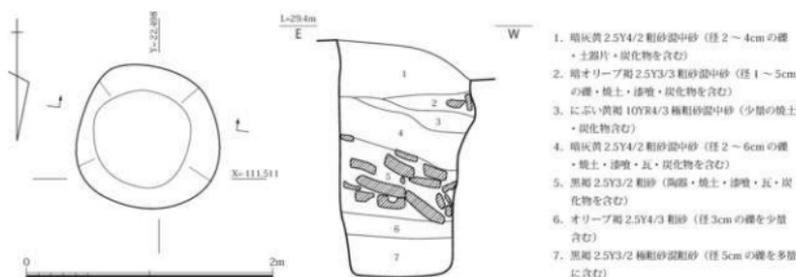


図 12 SE037 平面・土層断面図 (S=1/40)

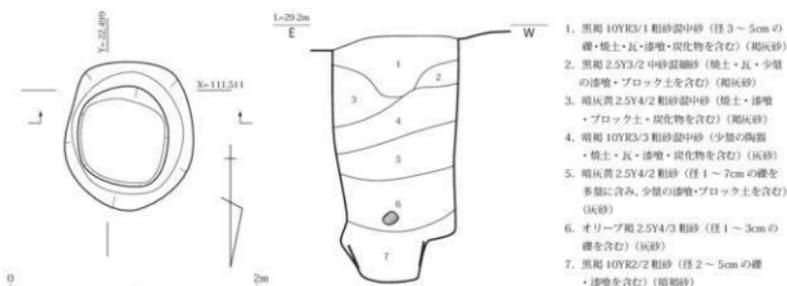


図 13 SE038 平面・土層断面図 (S=1/40)

土に火災の痕跡は確認できない。

埋土内から 18 世紀後半頃の遺物が出土した。

SE037 (図 12、図版 5)

調査区南半で検出した井戸である。重複関係から SG100 に後出すると考えられる。直径約 120cm、深さ 190cm の円形を呈する。井戸枠は残存しなかったが、埋土中層から大量の漆喰製井戸枠片が出土したことから、漆喰製井戸枠を持つ井戸であると推定される。井戸枠は全て原位置を留めず、井戸枠は全て抜き取られたと考えられる。埋土上層と下層に時期差はなく、比較的短期間で廃絶が想定できる。埋土内から多数の焼土が出土し、火災後の片付けによって埋められたと考えられる。

埋土内から 19 世紀の遺物が出土した。

SE038 (図 13、図版 5・6)

調査区南半で検出した井戸である。重複関係から SG100 に後出すると考えられる。長軸 120cm、短軸約 105cm、深さ 200cm の円形を呈する。井戸枠は残存しなかったが、最下層に曲物の一部が残存した。痕跡から復元できる曲物直径は 44cm 前後が推定できる。井戸枠痕跡は最下層のみであり、上部の井戸枠は抜き取りが行われたと考えられる。埋土上層と下層に時期差はなく、比較的短期間で廃絶した遺構と考えられる。埋土内から多数の焼土が出土し、火災後の片付けによって埋められたと考えられる。

埋土内から 19 世紀中葉の遺物が出土した。

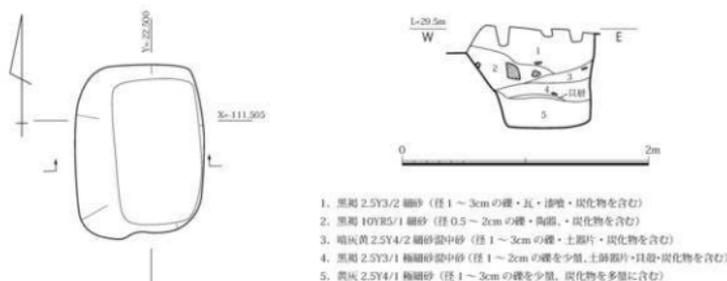


図 14 SK024 平面・土層断面図 (S=1/40)

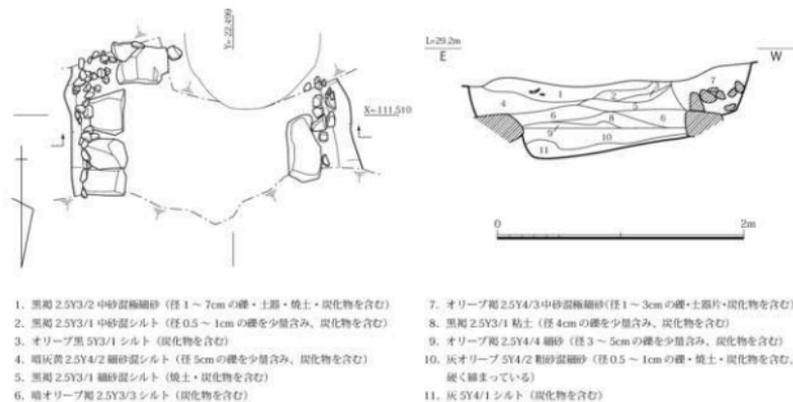


図 15 SK040 平面・土層断面図 (S=1/40)

土坑

SK024 (図 14、図版 6)

調査区北西端で検出した土坑である。長軸 138cm、短軸 104cm、深さ 80cm を測り、断面形態は箱形を呈する。埋土は最下層に炭化物を多量に含む極細砂、中間に土器、貝殻を主とする層が介在する。上層は土器、礫、炭化物を多量に含む人為的埋土である。炭化物を多く含むものの、火災片付痕とするほどの量ではない。

埋土内から 18 世紀中葉～後半の遺物が出土した。

石室

SK040 (図 15、図版 7)

調査区中央付近で検出した石室遺構である。内法長軸 130cm、深さ 78cm を測り、方形を呈する。基底部に径 40cm 前後の川原石を配する。残存状況が悪く全体像は不明だが、西側石列は木口面を、西

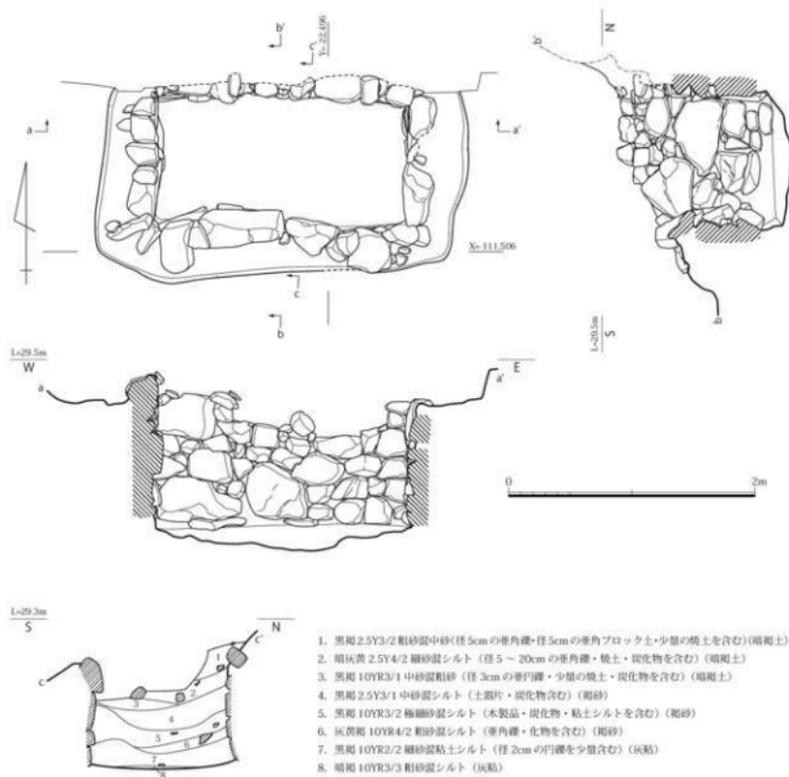


図 16 SX070 平面・立面・土層断面図 (S=1/40)

側基底石は側面を内側に向ける。2 段目以上は抜き取りが行われたと考えられる。一旦全体を掘り込んで石材を配置した後、底部に細砂（10 層）を入れ叩き締めて床面を形成している。埋土内より大量の焼土が出土したことから、火災後の片付けによって埋められたと考えられる。

埋土内から 18 世紀前半の遺物が出土した。

SX070 (図 16、図版 8)

調査区北端で検出した石室遺構である。内法長軸 200cm、短軸 100cm、深さ 122cm を測り、方形を呈する。配される石材は径 15～65cm と様々であり、特に基底石を整えるなどの造作はなされていない。石材は木口面を内側に向ける物もあるが、大半は規則性なく積み上げられる。底部には SX040 に見られたような硬化面は見られず、シルトが堆積する。埋土は 6 層以上が人為的埋土である。埋土内に焼土と炭化物は含まれるが、火災片付けほどの量ではない。

埋土内から 17 世紀中葉の遺物が出土した。

第2項 江戸時代の遺構出土の遺物

井戸

SE010 出土遺物 (図 17)

国産染付碗 (31・32) 31 はやや厚めの底部を有し、外底面に「福」を描く。32 は外面に梅樹文を描く。

国産陶器播鉢 33 は備前焼のものである。緑帯に2条の沈線を持ち、内面に13条一単位の播目を刻む。

これらの遺物はいずれも17世紀中葉～後半のものである。

SE020 出土遺物 (図 17)

土師器皿 34 は橙褐色の胎土を有し、手づくね成形を行う。焼成は良好である。口縁部2か所以上に煤の付着が見られる。

国産陶器香炉 35 は淡灰色の胎土を有し、外面に褐釉で1条の帯を描く。著しい被熱のため釉が発泡する。

国産陶器向付 36 は淡褐色の胎土を有し、透明釉を施す。外面は鉄絵で退化した草花文を描く。

国産染付碗 37 は体部外面に團線と草花文を描く。内外面著しい被熱痕を有し、高熱のため焼け歪む。

国産染付皿 38 は淡褐色の胎土を持ち、内面に梅花文と一重網目文を、外面に著しく退化した唐草文を描く。

軒丸瓦 39 は幅の広い外縁を有する巴文軒丸瓦である。瓦当面には范の割れが確認でき、丸瓦接合部にはカキヤブリが見られる。

銅製釘 40 は頭部径11mmを測る丸釘である。長さ31mmを測り、一寸釘と考えられる。

これらの遺物は19世紀中葉のものと考えられる。

SE030 出土遺物 (図 17)

国産陶器皿 (41・42) 41 は鼠志野皿である。釉は比較的薄く、貫入が著しい。内面に千鳥文、外面に草文を鉄絵で描く。42 は黄瀬戸皿である。口縁部を小さく輪花に造り出し、外面は明瞭なケズリ痕を有する。

これらの遺物は17世紀中葉～後半のものと考えられる。

SE034 出土遺物 (図 17、図版 30)

土師器皿 43 は淡褐色で雲母片を多く含む胎土を有する。全面ユビオサエ調整を施し、口縁部のナデは見られない。

国産染付碗 44 は丸碗である。白色で精良な胎土を有し、外面に花文を大きく描く。

国産陶器碗 (45・46) 45 は淡灰色の胎土と貫入を持つ釉を施し、外面高台付近は露胎である。外底面高台内には漆が溜まる。パレットとしての使用が考えられる。外面に桜花文を鉄絵で描く。46 は淡褐色の胎土と白色の釉を施す。外面高台付近は露胎で、高台は削り出して成形する。内面に大量の赤色・白色顔料が付着する。分析の結果赤はベンガラ、白は鉛白と判明した(第4章参照)。

国産陶器播鉢 47 は信楽焼のものである。淡褐色で長石を多く含む胎土を有し、内面には7条一単位の播目を、内底面にも斜格子状の播目を有する。

これらの遺物は18世紀後半頃のものである。

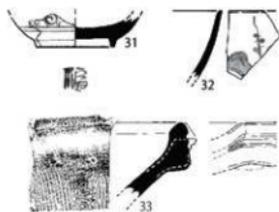
SE037 出土遺物 (図 18)

国産陶器盃 48 は淡褐色の胎土を有し、内面白色、外面褐色の釉を施す。

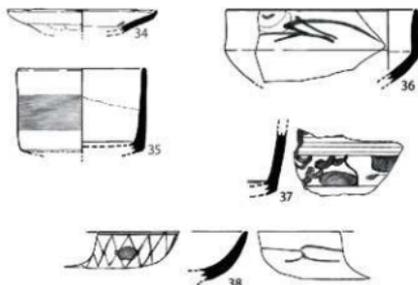
国産染付蕎麦猪口 49 は白色で精良な胎土を持ち、外面に花文・菱文を描く。

これらの遺物は19世紀のものである。

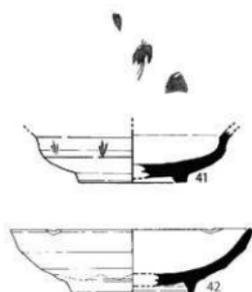
SE010 (31～33)



SE020 (34～40)



SE030 (41～42)



0 10cm

SE034 (43～47)

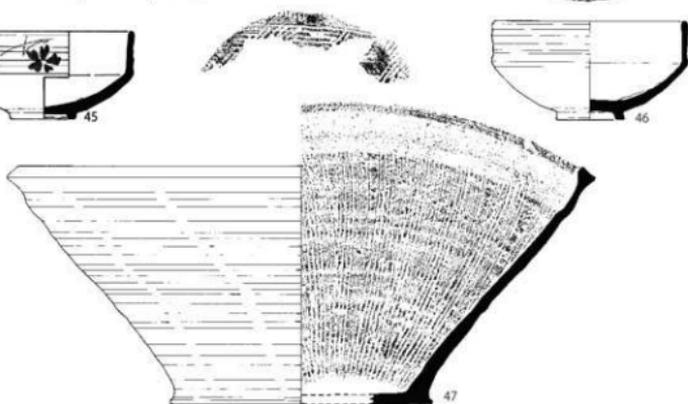
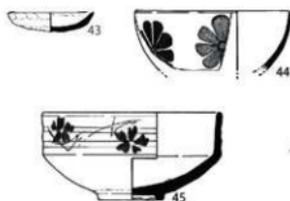


図 17 SE010・020・030・034 出土遺物実測図 (S=1/3)

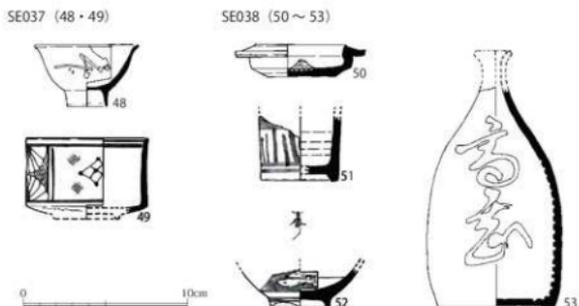


図 18 SE037・038 出土遺物実測図 (S=1/3)

SE038 出土遺物 (図 18、図版 30)

国産陶器蓋 50 は土瓶の蓋である。白色の胎土を有し、やや黄色かかった透明釉を施す。内面は露胎である。

国産染付徳利 51 は細身の徳利である。外面連子文を描き、呉須はややくすむ。

国産染付椀 52 は小ぶりの高台を持つ丸椀である。内面見込み部に「寿」を手描きする。

国産陶器徳利 53 は灰褐色の胎土で全面に褐釉を施す。釉は外底面にも及ぶ。外面 2 面に白釉で「高甚」と描く。

これらの遺物は 52 が 18 世紀後半であるほかは 19 世紀中葉のものと考えられる。

土坑

SK024 出土遺物 (図 19・20、図版 30～32)

土師器皿 (54～65) 54～60 はいずれも口径 5.0～5.5cm 前後を測る小皿である。胎土は橙褐色で微細な雲母片を含む。内面ナデ調整、外面ユビオサエ調整を施し、外底面を強いユビナデによってわずかに窪める。57・59 は口縁端部に煤の付着が認められる。61・62 は口径 7.5cm 前後を測る。胎土は小皿に共通するが、外底面の窪みは認められない。62 は口縁端部に煤の付着が認められる。63・64 は口径 10cm 前後を測り、63 は小皿と共通する胎土、64 は淡褐色で雲母を含まない胎土である。両者ともに内面底体部境界付近に工具のあたりと思われる沈線が確認できる。64 は著しく被熱する。65 は白色の胎土を有し、口縁部をシボリにより王冠状に仕上げる。

土師器杯 66 は灰白色の精良な胎土を有し、内外面回転ナデ調整を施す。外底面には回転ヘラキリの痕跡が残る。

土師器小壺 67 はいわゆる「つぼつぼ」である。灰白色の精良な胎土を有し、手づくね成形の後ナデ調整を施す。

土師器焙烙 68 は淡褐色の胎土を有し、下半は外型による成形ののち内面ナデ調整、外面未調整、上半はユビオサエの後ナデ調整を行う。外面には被熱痕を有する。

国産染付皿 (69・78) 69 は内外面全面施釉で高台接地部のみ露胎である。内面見込み部は蛇の目輪

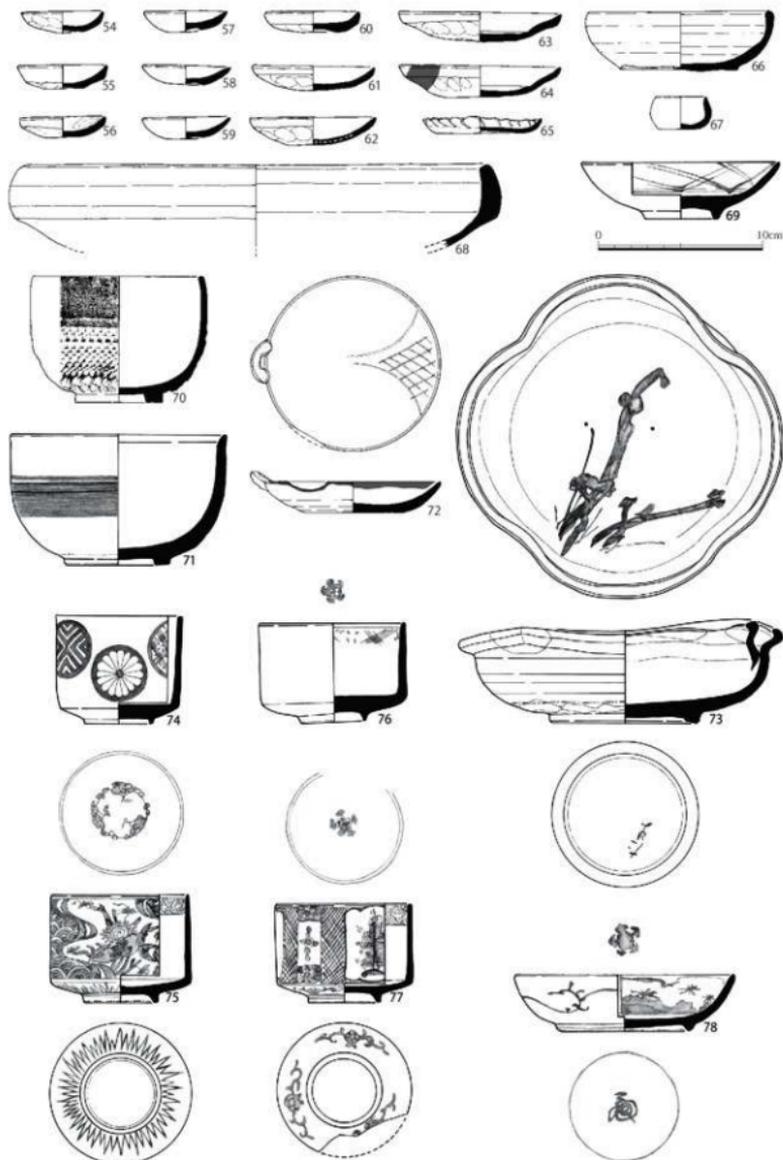


図19 SK024 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)

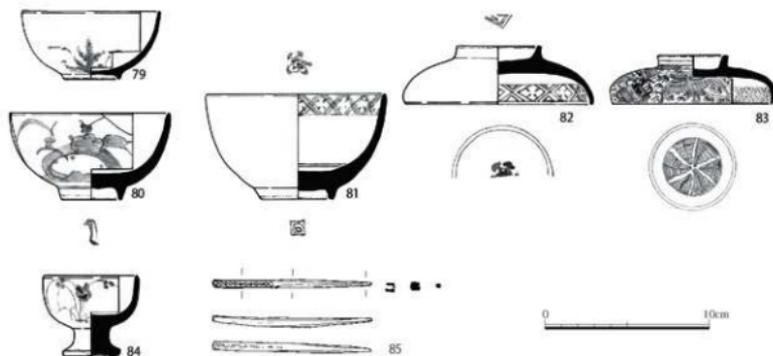


図 20 SK024 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)

刺ぎする。78は内面見込み部に印判五弁花を施し、外底面には渦福字文を描く。高台接地部には砂が付着する。

国産陶器碗 (70・71) 70は淡褐色の胎土を有し、外面下半にはヘラによる複雑な押圧文を刻む。外底面および高台接地部以外の外面下半に褐釉、それ以外の場所には淡黄緑色の釉を施す。内面には三又トチンの痕跡が残る。71は淡褐色の胎土を有し、外底面および高台接地部以外の全面に施釉する。釉の発色は70と共通する。体部中央に褐釉による帯を描く。

国産陶器灯明皿 72は軟質陶器のものである。内外面回転ナデ調整の後、外面回転ヘラケズリで仕上げる。内面には線刻が見られる。口縁部全面に厚く油煙が付着する。

国産陶器鉢 73は淡褐色の胎土を有し、外面体部下半以外の全面に透明釉を施す。内面には鉄絵で樹枝文が描かれ、見込み部には三又トチンの痕跡が残る。外底面には「たま」の墨書が見られる。当資料はSK024出土のものとはSE034出土のものが遺構間接合した。

国産染付蕎麦猪口 (74～77) 74・75は青みがかかった透明釉を、高台接地部を除く全面に施す。76は青磁染付である。四方禪文は発色が悪く、呉須が流れる。内面見込み部には手描き五弁花を描く。全体的に歪んでおり、正位に置いた際に口縁部が水平にならない。77は内面見込み部に手描き五弁花を描く。

国産染付碗 (79～81) 79はやや青みがかかった釉を施し、全体的に微細な貫入が目立つ。80は釉の発色が悪く、ややくすんだ釉調である。高台接地部は露胎で、胎土が橙褐色に発色する。外底面には呉須で「一」と書かれる。81は青磁染付である。内面見込み部には手描き五弁花文、外底面には渦福字文が描かれる。

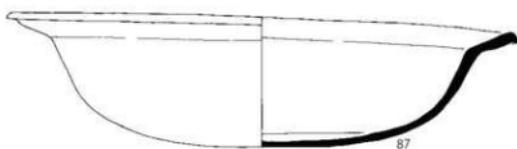
国産染付蓋 (82・83) 82は青磁染付である。天井部内面には手描き五弁花文、天井部外面には渦福字文が描かれる。83は天井部内面に芭蕉文を描く。

国産染付仏飯器 84は陶胎染付である。脚部外底面は露胎である。

骨角製品 85は棒状の本体に12個の貫通しない円孔を穿ち、背面に溝を切り、溝の部分のみ対面の円孔と接続する構造を有する。

これらの遺物は18世紀中葉～後半のものである。

SX040 (86・87)



SX070 (88～96)

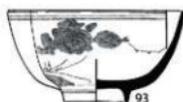
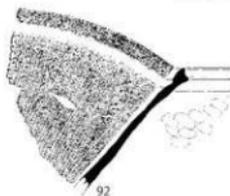


図 21 SX040・070 出土遺物実測図 (S=1/3)

石室

SX040 出土遺物 (図 21、図版 33)

国産染付碗 86 は精良な胎土を有し、高台接地部には砂が付着する。外底面には判読不能な記号が描かれる。

土師器鍋 87 は橙褐色の精良な胎土を有する。外面口縁部付近まで外型成形し、内面はナデ調整を施す。内外面被熱痕を有する。

これらの遺物は 18 世紀前半のものである。

SX070 出土遺物 (図 21、図版 33)

土師器皿 88 は褐色で雲母を多く含む胎土を有する。外面ユビオサエ、内面ナデ調整を施す、口縁部には一か所煤の付着が見られる。

国産青磁椀 89 は体部外面下半が露胎で、軸は二度掛けする。内面見込み部には暗色の釉で放射状文を描く。

国産陶器椀 90 は内外面回転ナデ調整の後、体部下半を丁寧に回転ヘラケズリする。内面見込み部には段がつく。全面に白釉を薄く施す。

国産陶器皿 91 は全面に薬灰釉を薄く施す。釉は外底面まで及ぶ。内面見込み部には目跡が4か所残る。

国産陶器播鉢 92 は丹波焼のものである。口縁部内面に1条の沈線が回り、内面には8条一単位の播目を施す。

国産染付椀 93 は白色で精良な胎土を有し、透明感のある釉を施す。外底面には「宣徳年製」の銘を描く。

国産染付皿 (94・95) 94 は陶質の胎土を有し、釉は貫入が多く粗雑である。呉須の発色も悪い。95 はやや青みがかった釉を施し、体部はユビオサエによる連続した凹凸を持つ。口縁部には口紅を施す。

輸入染付皿 96 は漳州窯系の大皿である。外底面は露胎、高台には砂が付着する。

これらの遺物は17世紀中葉のものである。

第3項 室町時代の遺構

溝

SD031 (図 22、図版 9)

調査区西壁付近を南北に横切る溝である。幅132cm、深さ62cmを測り、断面形態は「U」字形を呈する。重複関係からSG100に後出すると考えられる。埋土は中粒砂を主体とし、ブロックなどは含まないが、流水の痕跡も確認できない。遺存状況が悪く、傾斜等は確認できない。屋敷地の背割溝などの可能性が考えられるが詳らかでない。

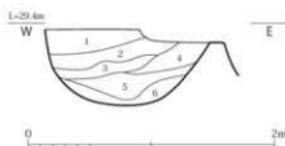
埋土内から15世紀後半頃の遺物が出土している。

池

SG100 (図 23、図版 9・10)

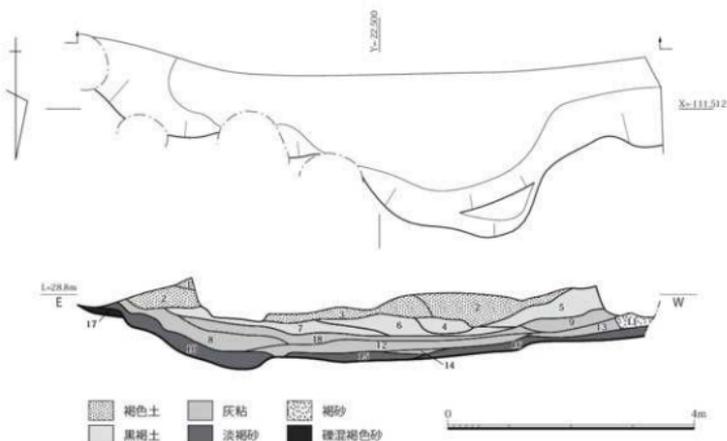
調査区南半で検出した池状遺構である。重複関係からSD031に先行すると考えられる。検出長軸940cm、深さ104cmを測る。大半が調査区外のため詳細は不明である。埋土は大きく4つの単位に分かれる。最上層にあたる褐色土(1～3層)は土器、礫、ブロック土を多く含む人為的埋土で、埋土内から15世紀後半頃の土器が出土している。上層にあたる黒褐色土(4～7層)も土器、礫、ブロック土を多く含む人為的埋土である。最上層と上層は同時に投入された可能性が考えられる。中層にあたる灰粘(8・9・11～14・18層)は礫や土器を多く含むがブロック土をほとんど含まない。上面に1～10cm程度の礫を多量に投棄している。礫は州浜とするには密度が低く、意図的な投棄とするより周辺から土砂とともに投棄された状況である。埋土内から15世紀中葉頃の土器が出土している。下層にあたる淡褐色砂(10・15・16・17層)は礫と土器を含むがブロック土をほとんど含まない。埋土内から14世紀後半～15世紀前半の土器が出土している。

以上のように、本遺構は池と位置づけられているが滞水状況を確認できず、開口した巨大な土坑状を呈していたと思われる。検出範囲が一部であるため、その性格については今後の調査の課題としたい。



1. 期灰黄 2.5Y4/2 粗砂混中砂 (径 1～2cm の礫・土器片・焼土・炭化物を含む)
2. オリーブ期 2.5Y4/3 粗砂混中砂 (径 2～3cm の礫・土器片・炭化物を含む。第 1 層に比して焼土を多量に含む)
3. 黄期 2.5Y5/3 粗砂混中砂 (径 1cm の礫・土器片・焼土・炭化物を含む)
4. 期灰黄 2.5Y5/2 粗砂混中砂 (径 1～2cm の礫・焼土・炭化物を含む)
5. オリーブ黒 5Y3/2 中砂混細砂 (炭化物を含み、焼土を少量含む)
6. 黒期 2.5Y3/2 中砂混細砂 (径 1cm の少量の礫・土器片を含む)

図 22 SD031 土層断面図 (S=1/40)



1. 期灰黄 2.5Y4/2 中砂混細砂 (径 0.5～4cm の礫・少量の土器片を含む)
2. オリーブ期 2.5Y4/3 極細砂 (径 0.5～5cm の礫を含み、土器片・ブロック土を少量含む)
3. 黒期 2.5Y3/2 シルト (径 0.1～5cm の礫・少量の土器片を含む)
4. オリーブ黒 5Y3/2 シルト 5Y3/2 (径 0.2～1cm の礫を含み、土器片・ブロック土を少量含む)
5. 期オリーブ期 2.5Y3/3 シルト (径 1～5cm の礫を含み、土器片・炭化物を少量含む)
6. オリーブ黒 5Y3/1 粗砂混極細砂 (径 2～20cm の礫を含み、土器片・ブロック土を少量含む)
7. 期灰黄 2.5Y4/2 粗砂混シルト (径 0.5～3cm の礫・少量の土器片を含む)
8. 黒期 2.5Y3/2 極細砂 (径 5cm 前後の砂石・少量の土器片を含む) (上面に礫散)
9. 期オリーブ期 2.5Y3/3 粗砂混シルト (径 4cm の礫・少量の土器片を含む)
10. 期灰黄 2.5Y4/2 シルト (径 1～3cm の礫・少量の土器片を含む)
11. 灰黄期 10YR4/2 粗砂 (径 3cm の礫・土器片を少量含む)
12. 黒期 2.5Y3/2 中砂混シルト (径 2～4cm の礫・少量の土器片・炭化物を含む) (上面に礫散)
13. にぶい黄期 10YR4/3 粗砂混中砂 (径 4cm の礫を少量含む)
14. 期灰黄 2.5Y4/1 粗砂混シルト (径 4cm の礫・炭化物を少量含む)
15. 黒期 2.5Y3/1 細砂混シルト (径 3cm の礫・土器片・炭化物を少量含む。最下層に鉄屑あり)
16. 期灰黄 2.5Y4/2 中砂混シルト (径 5～10cm の礫・土器片を含み、ブロック土・炭化物を少量含む)
17. 期灰黄 2.5Y4/2 中砂混細砂 (径 1～3cm の礫を含む)
18. 黒期 10Y3/1 中砂混細砂 (径 1～5cm の礫・土器片を含む)

図 23 SG100 平面・土層断面図 (S=1/80)

土坑

SK019 (図 24、図版 11)

調査区北東隅で検出した土坑である。残存長軸 121cm、深さ 65cm を測る。大半が破壊されており規模等は詳らかではない。断面形態「U」字形を呈し、埋土は上層 (1 層) がブロック土を含む人為的埋土である。

埋土内から 16 世紀後半の土器が出土している。

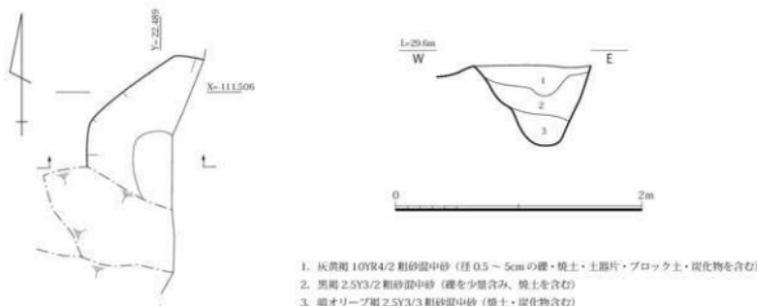


図 24 SK019 平面・土層断面図 (S=1/40)

第 4 項 室町時代の遺構出土の遺物

溝

SD031 出土遺物 (図 25、図版 33)

土師器皿 (97 ~ 99) 97 は灰褐色の胎土を有し、内面には被熱痕を有する。98 は淡褐色の胎土を有し、口縁部内面にはナデによるごく弱い面を持つ。99 は白色の胎土を有し、口縁部内面にはナデによるごく弱い面を持つ。

国産陶器壺 100 は古瀬戸祖母懷茶壺である。後Ⅱ期 (14 世紀末 ~ 15 世紀初頭) のものである。

国産陶器搦鉢 (101・102) 101 は信楽焼のものである。淡褐色の胎土を有し、口唇部には 1 条の沈線が巡る。内面には多条搦目が確認できるが、表面劣化のため詳らかでない。Ⅱ期古段階 (15 世紀中葉 ~ 16 世紀初頭) のものである。102 は備前焼のものである。口縁部の縁部に沈線は見られない。内面の搦目については不明である。Ⅳ B 期 (15 世紀中葉 ~ 後半) のものである。

輸入陶器天目碗 103 は灰褐色の胎土を有し、薄手で口縁部はシャープである。中国製のものである。

碁石 104 は長石製のものである。一部に自然の欠損部を残す。

これらの遺物は 100 が若干古いものの、概ね 15 世紀後半頃のものである。

池

SG100 出土遺物 (図 25、図版 33・34)

【褐色土】

土師器皿 (105 ~ 108) いずれも褐色 ~ 淡褐色の胎土を有し、ナデにより外反する体部と、端部にわずかに面を構成する口縁部を有する。

国産陶器鉢皿 109 は古瀬戸後Ⅰ期のものである。

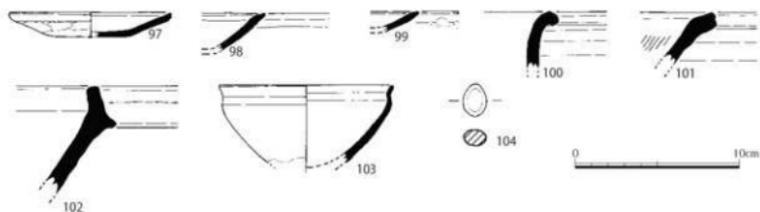
【黒褐色土】

土師器皿 110 は暗褐色の胎土を有し、口縁部を 2 段ナデする。12 世紀初頭頃のもので、混入と判断できる。

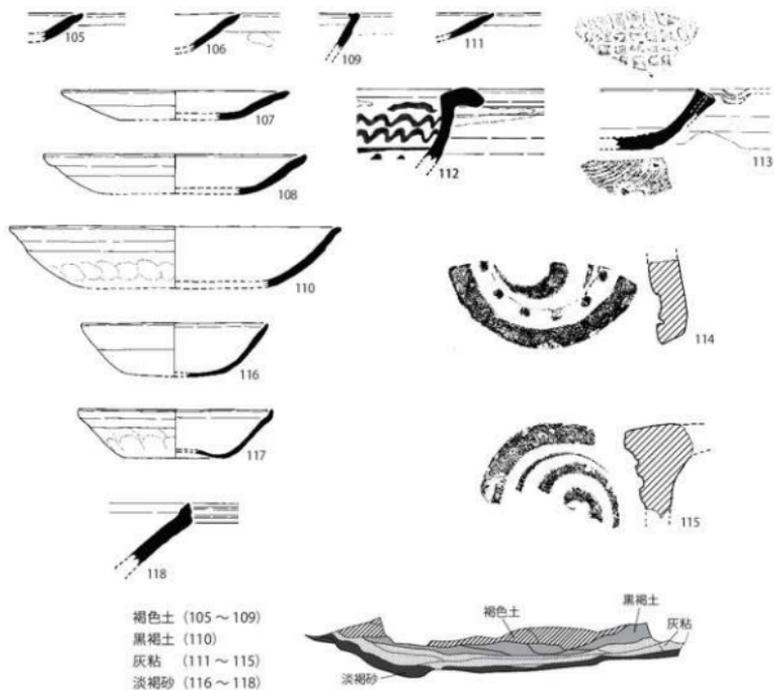
【灰粘】

土師器皿 111 は淡褐色の胎土を有し、口縁端部にわずかに玉縁を造り出す。

SD031 (97~104)



SG100 (105~118)



SK019 (119~121)

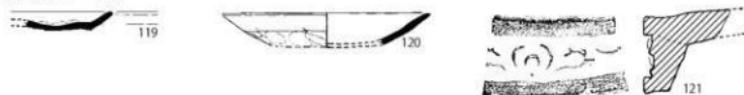


図 25 SD031、SG100、SK019 出土遺物実測図 (S=1/3)

輸入陶器鉢 112 は灰褐色で砂粒を多く含む胎土を有し、内面に黄釉と鉄絵を施す。中国華南産のものである。

国産陶器鉢皿 113 は古瀬戸のものである。淡褐色の胎土を有し、内面全面および外面上半に藁灰釉を施す。古瀬戸後1期のものである。

軒丸瓦 (114・115) ともに巴文軒丸瓦である。114は内外面イブシをかける。115は土師質の胎土・焼成を持ち、調整も非常に粗い。

【淡褐色】

土師器皿 (116・117) ともに白色系の胎土を有し、口縁部は小さく玉縁を造り出す。京IX期古～中段階の年代が考えられる。

須恵器鉢 118 は東播系のものである。灰色の胎土を有し、口縁部に暗色帯を持つ。

これらの遺物は混入品を除き褐色土出土のものが15世紀後半頃、灰粘土出土のものが15世紀中葉頃、淡褐色出土のものが14世紀後半～15世紀前半頃のものと考えられる。

土坑

SK019 出土遺物 (図25、図版34)

土師器皿 (119・120) 119は回転台土師器である。褐灰色の胎土を有し、外底面にはヘラキリの痕跡と板目圧痕が残る。120は橙褐色の胎土を有し、口縁部内面にはナデによる面を持つ。

軒平瓦 121 は唐草文軒平瓦である。淡褐色の胎土を持ち、イブシはほとんどかからない。瓦当面は貼り付け技法で成形し、接合部にはカキヤブリ痕が確認できる。

これらの遺物は16世紀後半のものと考えられる。

第4節 第2遺構面の遺構と遺物

第1項 平安時代後期～室町時代初期の遺構

柱列

SA170 (図26、図版14)

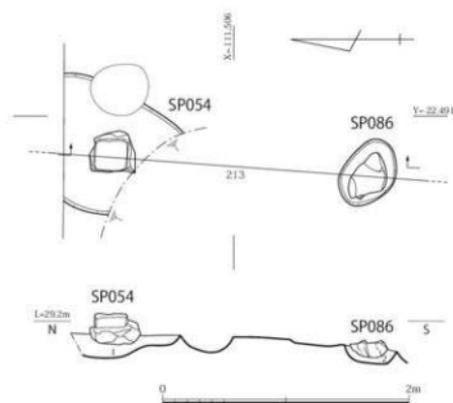
調査区東北隅で検出したビット SP054・086で構成される。SP054は直径100cm前後の楕円形掘方を有し、中心に切石礎石を据える。礎石は花崗岩製で、方形の四隅を切った形状を有する。礎石の四辺はほぼ座標方位を有する。SP086は長軸58cm、短軸42cm、深さ16cmを測り、中心部に長軸40cm前後の砂岩製礎石を据える。SP054・086は礎石中心間距離213cmを測り、両者は一連の柱列である可能性がある。ただし現状では建物を構成するであろう柱穴を検出しておらず、建物等の復元は不可能であった。

溝

SD106 (図27、図版14・15)

調査区北西隅で検出した溝である。重複関係からSK090に先行すると考えられる。深さ6cmを測り、攪乱により北半分を破壊されるため幅は不明である。断面形態皿形を呈し、埋土内に大量の礫を含む。礎水などの可能性も考えられるが、破壊が著しく詳細は不明である。

埋土内から12世紀後半の遺物が出土した。



1. 明期 10YR3/4 シルト凝結砂 (径 0.5 ~ 2cm の礫・土器片を含む)
2. 明オリーブ期 2.5Y3/3 凝砂 (径 2cm 程度の不定形な赤い・黄褐色 10YR4/3 ブロック・土器片を含む)

図 26 SA170 平面・土層断面図 (S=1/40)



1. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混中砂 (径 1 ~ 4cm の重円礫を大量に含み、ブロック土・少量の炭化物を含む)

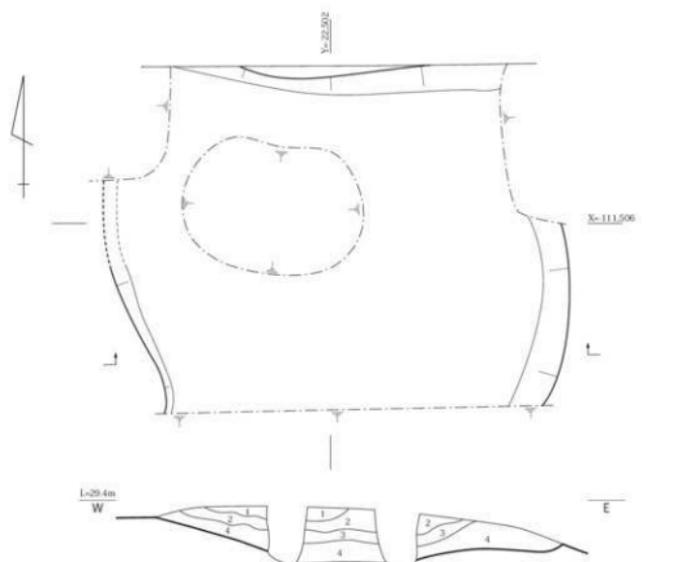
図 27 SD106 平面・土層断面図 (S=1/40)

土坑

SK090 (図 28、図版 15)

調査区北西部で検出した大型の土坑。重複関係から SD106 に後出すると考えられる。直径 370cm、深さ 48cm を測り、断面形態皿形を呈すると考えられる。埋土は上層に土器片、炭化物を含む細砂（北壁 42 層）、下層に土師器皿を主体とする細砂（同 43 層）が存在する。下層は埋土よりも土師器皿が主体であった。

埋土内から 13 世紀前半の遺物が出土した。



1. 黄褐色 2.5Y5/3 中砂混細砂（径 1cm の礫・土器片を少量含む、炭土・炭化物を含む）
2. 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂混細砂（径 2cm の礫を少量含む、土器片・炭土・炭化物を含む）
3. 暗褐色 10YR3/3 細砂混中砂（土器片を多量に含む、炭化物を少量含む）
4. オリーブ色 2.5Y5/3 細砂（土器片密集し、1～9層中最も多量に含む、炭化物を少量含む）

図 28 SK090 平面・土層断面図 (S=1/40)

第 2 項 平安時代後期～室町時代初期の遺構出土の遺物

柱列

SA170 出土遺物（図 29、図版 34）

礎石 122 は SP054 に据えられていた花崗岩製礎石である。原礎から柱座を削り出す。柱座は一辺約 25cm、高さ 7cm の方形を呈し、四隅を隅切りする。柱痕跡などは不明である。

溝

SD106 出土遺物（図 30、図版 34）

土師器皿 123 は淡褐色でクサリ礫を多く含む胎土を有する。口縁部のナデは底体部境界付近に及ぶ。口縁部に複数の煤の付着が確認できる。

須恵器椀 124 は灰色の胎土を有し、外底面には回転イトキリの痕跡が残る。東播系の可能性が高い。

輸入白磁椀 125 は V 類の底部である。白色で精良な胎土を有し、外底面を除く内外面に施釉する。

これらの遺物は 12 世紀後半のものである。

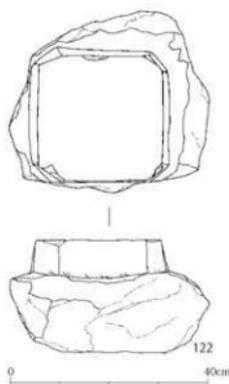


図29 SA170 (SP054) 出土遺物実測図 (S=1/10)

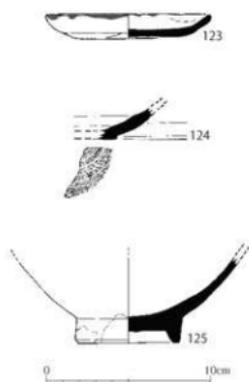


図30 SD106 出土遺物実測図 (S=1/3)

土坑

SK090 出土遺物 (図31、図版34・35)

土師器皿 (126～143) 126・127 はいずれも橙褐色を呈し、やや大粒の長石とチャート粒を含む胎土を有する。強いユビオサエで器面の凹凸が大きい。128・131・134～136・138 は褐色の胎土を有し、口縁部は丸く収める。129・130・132・133・137 はやや暗い色調の胎土を有し、口縁端部にナデによる面を持つ。139 は橙褐色の胎土を持ち、他に比べてやや口径が大きい。140 はコースター状の皿である。暗褐色の胎土を有し、屈曲部には面を持たない。141 は褐色の胎土を持ち、口縁部のナデは弱く、端部を丸く収める。142 は褐色の胎土を持ち、口縁端部には面を持つ。143 は淡褐色の胎土を有し、口縁端部には面を持つ。外底面には板目圧痕を残す。

瓦器椀 144 は和泉型のものである。灰白色の胎土を持ち、内外面イブシは良好である。内面のみ粗いヘラ磨きを施す。Ⅲ-2期のものである。

瓦器皿 145 は和泉型のものである。灰白色の胎土を持ち、内外面イブシは良好である。体部内面及び見込部にヘラ磨きを施す。144 に比して古い印象を受ける。

瓦器鉢 146 は灰白色の胎土を有し、外面ユビオサエ、内面ナデ調整を施す。二次焼成のため調整等は不明である。C3類のものである。

輸入白磁椀 (147・148) 147 はⅡ類のものである。わずかに黒色粒子を含む精良な胎土を有する。148 はⅣ類のものである。内面見込み部に1条の沈線が巡る。

輸入白磁皿 149 はⅥ類のものである。

軒丸瓦 (150～152) いずれも巴文軒丸瓦である。150 は二次焼成のため劣化が著しい。巴文は浅く、范の割れが顕著に表れる。151 は黒灰色を呈し、瓦当面に離れ砂が見られる。152 は淡灰色を呈し、巴文は深く彫出される。范傷も少ない。

これらの遺物は13世紀前半のものである。

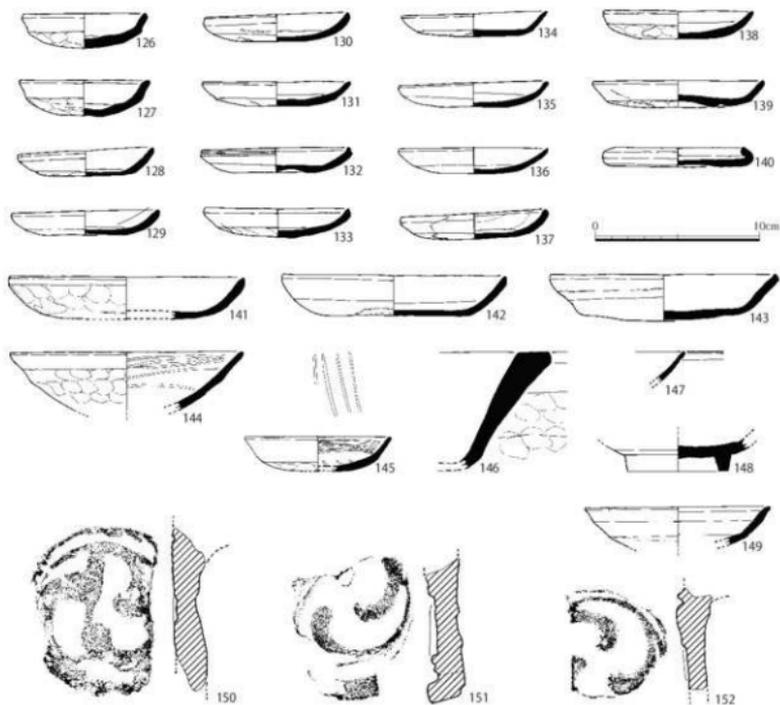


図 31 SK090 出土遺物実測図 (S=1/3)

第 5 節 第 3 遺構面の遺構と遺物

第 1 項 平安時代後期の遺構

土坑

SK110 (図 32、図版 17)

直径 288cm 以上、深さ 50cm を測る大型の土坑である。後世の遺構に破壊され、形状については不明である。断面形態箱形を呈し、埋土は上層 (1・2 層) がブロック土を含まない細砂、下層 (3 ~ 6 層) が整地土 4 を母材とするブロック土を主体とする。底部は起伏が少なく平坦である。

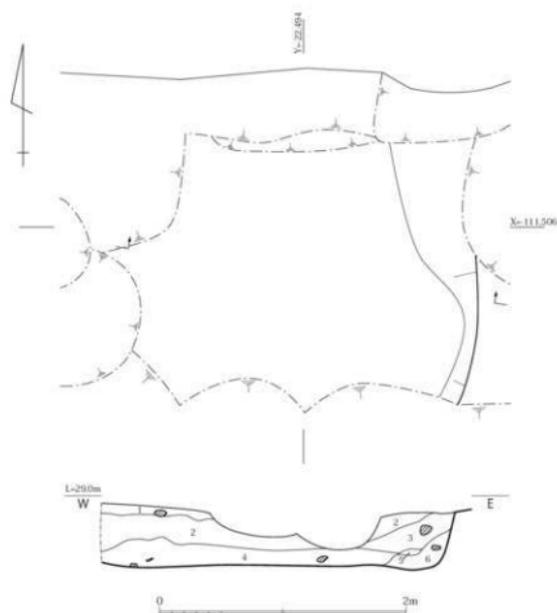
埋土内から 12 世紀前半の遺物が出土した。

第 2 項 平安時代後期の遺構出土の遺物

土坑

SK110 出土遺物 (図 33、図版 35)

土師器皿 (153 ~ 155) 153 は淡褐色の精良な胎土を有し、口縁部はナデのためわずかに外反する。



1. 灰黄 10YR4/3 細砂 (径0.2cm以下の砂粒・土部片を含む)
2. 褐 10YR4/4 粗砂混極細砂 (径1～2cmの礫・土部片・炭化物を含む)
3. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混極細砂 (土部片・黄褐色ブロックを含む)
4. 暗灰黄 2.5Y4/2 極細砂 (径1～2cmの礫・少量のウガイス土ブロックを含む)
5. 黒褐 2.5Y3/2 粗砂混極細砂 (土部片・炭化物を含む)
6. オリーブ褐 2.5Y4/3 シルト (ウガイス土ブロックを含む)

図 32 SK110 平面・土層断面図 (S=1/40)



図 33 SK110 出土遺物実測図 (S=1/3)

154 は「て」字状口縁のものである。胎土は淡褐色で精良である。155 は灰褐色の胎土を有し、口縁部を強く 2 段にナデ調整する。

これらの遺物は 154・155 が 11 世紀末頃の様相を持つが、153 が 12 世紀前半の形状である。

第 6 節 第 4 遺構面の遺構と遺物

第 1 項 平安時代後期の遺構

掘立柱建物

SB160 (図 34、図版 19)

調査区東端で検出した掘立柱建物である。東西 1 間、南北 1 間分を検出したが、それ以上の広がり

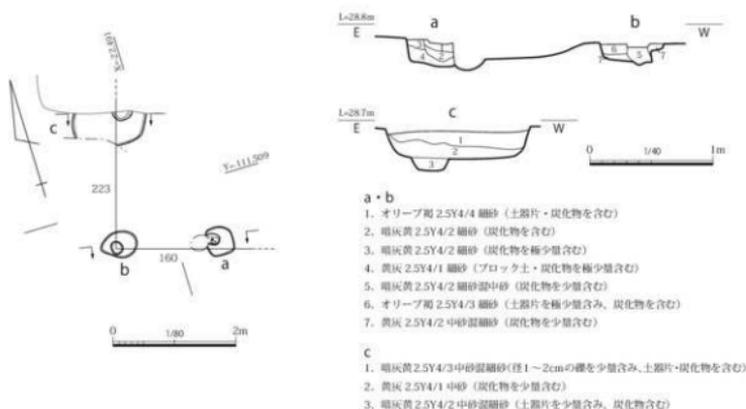


図 34 SB160 平面・土層断面図 (平面 S=1/80・断面 S=1/40)



図 35 SD130 平面・土層断面図 (S=1/40)

については不明である。柱穴は平均直径 50～60cm、柱痕跡から推定される柱直径は 20cm 程度である。柱間は東西 160cm、南北 220cm を測り、主軸方向は N-18° 51' -E である。

柱痕跡から 11 世紀後半の土器が出土した。

溝

SD130 (図 35、図版 19・20)

調査区北西で検出した溝である。重複関係から SG150 に後出すると考えられる。深さ 10cm 前後を測るが、大半が攪乱で破壊されているため詳細は不明である。埋土内にはラミナが確認され、水流の存在が窺える。溝底には直径 3～5cm 程度の礫が多数敷かれていた。西端は SG150 西岸に設置された石列にとりつく。石列上から落ちる水を受けた罅水の可能性がある。ただしこの段階では SG150 は廃

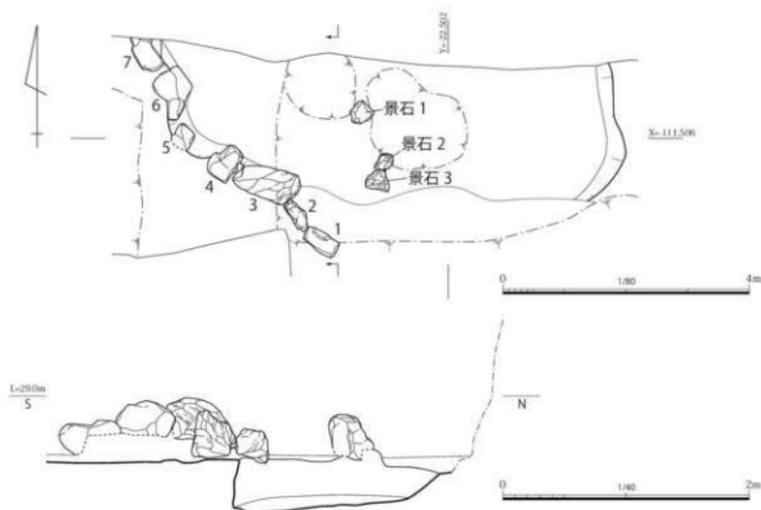


図 36 SG150 平面・立面図 (平面 S=1/80・立面 S=1/40)

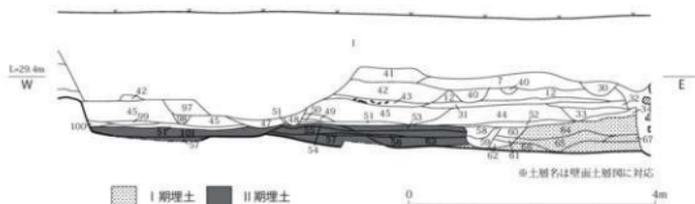


図 37 SG150 土層断面図 (S=1/80)

絶しており、南にあった池へ水を逃がした可能性も考えられる。

埋土内から 12 世紀初頭の遺物が出土した。

池

SG150 (図 36・37、図版 21・22)

調査区北西隅で検出した池である。著しく破壊されており平面形状は詳らかでない。SG150 は 3 期の変遷が認められる。

I 期は第 1 遺構面 SX070 付近までの広い範囲が池として機能していたと考えられる。この段階では西側の石列はまだ敷設されておらず、池に関連する施設については不明である。また、SG150 I 期埋土からは遺物が出土しておらず、I 期の時期については不明である。

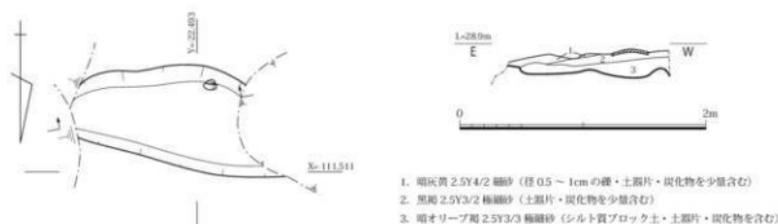


図 38 SK088 平面・土層断面図 (S=1/40)

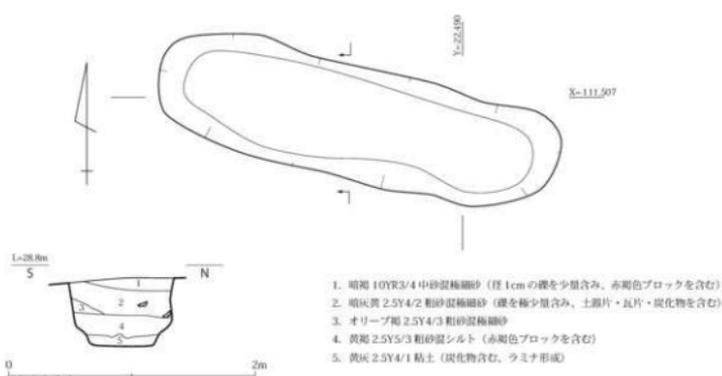


図 39 SK140 平面・土層断面図 (S=1/40)

その後 11 世紀末から 12 世紀初頭頃に、SG150 I 期を埋め立てて池を西へ縮小し、SG150 II 期が成立する。この段階では南側に州浜が作られ、池中央には景石と考えられるチャート角礫が 3 石配置される。景石はいずれも褐色のチャート角礫で、景石 1・3 は長軸を水平に、景石 2 は立石にして配置する。

その後、SG150 II 期がラミナを形成する埋土 (101 層) で自然に埋没した段階に、堆積土を掘り込んで西側に石列が設置される。石列は 6 石が残存している。最南端の石材 1 は花崗岩の加工材で、上面に柱座上の造り出しを持つため、礎石の転用品かと思われる。石材 1 以外は全てチャートの角礫である。石材 2 は白色、石材 3 は赤褐色、石材 4 は青灰色、石材 6・7 は灰白色のものである。石材 5 に相当する石は抜き取られており、掘え付け穴のみ残る。

石列設置の時期については石列背面の盛土 (75 層) から出土した遺物 (162 ~ 164) により 12 世紀初頭と考えられる。しかし SG150 は短命に終わったようで、その後ほとんど堆積層を形成することなく整地土 4 によって埋められ、最終的に整地土 3 によって 12 世紀初頭頃には石列も完全に埋没すると考えられる。

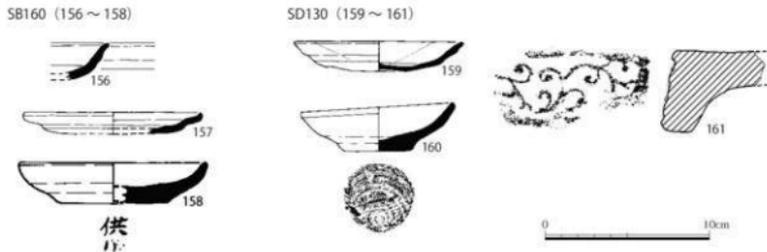


図40 SB160、SD130 出土遺物実測図 (S=1/3)

土坑

SK088 (図38、図版23)

調査区南東で検出した土坑である。長軸 185cm 以上、短軸 82cm、深さ 20cm 前後を測る長楕円形を呈する。埋土は上層に炭化物を含む細砂、下層にブロック土を多く含む極細砂が存在する。上層から縄目タタキを持つほぼ完形の平瓦が出土した。

埋土内から 12 世紀初頭の遺物が出土した。

SK120 (図版24)

調査区北東隅で検出した土坑である。重複関係から SK136・140 に後出すると考えられる。周辺の土坑に輪郭をすべて破壊されており、包含層状になって残存する。このため規模、形状等は一切不明である。埋土はブロック土を含む人為的埋土である。

埋土内から 12 世紀初頭の遺物が出土した。

SK136 (図版24)

調査区北東隅で検出した土坑である。重複関係から SK120・140 に後出すると考えられる。大半が調査区外で、残存部分も攪乱により破壊されており、規模については不明である。深さ 10cm 前後を測り、埋土はブロック土を含む人為的埋土である。

埋土内から 11 世紀前半の遺物が出土した。

SK140 (図39、図版23・24)

調査区北東で検出した土坑である。長軸 334cm、短軸 90cm、深さ 57cm を測る溝状を呈する。断面形態は箱形を呈し、底部は比較的平坦である。埋土は下層(5層)にはラミナが見られ、開口した状態であったことが窺えるが、上層は全て土器片やブロック土を含む人為的埋土である。

上下いずれの層位からも 11 世紀中葉の遺物が出土した。

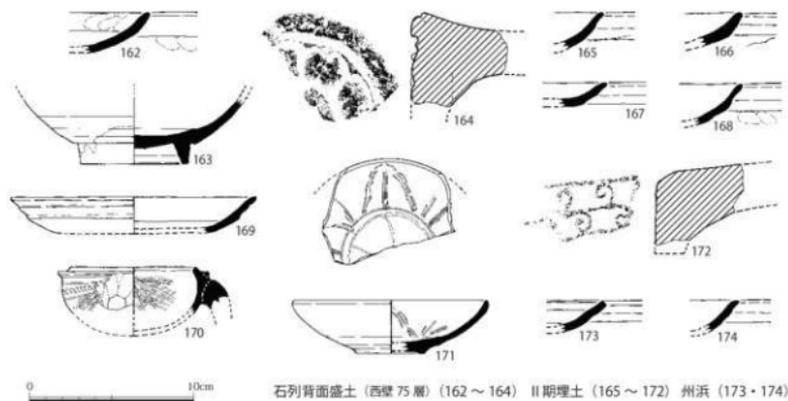
第2項 平安時代後期の遺構出土の遺物

掘立柱建物

SB160 出土遺物 (図40、図版35)

土師器皿(156~158) 156は淡褐色で金雲母を多く含む胎土を有し、口縁部は強く2段にナデ調整する。157は「て」字状口縁のものである。胎土は淡褐色で長石粒を多く含む。158は回転台土師器である。白色の胎土を有し、外底面には回転イトキリの痕跡が残る。外底面に「供□」の墨書が残る。

これらの遺物は 11 世紀後半のものである。



石列背面盛土（西壁 75 層）(162～164) II 期埋土 (165～172) 州浜 (173・174)

図 41 SG150 出土遺物実測図 (S=1/3)

溝

SD130 出土遺物 (図 40)

土師器皿 159 は淡褐色の胎土を有し、口縁部を強く 2 段にナデ調整する。口縁部には煤の付着が見られる。

白色土器杯 160 は内外面回転ナデ調整を施し、外底面には回転イトキリの痕跡が残る。

軒平瓦 161 は唐草文軒平瓦である。瓦当面は折り曲げ技法で成形される。二次焼成による表面劣化のため調整等は不明である。

これらの遺物は 12 世紀初頭のものである。

池

SG150 出土遺物 (図 41、図版 35・36)

【石列背面盛土】

土師器皿 162 は橙褐色を呈し砂粒を多量に含む胎土を有し、通常の土師器皿とはやや異なるものである。

輸入白磁椀 163 は V 類である。外面の釉薬は丁寧なツケガケである。

軒丸瓦 164 は蓮華文軒丸瓦である。残存部位から復元すると 8 弁が復元できる。胎土は灰色を呈し、砂粒を多く含む。

【II 期埋土】

土師器皿 (165～169) いずれも淡褐色で砂粒をやや多く含む胎土を有し、口縁端部を強く 2 段にナデ調整する。

黒色土器三足釜 170 は B 類のものである。脚部は丁寧にヘラ状工具による面取りで成形する。口縁部から脚部に至るまで丁寧にヘラ磨きを施す。

輸入白磁皿 171 は VII-2b 類のものである。低い削り出し高台を有し、内面に芭蕉文を手描きする。

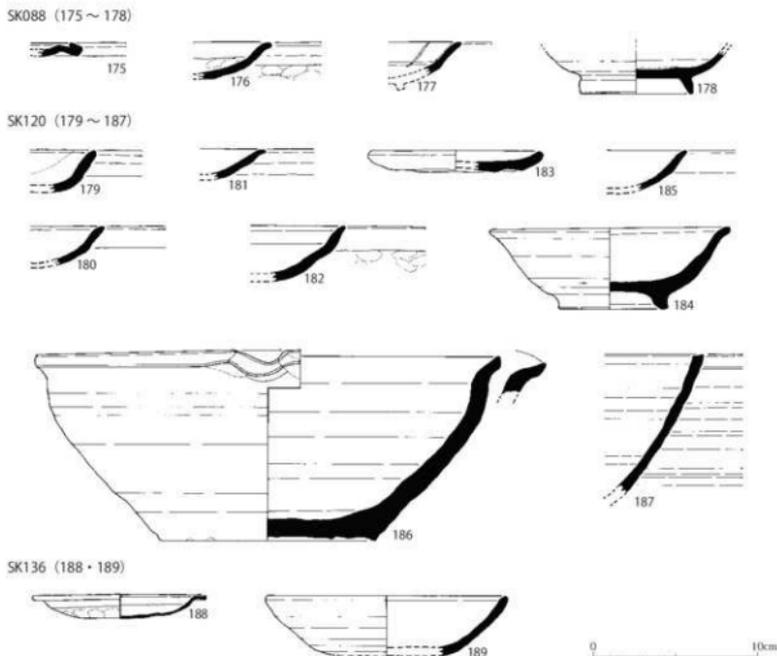


図 42 SK088・120・136 出土遺物実測図 (S=1/3)

軒平瓦 172は唐草文軒平瓦である。胎土は灰色で大量に長石を含む。瓦当面は包み込み技法で成形される。

【州浜】

土師器皿 (173・174) 173は「て」字状口縁のものである。淡褐色を呈し、焼成は良好である。174は橙褐色の胎土を有し、口縁部を強く2段にナデ調整している。

これらの遺物は、石列背面盛土が12世紀初頭頃、Ⅱ期埋土と州浜が11世紀末～12世紀初頭頃のものと考えられる。

土坑

SK088 出土遺物 (図42、図版36)

土師器皿 (175・176) 175はコースター形のものである。淡褐色で精良な胎土を有する。176は淡褐色で長石粒を含む胎土を有する。口縁部は強く2段にナデ調整する。

輸入白磁皿 177はⅠ-1類のものである。内面には隆帯を刻む。

灰釉陶器椀 178は三日月状高台を持つものである。内面見込み部は露胎で、外面には灰釉がツケガケされる。

これらの遺物は12世紀初頭のものである。

SK120 出土遺物 (図 42、図版 36)

土師器皿 (179 ~ 183) 179 は淡褐色を呈し、口縁部は弱く 2 段にナデ調整する。口縁端部はわずかに外反する。180 は褐色の胎土を有し、口縁部は強いナデにより外反する。181 は淡灰褐色の胎土を有し、口縁部は強く 2 段にナデ調整する。182 は灰褐色の胎土を有する。体部はユビオサエによる凹凸を強く残し、口縁部は強いナデにより外反する。183 は淡褐色の胎土を有し、「て」字状口縁の崩れた形状を有する。

白色土器碗 184 は白色の胎土を有し、内外面回転ナデ調整の後、外面体部下半を回転ヘラケズリし、高台を削り出す。

輸入白磁皿 185 はⅥ類のものである。内面に 1 条の沈線が巡る。

須恵器鉢 (186・187) 186 は褐灰色を呈し、砂粒を多く含む胎土を有する。内外面回転ナデ調整を施し、外底面の一部にはモミガラ圧痕が見られる。内面に使用痕は見られない。187 は灰色で硬質に焼き上がる。内面に使用痕等は見られない。

これらの遺物は 12 世紀初頭のものである。

SK136 出土遺物 (図 42)

土師器皿 188 は「て」字状の口縁を有し、器壁は 1.5mm 程度と薄い。胎土は淡褐色を呈する。

須恵器碗 189 は灰褐色の胎土を有し、内外面回転ナデ調整する。内外面に火漶が確認できる。

これらの遺物は 11 世紀前半のものである。

SK140 出土遺物 (図 43、図版 36・37)

【褐色土】

土師器皿 (190 ~ 203) 土師器皿には口径 8.7 ~ 11.3cm の小皿と、口径 13.2 ~ 16cm の大皿がある。小皿は「て」字状口縁のもの (191・193 ~ 195) と、強く外反する口縁のもの (190・192)、わずかに外反させるもの (196・198)、口縁端部を丸く収めるもの (197) がある。大皿は口縁部を 2 段ナデ調整し、口縁端部を外反させるもの (200・202)、強い 1 段ナデによって外反させるもの (201)、丸く収めるもの (199・203) がある。202 の内面には調整の際の工具痕が残る。

【灰砂】

須恵器碗 204 は灰色を呈してチャート・長石粒を多く含む胎土を有する。内外面回転ナデ調整を施し、外底面には回転イトキリ痕が残る。内面見込み部には窪みを有する。東播系の可能性がある。

黑色土器碗 205 は A 類碗である。外面ユビオサエの後板状工具によるナデ調整、内面イブシの後ヘラミガキする。

瓦器碗 206 は灰褐色の胎土を有し、内外面密にヘラミガキを行う。外面のヘラミガキは高台付近に達する。口縁部に沈線は見られない。

土師器皿 207 は回転台土師器である。橙褐色の胎土を有し、外面ヘラキリ後、押し出しを行って丸みを造り出す。内面には 1 条の沈線が巡る。

土師器鉢 208 は褐色の精良な胎土を有する。内外面ナデ調整を施す。全面に被熱痕が残る。

白色土器高杯 209 は白色で砂粒を多く含む胎土を有する。中心に芯棒の痕跡が残る。断面観察からは芯棒に粘土を巻きつけた痕跡が確認できる。外面は下半を 11 単位に分けて面取りし、上半はナデ調整を行う。

これらの遺物はいずれの層位も 11 世紀中葉と考えられる。

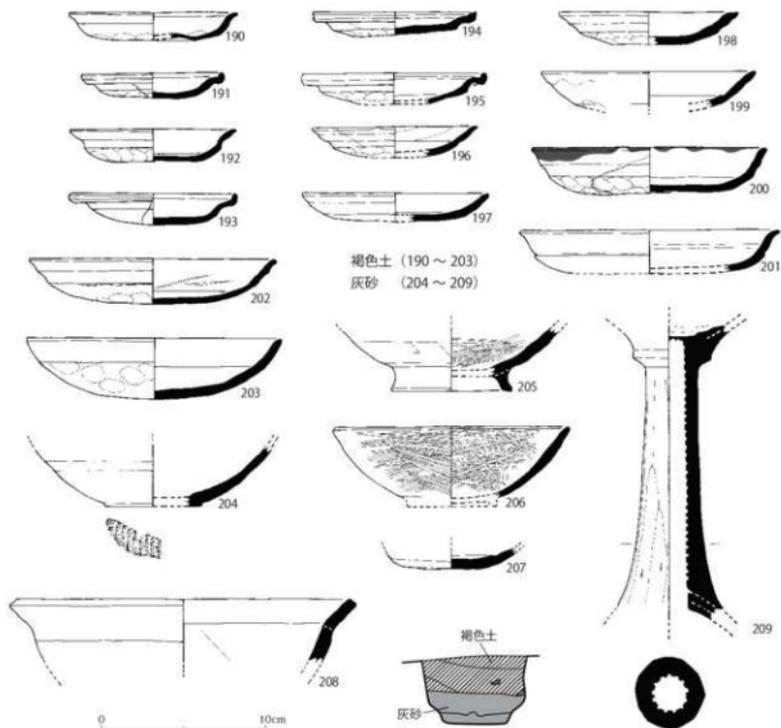


图 43 SK140 出土遺物実測図 (S=1/3)

第4章 SE034 出土国産陶器碗付着顔料の蛍光X線分析

SE034からは内面に顔料が付着した国産陶器碗(図17-46)が出土した。本遺構からは他に高台内に漆が付着した国産陶器碗(同-45)が出土しており、塗師等の工人の存在が推定できる。顔料の種類は当遺跡で活動した工人の職種推定などに有効と考えられるため、蛍光X線分析を行い顔料の特定を行った。

1. 分析対象

国産陶器碗 1点

2. 分析内容

蛍光X線分析

碗に付着した顔料の分析として蛍光X線分析を行った。分析に際し、図44に示した箇所より微量の顔料を採取した。採取された顔料中に赤色と白色の2種類の顔料が認められたため、それぞれの蛍光X線分析を行った。

3. 分析方法及び使用機器

蛍光X線分析は試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素固有の蛍光X線を検出することにより、試料の構成元素を同定する分析方法である。

測定には「EA6000VX」(株式会社日立ハイテクサイエンス、X線管球:ロジウム(Rh))を用いた。測定条件は大気雰囲気下、管電圧50kV、管電流1mA、コリメータ $0.2 \times 0.2\text{mm}^2$ 、照射時間120sec/pointである。

4. 結果と考察

得られた蛍光X線スペクトルを図45に、得られた計数率を表1示す。赤色顔料からは鉄(Fe)が強く検出されたため、弁柄と考えられた。また、白色顔料からは鉛(Pb)が強く検出されたため、鉛白と考えられた。



図 44 SE034 出土国産陶器碗 (○: 試料採取箇所)

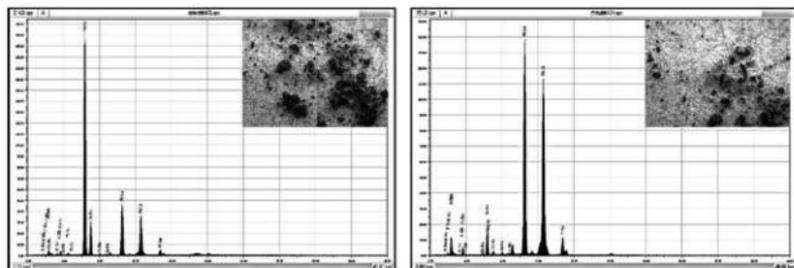


図 45 蛍光 X 線スペクトル (左: 赤色顔料、右: 白色顔料)

表 1 計数率

元素	ライン	計数率	
		赤色顔料	白色顔料
ケイ素(Si)	K α	15.512	13.967
リン(P)	K α	12.034	25.673
カリウム(K)	K α	33.506	12.542
カルシウム(Ca)	K α	54.504	75.234
チタン(Ti)	K α	43.035	—
マンガン(Mn)	K α	—	24.449
鉄(Fe)	K α	3283.539	286.564
銅(Cu)	K α	31.178	46.208
鉛(Pb)	L β	804.088	2551.832

第5章 調査のまとめ

第1節 遺構の変遷

(1) 基盤層の形成

本調査地における人間活動の開始は基盤層に含まれる遺物の年代が手掛かりとなる。基盤層を形成する礫層からは弥生時代後期の器台(29)が出土している。北側200mの地点で行われた発掘調査(図3:調査4(元興寺文化財研究所2017))では今回検出した礫層と類似する洪水堆積物が見つかっており、この中からは弥生時代中期の土器が見つまっている。また、調査4ではこの礫層の上に湿地性の堆積物があり、ここから布留式古段階の土師器臺が出土している。今回の調査で検出した礫層は調査4で検出したものと石材構成、時期が近似的ことから、同一の洪水堆積物と考えられる。なお、今回の調査区から南西へ約600m離れた左京七条二坊五町の調査(龍谷大学2018)では、礫層の上面で古墳時代前期の遺構を検出しており、調査地を含む周辺広域の基盤層形成と地形の安定化は弥生時代後期以降、古墳時代前期以前と考えられよう。

(2) 本格的な土地利用の開始

前述のように調査地周辺は弥生時代後期～古墳時代前期の大規模な礫の堆積で地形が安定化したが、洪水被害はたびたび繰り返されたようで、調査区の南半分は粗～細砂を中心とする砂層が展開している。この砂層からは9世紀前半頃かと思われる緑釉陶器碗の底部片(30)が出土している。

当調査地における本格的な土地利用の開始は整地土5が敷設される11世紀前半に位置づけられる。この整地土5は黄灰色のシルトを主体とし、平安時代後期に広く敷設される、いわゆる「ウグイス層」に類似する。先述の調査4においてもやはり11世紀前半に位置づけられる同様の整地層が発見されており、11世紀前半の土地開発はかなり広い範囲で行われたものと考えられる。

(3) 池SG150と庭園遺構について

SG150は当調査地でもっとも特徴的な遺構である。庭園を構成する池と考えられるが、残念ながら調査範囲が狭く全体像が詳らかでない。池の成立時期は出土遺物がほとんどないため不明であるが、掘削後それほど間を置かず行われた大規模な改変が11世紀末～12世紀初頭であることから、それを大きくさかのぼらない時期に成立していたと考えられる。

SG150は11世紀末～12世紀初頭に東半分が埋め立てられ、大規模な改変が行われる。この際、景石と州浜が設置されると考えられる。その後、少し間を置いて西側に石列が設置され、整備が完了すると考えられる。しかしSG150は短命に終わったようで、12世紀初頭には埋められ、整地される。

(4) 13世紀前半の画期

12世紀初頭から13世紀前半までは遺構が希薄となる。この時期、土地利用が行われていなかった可能性が高いが、屋敷地庭園の一部となって建物等が設置されない空間となっていた可能性も排除でき

ず、今後隣接地の調査で解明すべき課題である。

13世紀前半になると突如として土師器皿の一括投棄が行われる。SKO90は土師器皿を埋土の主体とするほど大量の一括投棄が行われた土坑であり、当地において儀礼的行為が行われたことが推定できる。なお先述の調査4においてもやはり同時期の土師器皿一括投棄が行われている。

(5) 柱列 SA170 について

SA170は礎石を持つ柱列であるが、北側柱穴には隅切方形柱座を持つ礎石が据えられる。SA170は整地土1に被覆される遺構であり、整地土1の年代から14世紀中葉から後半以前の遺構と考えられる。同様の礎石は鹿苑寺でも14世紀末のものが出土しており(2018年10月12日報道)、格の高い礎石と見られる。ただし、SA170のものは川原石の礎石と併用しており、再利用品である可能性が高い。本来の使用地について探索が必要である。

(6) 中世から近世への移行期について

中世後期の遺構は15世紀後半と考えられるSD031から16世紀後半のSKO19までの間が空白となる。また、SKO19以降は17世紀中葉の石室SX070までやはり空白がある。15世紀後半から17世紀中葉までは遺構の激減期と位置づけざるを得ない。この傾向は調査4でも確認されており、広く見られる現象と考えられる。

第2節 遺構変遷からみた調査地周辺の歴史的景観

次にこれら遺構変遷について、周辺の歴史的環境と対比してみたい。

第2章でも述べた通り、六条二坊十二町に関する最も古い表記は『延喜式』付図にある「苑」の記述である。調査の結果からは9世紀前半にはほとんど利用された痕跡はなく、また洪水による堆積物が存在する状況であったため、『延喜式』の記述については調査結果とは不整合であるとせざるを得ない。

11世紀前半に周辺地域全体を含め大規模な整地が行われ、土地利用の画期を迎えるが、記録ではこの画期は明確ではない。隣接する二坊十～十四町においては11世紀前半に保と刀禰の存在が確認できるが(『平安遺文』556)、組織的な都市整備の感はない。記録との差をどのように埋めるべきか、大きな課題が残されたと言える。同様の現象は池SG150についても指摘できる。池SG150は11世紀末～12世紀初頭の短期間に成立して、改変を経て12世紀初頭に廃絶し、池の構造は大型の石組を伴う格の高いものであるが、史料ではこの時期に池の主と成り得る人物の屋敷地は確認できず、また周辺においても積極的な土地利用の記録は見られない。

十二町周辺が史料上最も多くあらわれるのは12世紀後半の十三町における六条殿の成立とそれに伴う院近臣屋敷地の成立期である。ところが遺構変遷からは、この時期の遺構は希薄であり、屋敷地として積極的に利用された形跡はない。また遺物の出土も少なく、ここでも史料との乖離が著しい。この点も課題と言わざるを得ない。

さらに、源氏累代の堀川六条館については『中古京師内外地図』を証明する資料は得られなかった。第2章において述べた通り堀川六条館の位置比定については、『中古京師内外地図』を積極的に評価することは難しく、発掘調査の成果に期待されたが、今後の調査に課題を残したい。ただし、土師器皿を大量に投棄したSKO90の存在は13世紀前半における何らかの儀礼的空間の存在をうかがわせる。

最後に中世後期～近世初頭の問題に触れておきたい。京都では応仁の乱以後の都市荒廃に伴って上京と下京の中間地域は衰退すると考えられるが、今回の調査及び調査4の成果はこの想定に肯定的である。その後16世紀後半頃から遺構が再び出現し、17世紀以降町屋が立ち並ぶようになると思われる。今回の調査では17世紀中葉の石室遺構SX040・070を検出し、こうした地下室的な施設をもつ町屋の存在が確認できた。ただ、調査地の南に接して昭和52年に行われた発掘調査では、多数の近世墓が見つかったのに対し、今回の調査では近世の墓や寺院の存在を示すものが全く発見されなかった。この点は境内墓地を持つ寺院が調査地まで及んでいなかったと考えたい。

以上、課題の提示に終始してしまっただが、今回の調査区は狭小なうえに攪乱が著しく、断片的な情報の採取に留まった。今後隣接地の調査を積み重ねによる課題の克服が望まれる。

〈引用・参考文献〉

龍谷大学2018『平安京跡左京七条二坊五町（東市路）発掘調査報告書』

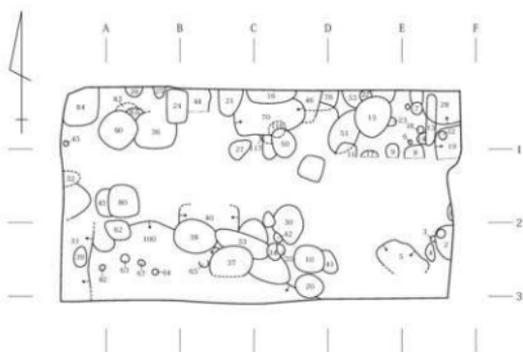
関連資料

図 46・47 検出遺構配置略図

表 2～8 報告遺物一覧 (1)～(7)

表 9～13 検出遺構および出土遺物一覧 (1)～(5)

第1遺構面 (14c~近代)



第2遺構面 (12c半~14c) (整地土2上面)

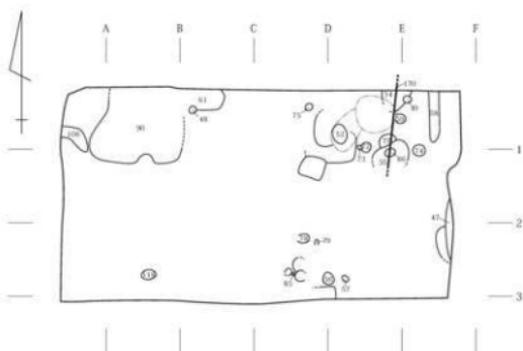
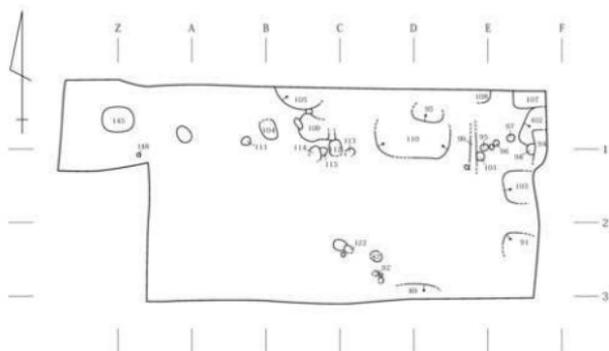
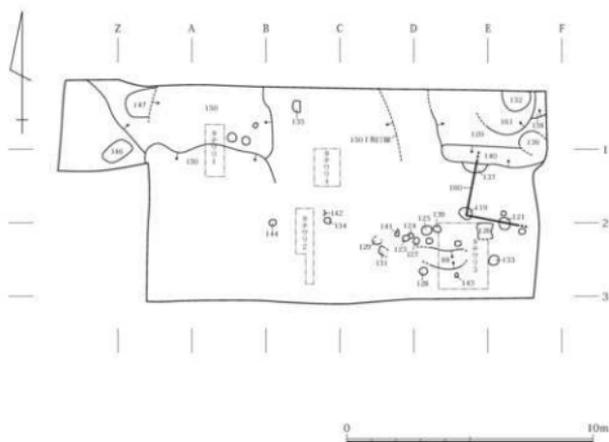


図46 遺構配置略図 (1) (S=1/200)

第3遺構面 (12c 初～12c 半)



第4遺構面 (11c 半～12c 初)



0 10m

図 47 遺構配置略図 (2) (S=1/200)

表2 報告遺物一覧(1)

報告番号	探区	写真 図版	出土遺構 層位	種別 器種	口径・高さ・底径 (cm) 残存率	胎土・素材	焼成・色別	特記事項
1	Ⅶ7		整地土1	土師器 甕	*-2.3- 口縁部片	密 ～1mm長石・金雲母	黒 灰白 10YR8/2	
2	Ⅶ7		整地土1	土師器 甕	(6.4)-(1.6)- 40%	密 ～1mm長石・雲母・黒色粒	黒 灰白 10YR8/2	
3	Ⅶ7		整地土1	土師器 甕	(7.4)-1.3- 20%	密 ～0.5mm長石・雲母・黒色粒	黒 灰白 2.5Y8/1	
4	Ⅶ7		整地土1	土師器 甕	(9.0)-1.7- 35%	密 ～1mm長石・金雲母	黒 浅黄緑 10YR8/3	
5	Ⅶ7		整地土1	土師器 甕	(10.8)-(2.6)- 40%	密 ～0.5mm雲母・黒色粒	黒 灰白 2.5Y8/1	
6	Ⅶ7	Ⅶ版29	整地土1	瓦器 釜	(24.8)-(5.7)- 20%	密 ～1mm石英・長石・雲母	黒 に赤い黄緑 10YR7/2	
7	Ⅶ7	Ⅶ版29	整地土1	須恵器 椀 底部片	*-(2.4)-(6.6)	密 ～2mm石英・長石・雲母	黒 灰 N5.0	
8	Ⅶ7	Ⅶ版29	整地土1	灰陶器 土師器 口縁部片	*-(6.4)- 口縁部片	密 ～0.1mm長石	黒 に赤い黄緑 10YR7/3	
9	Ⅶ7	Ⅶ版29	整地土1	瓦 軒平瓦 瓦当部片	(6.3)-(10.0)-(4.4) 瓦当部片	密 ～3mm長石・クサリ礫・角閃石・雲母	黒 灰白 2.5Y7/1	
10	Ⅶ7		整地土2	土師器 甕	(9.0)-1.5- 25%	密 ～0.5mm長石・雲母・黒色粒	黒 灰白 10YR8/2	
11	Ⅶ7		整地土2	土師器 甕	(15.0)-2.3- 30%	密 ～3mm長石・雲母・黒色粒	黒 に赤い黄緑 7.5YR7/4	
12	Ⅶ7		整地土2	須恵器 甕	(9.5)-1.9- 30%	密 ～2mm長石・雲母・黒色粒	黒 灰白 2.5Y7/1	
13	Ⅶ7		整地土2	輸入磁器 白磁陶 白磁陶	(16.4)-(3.2)- 15%	密 黒色粒	黒 灰白 5Y8/1	(輪) 明緑灰 7.5GY7/1
14	Ⅶ7		整地土2	瓦 軒丸瓦	(9.3)-(7.0)-(6.0) 15%	密 ～3mm長石・雲母・黒色粒	黒 灰白 2.5Y7/1	
15	Ⅶ7		整地土3	土師器 甕	(10.0)-1.5- 40%	粗 ～3mm石英・長石・雲母	黒 浅黄緑 7.5YR8/4	
16	Ⅶ7		整地土3	土師器 甕	(13.6)-2.7- 30%	粗 ～3mm長石・石英・雲母	黒 浅黄緑 7.5YR8/4	
17	Ⅶ7		整地土3	土師器 甕	14.7-2.9- 90%	粗 ～3mm石英・長石・雲母	黒 橙 5YR6/6	
18	Ⅶ7	Ⅶ版29	整地土3	白色土器 杯	10.2-2.7- 80%	粗 ～5mm石英・長石	黒 灰白 10YR8/2	
19	Ⅶ7	Ⅶ版29	整地土3	土師器 耳皿	(7.0)-(2.7)-(5.8) 70%	粗 ～2mm石英・長石・クサリ礫・雲母	黒 浅黄緑 10YR8/3	
20	Ⅶ7		整地土3	土師器 椀 口縁部片	*-(3.3)- 口縁部片	粗 ～3mm石英・長石・クサリ礫	黒 灰白 10YR8/2	
21	Ⅶ7		整地土3	輸入磁器 白磁陶 底部片	*-(2.2)-6.2 底部片	密 ～2mm長石・黒色粒	黒 灰白 10Y8/1	
22	Ⅶ7	Ⅶ版29	整地土3	瓦器 椀	(14.5)-6.2-6.2 30%	粗 ～2mm雲母・黒色粒	黒 灰白 10YR8/1	
23	Ⅶ7	Ⅶ版29	整地土3	須恵陶器 山菜椀	(17.2)-5.3-(8.0) 40%	密 ～4mm石英・長石・雲母・石粒	黒 灰黄 2.5Y7/2	
24	Ⅶ7		整地土5	土師器 甕	(9.5)-1.2- 25%	密 ～2mm長石・チャート・金雲母	黒 に赤い黄緑 7.5YR7/4	
25	Ⅶ7		整地土5	土師器 甕	10.7-1.3- 95%	密 ～3mm石英・長石・チャート・金雲母	黒 に赤い黄緑 10YR7/3	
26	Ⅶ7	Ⅶ版29	整地土5	白色土器 杯	(10.2)-3.3- 70%	密 ～2mm石英・長石・チャート・金雲母	黒 灰白 10YR8/1	
27	Ⅶ7		整地土5	土師器 椀	*-(2.9)-(8.0) 20%	密 ～2mm長石・チャート・金雲母	黒 灰白 10YR8/2	
28	Ⅶ7		整地土5	黒色土器 椀 口縁部片	*-(3.7)- 口縁部片	密 ～1mm長石・金雲母	黒 黒 10YR2/1	B類
29	Ⅶ7	Ⅶ版29	ベース礎部	赤土土器 部片	*-(2.1)- 口縁部片	密 ～1mm石英・長石・クサリ礫・雲母	黒 浅黄緑 7.5YR8/4	
30	Ⅶ7	Ⅶ版29	ベース礎部	須恵陶器 椀 底部片	*-(1.7)- 底部片	粗 微小砂粒	黒 白 N9.0	
31	Ⅶ17	SE010	Ⅶ産遺構	須恵陶器 椀 底部片	*-(1.9)-(4.8) 底部片	密 ～1mm雲母	黒 灰白 5Y8/1	(輪) 灰白 N8/1
32	Ⅶ17	SE010	Ⅶ産遺構	須恵陶器 椀 口縁部片	*-(4.2)- 口縁部片	密	黒 灰白 2.5Y8/1	(輪) 灰白 N8/1
33	Ⅶ17	SE010	Ⅶ産遺構	須恵陶器 椀 口縁部片	*-(4.7)- 口縁部片	密 ～1mm石英	黒 に赤い赤黒 2.5YR5/4	備前

表3 報告遺物一覧(2)

報告番号	押図	写真 図版	出土遺構 層位	種別 種別	口径・高さ・底径 (cm) 残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
34	図17		SE020	土師器 甕	(9.2)・(1.4)→ 20%	赤 ～2mm石英・石粒	黒 灰白 5YR7/6	灯明皿
35	図17		SE020	国産魚輪陶器 赤丹	(8.0)・(5.2)→ 20%	赤	黒 灰白 2.5Y7/1	(輪) 灰白 5Y7/2
36	図17		SE020	国産魚輪陶器 向付	(11.8)・(4.5)→ 口縁部片	赤 ～1mm黒色粒	黒 灰白 2.5Y8/2	(輪) 浅黄 5Y7/3
37	図17		SE020	国産磁器 染付桜	→ (4.1)→ 鉢部片	赤	黒 白 N9/0	
38	図17		SE020	国産磁器 染付皿	→ (3.0)→ 口縁部片	赤	黒 浅黄橙 10YR8/3	(輪) 灰白 7.5Y8/1
39	図17		SE020	瓦 軒丸瓦	(2.0)・(9.7)・(11.5) 瓦当部片	粗	不貞 灰 5Y4/1	
40	図17		SE020	金属製品 釘	(3.2)・1.1・0.7・1.2g 80%	鋼		
41	図17		SE030	国産魚輪陶器 甕	→ (3.4)・(6.6) 25%	赤	黒 灰白 5Y7/1	土野
42	図17		SE030	国産魚輪陶器 甕	(14.8)・3.9・(7.5) 25%	赤	黒 灰白 2.5Y7/1	瀬戸
43	図17		SE034	土師器 甕	5.4・1.2→ 100%	赤 ～1mm雲母	黒 浅黄灰 7.5Y8/4	土良
44	図17		SE034	国産磁器 染付桜	(9.6)・(3.7)→ 20%	赤	黒 灰白 5Y8/1	(輪) 灰白 N8/0
45	図17		SE034	国産魚輪陶器 甕	10.9・5.4・4.0 90%	赤 ～1mm黒色粒	黒 灰白 2.5Y8/2	(輪) 灰白 5Y7/2
46	図17	図版30	SE034	国産魚輪陶器 甕	(11.6)・6.1・4.2 60%	赤 ～1mm黒色粒	黒 浅黄 2.5Y8/3	(輪) 灰 10YR8/2 粗雑焼用
47	図17	図版30	SE034	国産魚輪陶器 鉢鉢	(34.6)・14.7・(16.0) 40%	粗 ～5mm長石	黒 灰赤 10R4/2	粗雑
48	図18		SE037	国産魚輪陶器 蓋	(6.4)・3.8・2.7 60%	赤	黒 紅・赤・橙 7.5YR7/4	
49	図18		SE037	国産磁器 染付蕎麦摺口	(7.5)・(4.7)→ 30%	赤	黒 白 N9/0	
50	図18		SE038	国産魚輪陶器 蓋	8.0・2.0→ 100%	赤 ～1mm石英	黒 灰白 2.5Y8/2	(輪) 浅黄 2.5Y8/3
51	図18		SE038	国産磁器 染付徳利	→ (4.0)・(4.8) 底部片	赤	黒 灰白 5Y8/1	(輪) 灰白 N8/0
52	図18		SE038	国産磁器 染付桜	→ (2.5)・3.7 底部片	赤	黒 灰白 5Y8/1	(輪) 灰白 10Y8/1
53	図18	図版30	SE038	国産魚輪陶器 徳利	→ (13.7)・7.2 95%	赤	黒 浅黄 2.5Y7/3	(輪) 黒陶 7.5Y3/1
54	図19	図版30	SK024	土師器 甕	5.1・1.3→ 100%	赤 ～1mm雲母・黒色粒	黒 紅・赤・黄橙 10YR7/4	
55	図19	図版30	SK024	土師器 甕	5.6・1.4→ 100%	赤 ～1mm長石・雲母・クサリ礫・黒色粒	黒 紅・赤・黄橙 10YR7/4	
56	図19	図版30	SK024	土師器 甕	5.2・1.3→ 100%	赤 ～0.5mm石英・雲母・黒色粒	黒 紅・赤・橙 7.5YR7/4	
57	図19		SK024	土師器 甕	5.2・1.3→ 100%	赤 ～2mm石英・長石・雲母	黒 紅・赤・橙 7.5YR7/4	
58	図19		SK024	土師器 甕	5.5・1.3→ 100%	赤 ～1mm雲母・黒色粒	黒 紅・赤・黄橙 10YR7/4	
59	図19		SK024	土師器 甕	5.4・1.4→ 100%	赤 ～1mm長石・雲母	黒 紅・赤・黄橙 10YR7/4	
60	図19		SK024	土師器 甕	5.8・1.3→ 100%	赤 ～1mm雲母	黒 紅・赤・黄橙 10YR7/3	
61	図19		SK024	土師器 甕	7.6・1.5→ 60%	赤 ～1mmクサリ礫・雲母・白色粒	黒 紅・赤・橙 7.5YR7/4	
62	図19		SK024	土師器 甕	7.8・1.7→ 60%	赤 ～1mmクサリ礫・雲母・黒色粒・白色粒	黒 橙 7.5YR6/6	
63	図19		SK024	土師器 甕	10.0・1.8→ 40%	赤 ～1mm長石・クサリ礫・雲母・黒色粒	黒 橙 7.5YR7/6	
64	図19		SK024	土師器 甕	10.0・1.0→ 60%	赤 ～1mm長石・クサリ礫・雲母	黒 紅・赤・橙 7.5YR7/4	
65	図19	図版31	SK024	土師器 甕	9.6・1.5→ 60%	赤 ～1.5mm長石・雲母	黒 浅黄橙 10YR8/3	
66	図19	図版31	SK024	土師器 杯	11.1・3.7→ 85%	赤 ～1mm長石・雲母	黒 灰白 2.5Y8/2	

表4 報告遺物一覧(3)

報告番号	探区	写真 図版	出土遺構 層位	種別 器種	口径・器高・底径 (cm) 残存率	胎土・素材	焼成・色別	特記事項
67	Ⅱ19		SK024	土師器 つば付鉢	3.0・2.0・ 100%	密	黒 浅黄緑 10YR8/3	
68	Ⅱ19		SK024	土師器 炬燵	(18.8)・(5.1)・ 45%	密	黒 ～1.5mm長石・クサリ織・雲母	
69	Ⅱ19		SK024	国産磁器 安付皿	12.0・3.5・4.6 80%	密	黒 微小砂粒	黒白 N8/0
70	Ⅱ19	図版 31	SK024	国産陶器 椀	10.4・7.8・5.4 95%	密	黒 灰黄 2.5Y7/2	
71	Ⅱ19	図版 31	SK024	国産陶器 椀	13.8・8.1・6.2 90%	密	黒 灰黄 2.5Y7/2	(輪) 灰黄 5Y7/3
72	Ⅱ19		SK024	国産陶器 灯明皿	10.8・2.5・ 85%	粗	不負 ～3mm石莖・長石	(輪) 灰黄 2.5Y7/2
73	Ⅱ19	図版 31	SK024	国産陶器 鉢	19.0・6.3・8.9 100%	密	黒 微小砂粒	(輪) 灰黄 2.5Y7/2
74	Ⅱ19		SK024	国産磁器 安付蕎麦鉢口	7.8・6.8・4.2 96%	密	黒 灰白 5Y8/1	
75	Ⅱ19	図版 31	SK024	国産磁器 安付蕎麦鉢口	8.5・6.7・4.6 98%	密	黒 灰白 5Y8/1	
76	Ⅱ19		SK024	国産磁器 香密安付蕎麦鉢口	9.0・6.2・4.0 100%	密	黒 灰白 N8/0	
77	Ⅱ19	図版 32	SK024	国産磁器 蕎麦鉢口	8.4・6.1・4.4 75%	密	黒 灰白 5Y8/1	
78	Ⅱ19	図版 32	SK024	国産磁器 安付皿	13.4・3.5・8.0 70%	密	黒 灰白 N8/0	
79	Ⅱ20		SK024	国産磁器 安付椀	8.4・4.2・3.4 100%	密	黒 灰白 N8/0	
80	Ⅱ20	図版 32	SK024	国産磁器 安付椀	9.8・5.4・3.8 90%	密	黒 灰白 N8/0	
81	Ⅱ20	図版 32	SK024	国産磁器 青磁安付椀	10.8・6.5・4.2 60%	密	黒 灰白 N8/0	
82	Ⅱ20		SK024	国産磁器 青磁安付蓋	(10.3)・3.2・(4.6) 50%	密	黒 微小砂粒	灰白 N8/0
83	Ⅱ20	図版 32	SK024	国産磁器 安付蓋	9.6・3.0・4.4 98%	密	黒 灰白 5Y8/1	
84	Ⅱ20		SK024	国産磁器 安付仏飯器	5.8・5.0・3.5 60%	密	黒 灰白 5Y7/1	
85	Ⅱ20	図版 32	SK024	骨角製品 ブラス	9.8・0.6・0.7 100%		黒 灰白 2.5Y8/2	
86	Ⅱ21	図版 32	SK040	国産磁器 安付椀	10.2・5.4・4.4 80%	密	黒 灰白 5Y8/1	
87	Ⅱ21	図版 33	SK040	土師器 皿	30.4・8.3・ 75%	密	黒 ～2mm長石・チャート	灰黄緑 10YR8/4
88	Ⅱ21		SK070	土師器 皿	5.4・1.5・ 100%	粗	不負 ～2mm石莖・雲母・石粒	灰黄緑 10YR8/3
89	Ⅱ21	図版 33	SK070	国産陶器 青磁椀	(10.2)・6.9・3.7 30%	密	黒 ～1mm石粒	(輪) 灰白 7.5Y8/1
90	Ⅱ21	図版 33	SK070	国産陶器 陶器椀	12.6・8.4・5.4 75%	密	黒 ～2.5Y8/2	(輪) 灰黄 2.5Y7/2
91	Ⅱ21		SK070	国産陶器 陶器椀	13.2・2.6・7.2 100%	密	黒 ～1mm石莖・石粒	(輪) 灰白 7.5Y7/2
92	Ⅱ21		SK070	国産陶器 埴輪部片	・(10.3)・ 埴輪部片	粗	黒 ～2mm石莖・クサリ織・石粒	灰黄 5Y8/2
93	Ⅱ21		SK070	国産磁器 安付椀	(11.0)・5.7・(3.8) 25%	密	黒 灰白 5Y8/1	
94	Ⅱ21		SK070	国産陶器 安付皿	(13.2)・3.6・(5.1) 35%	密	黒 灰白 10Y8/1	陶器安付
95	Ⅱ21	図版 33	SK070	国産磁器 安付皿	(13.6)・3.3・(5.8) 50%	密	黒 灰白 5Y8/1	
96	Ⅱ21	図版 33	SK070	輸入磁器 安付皿	(23.2)・4.1・(12.8) 20%	密	黒 灰白 5Y7/1	
97	Ⅱ25		SD031	土師器 皿	9.8・1.5・ 15%	密	黒 ～2mm長石・チャート・クサリ織	灰黄緑 10YR8/3
98	Ⅱ25		SD031	土師器 皿	・(2.4)・ 埴輪部片	密	黒 ～1mm石莖・長石	灰黄緑 7.5YR8/4
99	Ⅱ25		SD031	土師器 皿	・(1.2)・ 埴輪部片	密	黒 ～1mm長石	灰白 10YR8/2

表5 報告遺物一覧(4)

報告番号	押図	写真 図版	出土遺構 層位	種別 器種	口径・高さ・底径 (cm) 残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
100	図25		SD031	河産地軸陶器 甕	-(3.5)- 白磁部分	赤 ～2mm石英・長石	黒 に赤・黄緑 7.5YR6/3	古瀬戸 土・ナリブ着 5YR6/4 信楽
101	図25	図版33	SD031	河産地軸陶器 鉢鉢	-(3.3)- 白磁部分	黒 ～3mm石英・チャート・クサリ礫	灰白 10YR8/2	
102	図25		SD031	河産地軸陶器 鉢鉢	-(6.7)- 白磁部分	黒 ～8mm石英・長石・チャート・石粒	に赤・赤黒 2.5Y5/3	備前
103	図25	図版33	SD031	輸入地軸陶器 瓶(大口瓶)	(10.6)・(4.8)- 25%	赤 ～5mm石英・石粒	に赤・赤黒 5YR5/3	(輪) 黒5Z/1
104	図25	図版33	SD031	石製品 碁石	2.0・1.4・1.0・39g 100%	長石		
105	図25		SG100 褐色土	土師器 皿	-(1.7)- 白磁部分	赤 ～1mm長石・クサリ礫・金雲母	黒 浅黄緑 7.5YR8/3	
106	図25		SG100 褐色土	土師器 皿	-(2.3)- 白磁部分	赤 ～1mm長石・金雲母	黒 に赤・黄緑 7.5YR7/4	
107	図25		SG100 褐色土	土師器 皿	(14.0)・1.8)- 20%	赤 ～2mm長石・クサリ礫・金雲母	黒 に赤・黄緑 5YR7/4	不貞
108	図25		SG100 褐色土	土師器 皿	(16.2)・2.4)- 25%	赤 ～1mm長石・クサリ礫・金雲母	黒 に赤・黄緑 5YR7/4	
109	図25		SG100 褐色土	河産地軸陶器 加皿	-(2.3)- 白磁部分	赤	黒 赤黄緑 10YR6/2	古瀬戸
110	図25		SG100 褐色土	土師器 皿	(20.4)・(3.7)- 30%	赤 ～1mm長石・チャート・金雲母	黒 に赤・黄緑 7.5YR7/3	
111	図25		SG100 灰粘	土師器 皿	-(1.6)- 白磁部分	赤 ～1mm長石・チャート・雲母	黒 に赤・黄緑 7.5YR7/4	
112	図25	図版33	SG100 灰粘	輸入地軸陶器 鉢	-(4.7)- 白磁部分	赤 ～1mm石英・長石・チャート	黒 に赤・黄緑 5YR6/4	
113	図25		SG100 灰粘	河産地軸陶器 加皿	-(3.8)- 20%	赤 ～6mm長石	黒 灰白 5Y8/2	古瀬戸
114	図25		SG100 灰粘	瓦 軒丸瓦	2.4・(11.4)・(5.2) 瓦当部分	赤 ～1mm石英	黒 灰 N4/1	
115	図25		SG100 灰粘	瓦 軒丸瓦	(4.1)・(8.5)・(5.7) 瓦当部分	赤 ～6mm石英・長石・雲母	黒 に赤・赤黒 5YR5/4	不貞
116	図25	図版34	SG100 洗地砂	土師器 皿	(11.4)・3.3)- 30%	赤 ～1mm石英・長石・チャート・金雲母	黒 浅黄緑 10YR8/4	
117	図25		SG100 洗地砂	土師器 皿	(12.0)・3.0)- 50%	赤 ～1mm長石・チャート・金雲母	黒 灰白 10YR8/2	
118	図25		SG100 洗地砂	須恵器 鉢	-(4.0)- 白磁部分	赤 ～3mm石英・長石・チャート	黒 灰 N4/0	
119	図25		SK019	土師器 皿	-(1.2)- 白磁部分	赤 ～2mm長石・チャート・クサリ礫・ 金雲母	黒 灰白 5Y8/1	河転白
120	図25		SK019	土師器 皿	(12.7)・(2.1)- 25%	赤 ～1mm石英	黒 浅黄緑 7.5YR8/4	
121	図25	図版34	SK019	瓦 軒丸瓦	(5.3)・(8.7)・(4.5) 瓦当部分	赤 ～5mm石英・長石・チャート	黒 浅黄緑 10YR8/4	不貞
122	図29	図版34	SA170 SP05-0	石製品 礎石	46.0・38.0・23.0 花崗岩	カリ長石白色・金雲母		
123	図30		SD106	土師器 皿	10.2・1.5)- 95%	赤 ～1mm石英・長石・クサリ礫・金雲母	黒 に赤・黄緑 7.5YR7/3	
124	図30	図版34	SD106	須恵器 鉢	-(1.9)- 10%	赤 ～1mm石英・長石・チャート	黒 黄緑 5P7/1	
125	図30		SD106	輸入磁器 白磁鉢	-(5.1)・6.2 65%	赤 ～1mm長石	黒 灰白 5Y8/1	
126	図31	図版34	SK090	土師器 皿	(7.8)・2.1)- 25%	赤 ～2mm石英・クサリ礫	黒 黄緑 5YR7/6	
127	図31		SK090	土師器 皿	(8.0)・2.2)- 40%	赤 ～3mm石英・クサリ礫・雲母・石粒	黒 浅黄緑 7.5YR8/4	不貞
128	図31		SK090	土師器 皿	8.4・1.7)- 90%	赤 ～1mm長石・雲母・クサリ礫	黒 に赤・黄緑 7.5YR7/4	
129	図31		SK090	土師器 皿	9.0・1.6)- 80%	赤 ～1mm石英・クサリ礫・雲母・石粒	黒 浅黄緑 7.5YR8/4	不貞
130	図31	図版34	SK090	土師器 皿	9.0・1.8)- 100%	赤 ～2mm石英・クサリ礫・雲母	黒 に赤・黄緑 7.5YR7/4	
131	図31	図版34	SK090	土師器 皿	9.0・1.5)- 90%	赤 ～1mm石英・クサリ礫・雲母	黒 に赤・黄緑 7.5Y7/4	不貞
132	図31	図版34	SK090	土師器 皿	9.2・1.5)- 60%	赤 ～1mm雲母・クサリ礫	黒 に赤・黄緑 7.5YR7/4	不貞

表6 報告遺物一覧(5)

報告番号	探検	写真 図版	出土遺物 層位	種別 器種	口径・高さ・底径 (cm) 残存率	胎土・素材	焼成・色別	特記事項
133	Ⅱ31	図版34	SK090	土師器 甕	9.0・1.8・ 50%	粗 ～1mm石莖・クサリ礫・雲母	不灰 に灰・黄緑 10YR7/3	
134	Ⅱ31		SK090	土師器 甕	9.0・1.6・ 60%	粗 ～3mm石莖・クサリ礫・雲母・石粒	不灰 に灰・糖 7.5YR7/4	
135	Ⅱ31		SK090	土師器 甕	9.2・1.6・ 60%	密 ～1mmクサリ礫・雲母	不灰 に灰・糖 7.5YR7/4	
136	Ⅱ31		SK090	土師器 甕	9.2・1.6・ 60%	密 ～1mm石莖・雲母・クサリ礫	不灰 に灰・糖 7.5YR7/4	
137	Ⅱ31		SK090	土師器 甕	9.2・1.7・ 60%	密 ～1mm石莖・雲母	不灰 に灰・黄緑 10YR7/3	
138	Ⅱ31		SK090	土師器 甕	9.2・1.8・ 100%	密 ～1mm石莖・クサリ礫・雲母	不灰 に灰・糖 5Y7/4	
139	Ⅱ31	図版34	SK090	土師器 甕	(10.6)・1.6・ 30%	密 ～1mm石莖・長石	良 糖 7.5YR7/6	
140	Ⅱ31	図版35	SK090	土師器 甕	9.2・1.2・ 50%	密 ～1mmクサリ礫・雲母	不灰 灰白 2.5Y7/1	
141	Ⅱ31		SK090	土師器 甕	(14.4)・2.6・ 30%	粗 ～2mm石莖・長石	不灰 に灰・糖 7.5YR7/4	
142	Ⅱ31		SK090	土師器 甕	13.8・2.5・ 60%	密 ～2mm石莖・雲母・石粒	不灰 に灰・糖 7.5YR7/3	
143	Ⅱ31	図版35	SK090	土師器 甕	14.1・2.9・ 90%	密 ～2mm石莖・長石	良 に灰・黄緑 10YR7/3	
144	Ⅱ31		SK090	瓦器 椀	(14.4)・(3.6)・ 25%	密 ～3mm石莖・長石	良 灰 N4/1	
145	Ⅱ31	図版35	SK090	瓦器 甕	(9.0)・2.1・ 50%	密 ～2mm石莖	良 灰 N5/1	
146	Ⅱ31		SK090	瓦器 鉢	・(7.2)・ 口縁部片	密 ～1mm石莖・長石・金雲母	不灰 灰白 10YR8/1	
147	Ⅱ31	図版35	SK090	輸入磁器 白磁椀	・(1.9)・ 口縁部片	密	良 灰白 2.5GY8/1	
148	Ⅱ31		SK090	輸入磁器 白磁椀	・(2.2)・6.2 底面片	密 ～1mm長石	良 灰白 5GY8/1	
149	Ⅱ31		SK090	輸入磁器 白磁皿	11.4・(2.4)・ 20%	密 ～1mm長石	良 灰白 2.5GY8/1	
150	Ⅱ31	図版35	SK090	瓦 軒丸瓦	(2.0)・(7.3)・(8.0) 瓦当部片	密 ～2mm長石・チャート	良 灰 N4/4	
151	Ⅱ31		SK090	瓦 軒丸瓦	(2.0)・ 瓦当部片	粗 ～3mm長石・金雲母	良 灰 N4/4	
152	Ⅱ31		SK090	瓦 軒丸瓦	(2.1)・(5.5)・(6.0) 瓦当部片	粗 ～3mm長石・チャート・金雲母	不灰 灰白 2.5Y8/1	
153	Ⅱ33		SK110	土師器 甕	・(2.1)・ 口縁部片	密 ～1mm長石・雲母	良 黄緑 7.5YR8/4	
154	Ⅱ33	図版35	SK110	土師器 甕	10.4・1.8・ 60%	密 ～1mm石莖・長石・雲母	良 浅黄緑 10YR8/3	
155	Ⅱ33		SK110	土師器 甕	(14.4)・2.6・ 20%	密 ～1mm長石・チャート・金雲母	良 灰白 2.5Y8/2	
156	Ⅱ40		SB160b	土師器 甕	・(2.3)・ 口縁部片	密 ～1mm長石・雲母・クサリ礫・金雲母	浅黄緑 10YR8/3	
157	Ⅱ40	図版35	SB160b	土師器 甕	(10.8)・1.3・ 25%	密 ～2mm石莖・長石・雲母	不灰 に灰・黄緑 10YR7/3	
158	Ⅱ40	図版35	SB160b	土師器 甕	(8.2)・1.8・ 25%	密 ～1mm長石・雲母	良 灰白 2.5Y8/2	回転台 墨書「供」
159	Ⅱ40		SD130	土師器 甕	(10.4)・1.8・ 45%	密 ～2mm石莖・長石・雲母・黒色粒	良 浅黄緑 10YR8/3	
160	Ⅱ40		SD130	白色土器 杯	9.2・3.0・4.1 100%	密 ～1mm長石・チャート・雲母	良 灰白 10YR2/8	
161	Ⅱ40		SD130	軒平瓦	6.4・9.5・5.0 瓦当部片	粗 ～7mm石莖・長石・チャート	不灰 灰白 2.5Y7/1	
162	Ⅱ41		SC150	土師器 甕	・(2.5)・ 口縁部片	粗 ～2mm石莖・長石・クサリ礫・雲母	不灰 浅緑 5YR8/4	
163	Ⅱ41	図版35	SC150	輸入磁器 白磁椀	・(4.2)・(6.7) 30%	粗 微小黒色粒	良 白 N9/0	(輪)灰白 7.5YR/1
164	Ⅱ41	図版35	SC150	土師器 甕	(5.9)・(9.2)・(5.8) 軒丸瓦	粗 ～2mm長石	不灰 灰 N4/0	
165	Ⅱ41		SC150	土師器 甕	・(2.0)・ 口縁部片	粗 ～1mm長石・雲母	良 浅黄緑 7.5YR8/4	

表7 報告遺物一覧(6)

報告番号	押戻	写真 図版	出土遺構 層位	種別 器種	口径・高さ・底径 (cm)		胎土・素材	焼成・色調	特記事項
					残存率				
166	図41		SG150 灰砂	土師器 甕	+- (2.1) - 白釉部分	甕 ~ 2mm石莖・長石・クサリ礫	黒 浅黄緑 10YR8/3		
167	図41		SG150 灰砂	土師器 甕	+- (1.5) - 白釉部分	甕 ~ 2mm長石・クサリ礫・雲母	黒 浅黄緑 7.5YR8/3		
168	図41		SG150 灰砂	土師器 甕	+- (2.6) - 白釉部分	甕 ~ 1mm長石・クサリ礫・チャート・ 金雲母	黒 浅黄緑 7.5YR8/4		
169	図41		SG150 灰砂	土師器 甕	(1.50)・2.3 - 20%	甕 ~ 1mm石莖・長石・雲母	黒 浅黄緑 10YR8/3		
170	図41	図版36	SG150 灰砂	黒色土器 三星釜	(7.6)・(2.9) - 10%	甕 ~ 2mm長石	黒 黒N2/0	B類	
171	図41	図版36	SG150 灰砂	輸入磁器 白磁皿	(11.8)・3.3・(4.2) 30%	甕 微小砂粒	黒 灰白 2.5YR/1		
172	図41	図版36	SG150 灰砂	瓦 軒平瓦	(5.4)・(0.0)・(5.0) 瓦当部分	甕 ~ 3mm石莖・長石・チャート	黒 灰白 10YR8/1		
173	図41		SG150 相沢	土師器 甕	+- (2.0) - 白釉部分	甕 ~ 2mmクサリ礫・雲母	黒 黄緑 5YR8/4		
174	図41		SG150 相沢	土師器 甕	+- (2.4) - 白釉部分	甕 ~ 1mm石莖・長石・クサリ礫・雲母	黒 黄緑 2.5YR7/6		
175	図42		SK088 土師器	甕	+- (0.8) - 白釉部分	甕 ~ 1mm石莖・雲母	黒 灰白 10YR8/2		
176	図42		SK088 土師器	甕	+- (2.3) - 白釉部分	甕 ~ 1mm石莖・長石・雲母・石粒	黒 浅黄緑 10YR8/3		
177	図42	図版36	SK088 輸入磁器 白磁皿	甕	+- (2.0) - 白釉部分	甕 ~ 1mm石莖	黒 灰白 2.5YR/1	(輸) 灰白 5YR/1	
178	図42		SK088 灰釉陶器 椀	甕	+- (2.6) - 底部分	甕 ~ 2mm石莖・長石・石粒	黒 灰白 2.5Y7/1		
179	図42		SK120 土師器	甕	+- (2.6) - 白釉部分	甕 ~ 2mm石莖・長石・雲母	黒 灰白 10YR8/2		
180	図42		SK120 土師器	甕	+- (2.4) - 白釉部分	甕 ~ 1mm長石・雲母	黒 浅黄緑 10YR8/4		
181	図42		SK120 土師器	甕	+- (2.0) - 白釉部分	甕 ~ 2mm石莖・長石・雲母	黒 灰白 10YR8/2		
182	図42		SK120 土師器	甕	+- (3.4) - 白釉部分	甕 ~ 1mm長石・雲母	黒 灰白 2.5YR/2		
183	図42		SK120 土師器	甕	(10.2)・1.2 - 20%	甕 ~ 1mm石莖・長石・雲母	黒 紅・赤・黄緑 10YR7/4		
184	図42	図版36	SK120 白色土器 椀	甕	14.8・5.1・6.7 85%	甕 ~ 3mm長石	黒 灰白 2.5Y2/8		
185	図42		SK120 輸入磁器 白磁皿	甕	+- (2.5) - 白釉部分	甕	黒 灰白 7.5Y7/1		
186	図42	図版36	SK120 須恵系 鉢	甕	(28.2)・11.8・(13.4) 25%	甕 ~ 3mm石莖・長石・チャート	黒 黄緑 2.5Y1/6		
187	図42	図版36	SK120 須恵系 鉢	甕	+- (8.7) - 白釉部分	甕 ~ 2mm石莖・長石	黒 灰N6/1		
188	図42		SK136 土師器	甕	10.6・1.4 - 50%	甕 ~ 1.5mm石莖・長石・クサリ礫・雲母・ 黒色粒	黒 灰白 2.5YR/2		
189	図42		SK136 須恵系 椀	甕	(14.6)・(3.7) - 40%	甕 ~ 1mm長石・雲母・クサリ礫・黒色粒・ 白色粒	黒 浅黄 2.5Y7/3		
190	図43	図版36	SK140 褐色土	土師器 甕	(10.4)・1.7 - 20%	中卒甕 ~ 3mm石莖・長石・チャート・金雲母	黒 紅・赤・黄緑 10YR7/3		
191	図43	図版36	SK140 褐色土	土師器 甕	8.8・1.6 - 100%	甕 ~ 3mm石莖・長石・チャート・クサリ礫	黒 浅黄緑 7.5YR8/4		
192	図43	図版36	SK140 褐色土	土師器 甕	(10.2)・2.0 - 50%	甕 ~ 3mm石莖・長石・雲母	黒 紅・赤・黄緑 7.5YR7/4		
193	図43	図版36	SK140 褐色土	土師器 甕	10.4・1.9 - 95%	甕 ~ 1mm石莖・長石・雲母	黒 浅黄緑 10YR8/3		
194	図43	図版37	SK140 褐色土	土師器 甕	10.0・1.5 - 90%	甕 ~ 1mm長石・クサリ礫・雲母	黒 紅・赤・黄緑 5YR7/4		
195	図43		SK140 褐色土	土師器 甕	(11.2)・(1.0) - 35%	甕 雲母・微小砂粒	黒 灰白 7.5YR8/2		
196	図43		SK140 褐色土	土師器 甕	(10.2)・(1.0) - 40%	甕 ~ 2mm石莖・長石・雲母	黒 黄緑 5YR8/4		
197	図43		SK140 褐色土	土師器 甕	(11.4)・1.8 - 25%	甕 ~ 3mm長石・クサリ礫・雲母	黒 灰白 7.5YR8/2		

表8 報告遺物一覧(7)

報告 番号	探区	写真 図版	出土遺構 層位	種別 器種	口径・器高・底径 (cm) 残存率	胎土・素材	焼成・色別	特記事項
198	Ⅷ 43		SK140 褐色土	土師器 甕	(11.0)・2.0 - - 25%	粗 ～ 2 mm長石・チャート・雲母	黒 灰白 7.5YR8/2	
199	Ⅷ 43		SK140 褐色土	輸入磁器 白磁皿	(13.2)・(2.2) - - 10%	密 微小砂粒	黒 にぶい黄緑 10YR6/3	
200	Ⅷ 43		SK140 褐色土	土師器 甕	14.4・2.9 - - 90%	粗 ～ 2 mm石英・長石	黒 灰白 10YR8/2	
201	Ⅷ 43		SK140 褐色土	土師器 甕	(16.0)・(2.6) - - 20%	粗 ～ 1 mm石英・長石・雲母	黒 浅黄緑 7.5YR8/3	
202	Ⅷ 43	図版 37	SK140 褐色土	土師器 甕	(15.2)・2.8 - - 60%	密 ～ 1 mm石英・長石・雲母	黒 橙 2.5YR6/6	
203	Ⅷ 43	図版 37	SK140 褐色土	土師器 甕	(15.6)・3.8 - - 45%	密 ～ 1 mm長石・金雲母	黒 灰黄 2.5Y7/2	
204	Ⅷ 43	図版 37	SK140 灰砂	須恵器 椀	・・ (3.8)・(6.0) 10%	粗 ～ 5 mm長石・チャート	不貞 灰白 N7/0	
205	Ⅷ 43		SK140 灰砂	黒色土器 椀	・・ (4.0)・(7.4) 20%	粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	不貞 浅黄橙 7.5YR8/4	A 類
206	Ⅷ 43	図版 37	SK140 灰砂	瓦器 椀	(14.3)・(4.4) - - 10%	粗 ～ 1 mm長石・クサリ礫	黒 灰白 N8/0	
207	Ⅷ 43		SK140 灰砂	土師器 甕	・・ (1.3) - - 70%	粗 ～ 1 mm石英・長石・クサリ礫・雲母	黒 淡橙 5YR8/4	回転台
208	Ⅷ 43	図版 37	SK140 灰砂	土師器 鉢	(20.5)・(3.9) - - 10%	粗 ～ 1 mm長石・クサリ礫	黒 にぶい黄緑 10YR7/3	
209	Ⅷ 43	図版 37	SK140 灰砂	白色土器 高杯	・・ (18.1) - - 40%	粗 ～ 4 mm石英・長石	黒 灰白 2.5YR/1	

表9 検出遺構および出土遺物一覧(1)

5番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
1			ビット		土師器(中世～) 細片、須恵器(中世～) 細片	F 2
2			ビット	15C	土師器(中世～) 皿、黒色土器B類碗、輸入青磁碗、国産染付不明品、平瓦	F 3
3			カクラン		土師器(中世～) 皿、平瓦	F 3
4			ビット		土師器(中世～) 皿、須恵器(中世～) 甕、緑釉陶器碗、灰釉陶器碗、輸入陶器不明品	F 3
5			ビット	近世	土師器(中世～) 皿・罎・釜、輸入青磁器、輸入白磁小杯、国産陶器碗・土甕、平瓦・丸瓦・軒平瓦、釘、銭	E・F 3
6			ビット		土師器(中世～) 細片	F 1
7			ビット		土師器(中世～) 皿、白色土器碗、須恵器(中世～) 鉢(東播)、灰釉陶器碗、輸入白磁碗、椀	F 1
8			土坑		土師器(中世～) 皿、緑釉陶器碗、国産陶器甕、平瓦・丸瓦	F 1・2
9			土坑		土師器(中世～) 皿、瓦形釜、国産陶器甕(近世)、平瓦、釘	E 1・2
10	SE010	枠内 枠内褐色土	片戸 遺物検		土師器(中世～) 皿、輸入青磁碗、国産染付碗、国産陶器碗・皿(古瀬戸)・甕(備前)・鉢・漆鉢・罎、硯石、瓦製片戸枠、不明鉄製品、焼土 土師器(中世～) 皿、輸入白磁碗、輸入染付碗、国産染付碗、国産陶器甕・罎、平瓦・丸瓦、不明鉄製品	D 3
11			土坑		土師器(中世～) 皿、輸入白磁碗、国産陶器漆鉢(備前)、平瓦、釘	E 1・2
12			ビット		土師器(中世～) 皿、平瓦	F 1
13			溝		土師器(中世～) 皿、須恵器(中世～) 甕(東播)、緑釉陶器碗	F 1
14			ビット		土師器(中世～) 皿、須恵器(古代) 甕、瓦器碗、平瓦	F 1
15		枠内 南方	片戸 カクラン		土師器(中世～) 皿、国産白磁器イシ、国産染付碗、国産陶器皿・罎、椀瓦、瓦製片戸枠、土製人形、不明鉄製品 土師器(中世～) 皿、白色土器皿、須恵器(中世～) 鉢・甕・甕(東播)、灰釉陶器碗、国産青磁碗・瓶、輸入白磁碗、輸入白磁合子、輸入陶器甕、国産染付碗・皿・色絵皿・甕・鉢、国産陶器碗・皿・甕・鉢・漆鉢・甕・罎・東堀、大石打、平瓦・丸瓦	E 1
16			土坑	焼土充填	国産染付皿、国産陶器碗・皿・甕・甕・罎、硯、平瓦・軒平瓦、塀塼、貝殻	C・D 1
17			土坑	13C	土師器(中世～) 皿、緑釉陶器碗、瓦器碗・罎、国産染付碗、国産陶器山茶碗、雲母片	E 2
18			ビット		土師器(中世～) 皿、国産陶器山茶碗、平瓦	F 1
19	SK019		土坑		土師器(中世～) 皿(回転台)、須恵器(中世～) 鉢(東播)、緑釉陶器碗、灰釉陶器碗、黒色土器A類碗、輸入白磁碗・皿、水注、国産陶器甕・甕、平瓦	F 1・2
20	SE020		片戸 漆喰検	焼土充填 漆喰検	土師器(中世～) 皿、国産染付碗・皿、国産陶器碗・鉢・硯石、平瓦・丸瓦・軒平瓦、銅鏡	D 3・4
21			土坑	16C末	輸入青磁碗、輸入染付碗、国産陶器鉢・漆鉢(信楽)、平瓦・丸瓦、釘	C 1
22			ビット		土師器(中世～) 皿	E 1
23			ビット		土師器(中世～) 皿、須恵器(古代) 甕、輸入白磁碗	E 1
24	SK024		土坑		土師器(古瀬) 高杯、土師器(中世～) 皿・甕・壺・壺、国産染付碗・皿・甕・仏飯器、国産陶器碗・山茶碗・皿・打明皿・鉢・罎・皿・土瓶、硯石、平瓦・軒平瓦、釘、不明鉄製品、焼土、貝殻(しじみ)、骨製品グラス	B・C 1
25			カクラン		土師器(中世～) 皿、国産陶器甕・塀塼	B 1
26			ビット		土師器(中世～) 皿、瓦形罎、国産染付碗、国産陶器碗・皿・漆鉢	B 1
27			カクラン		土師器(中世～) 皿、国産白磁鉢、平瓦	C 1・2
28			土坑	12C後半	土師器(中世～) 皿、白色土器皿、須恵器(古瀬) 杯、瓦器碗・鉢・罎、輸入青磁碗、輸入白磁碗、国産染付碗、国産陶器鉢(東海系)、平瓦・丸瓦	F 1
29			土坑	18C	土師器(中世～) 鉢、瓦質土器碗伊、国産染付碗・皿、国産陶器灯明皿・鉢、平瓦・軒平瓦・椀瓦、塀塼	C・D 3
30	SE030	枠内 南方	片戸		土師器(中世～) 皿、緑釉陶器碗、輸入白磁碗、輸入染付碗、国産染付碗・皿、国産陶器皿(黄瀬戸)・甕・甕(備前)、平瓦・丸瓦 土師器(中世～) 皿、瓦器碗、輸入青白磁碗、輸入染付碗、国産陶器碗・甕、向付(芝野織部)、平瓦・丸瓦	D 2・3
31	SD031		溝		土師器(中世～) 皿、緑釉陶器碗、灰釉陶器碗、輸入青磁碗、輸入陶器天目碗、国産陶器碗(古瀬戸)・鉢(信楽)・漆鉢(備前)、硯石、碇石、平瓦・丸瓦、釘	A 3・4
32			土坑		土師器(中世～) 皿、輸入白磁器、平瓦	A 2
33			土坑	焼土充填	土師器(中世～) 小皿・煎茶器・焼人形、国産陶器灯明皿・鉢、碇石、椀瓦、塀塼	C・D 3
34	SE034	褐色土 灰色土 暗褐色土	片戸		土師器(中世～) 皿・壺・壺、国産青磁碗、国産染付碗、国産陶器碗・漆鉢・甕・火瓶、硯石、釘、土甕、漆喰 土師器(中世～) 皿・壺・壺、国産青磁碗、国産染付碗・壺口、国産陶器甕・漆鉢・罎、丸瓦 土師器(中世～) 皿、国産染付碗(波佐見)・甕、国産陶器碗・打明皿、硯石、釘、貝殻 土師器(中世～) 罎、国産陶器灯明皿・漆鉢・甕・瓶だらい、平瓦・丸瓦、不明鉄製品、塀塼	D 3
35			暗褐色土	ビット	土師器(中世～) 壺伊、白色土器高杯、国産染付碗・皿・徳利、国産陶器碗・漆鉢・甕、平瓦・丸瓦、釘	D 3
36			灰黄色土	土坑	土師器(中世～) 皿、平瓦 国産染付碗、平瓦	B 1

表 10 検出遺構および出土遺物一覧 (2)

S番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
36		黄褐色土	土坑		緑釉陶器類、輸入白磁皿、国産陶器類・漆鉢・漆鉢(丹波)、平瓦・丸瓦、土師、不明鉄製品	B・1
		黄褐色砂			土師器(中世-)皿、国産染付碗	
37	SK037	陥砂	井戸		須恵器(古代)甕、瓦器釜、輸入青磁碗、輸入白磁碗、国産染付碗、国産陶器類・打明皿・皿	C・3
		陥灰砂			須恵器(中世-)甕、輸入青磁甕、国産染付碗、国産陶器小杯・漆鉢・甕・土甕	
					国産染付碗、国産陶器甕、平瓦	
38	SK038	約内下層 暗褐色砂	井戸		土師器(中世-)皿、瓦器碗、国産染付碗・皿・鉢、国産陶器類・甕・土甕、平瓦・軒平瓦	B・C・2・3
		灰砂			土師器(中世-)鉢・火消巻、国産陶器甕・徳利、椀瓦、不明鉄製品、炭化物	
					国産陶器類・甕・鉢・甕	
39			土坑		輸入染付碗、国産陶器類・土甕、磁石、瓦器片、焼土	A・3
40	SX040		石室		土師器(中世-)皿・製伊・磁石、国産青磁碗、国産染付碗・皿、国産青磁染付皿・鏡口、須恵陶器鉢・甕・土甕、平瓦・軒平瓦、土製人形	B・C・2・3
		陥味			土師器(中世-)皿、国産染付碗、国産陶器類	
		陥灰土			土師器(中世-)皿、国産染付碗、国産陶器類・漆鉢	
		陥褐色土			土師器(中世-)皿、国産染付碗・皿、国産陶器類・甕・鉢・漆鉢、平瓦	
		陥色土			国産染付碗・皿、国産陶器類・漆鉢、平瓦、釘	
41		陥灰土	井戸		土師器(中世-)皿、瓦器碗、国産白磁皿、国産染付碗・皿、国産陶器類・山菜鉢・蓋・漆鉢、平瓦	D・E・3
		陥砂			土師器(中世-)皿、国産染付皿、国産陶器類、平瓦	
42			ビット		土師器(中世-)皿	D・3
43			土坑		土師器(中世-)皿、国産白磁皿、国産染付碗、国産陶器類・漆鉢・甕	A・B・2
44			土坑		土師器(中世-)皿、緑釉陶器甕、輸入白磁碗、平瓦・丸瓦	C・1
45			ビット		土師器(中世-)皿、丸瓦	A・1
46			土坑	17C 初層	土師器(中世-)皿、輸入白磁碗、国産陶器小杯、国産陶器類・皿・漆鉢、平瓦・軒平瓦	D・1
47			土坑	13C 後半	土師器(古代)甕、土師器(中世-)皿、須恵器(中世-)碗・鉢(染唐)、緑釉陶器類、瓦器碗、輸入青磁碗、平瓦・丸瓦	F・2・3
48			ビット		土師器(中世-)皿、緑釉陶器類	C・1
49			ビット		土師器(中世-)皿、灰釉陶器類、平瓦・丸瓦	F・1
50			井戸		土師器(中世-)皿、国産染付碗・鉢、国産陶器類・鉢・漆鉢・甕、釘、植物遺体	D・1・2
51			土坑		土師器(中世-)皿、白色土器高杯、須恵器(古墳)甕、輸入陶器甕、国産陶器類・漆鉢・甕、平瓦・丸瓦・軒平瓦	E・1・2
52			土坑		土師器(中世-)皿・白色土器類、須恵器(中世-)甕、黒色土器A類鉢、瓦器釜、輸入白磁碗、輸入陶器甕、国産染付碗、国産陶器類・甕	E・1
53			土坑		土師器(中世-)皿・皿、輸入青磁碗、国産染付碗、国産陶器類・鉢・漆鉢・甕、平瓦・丸瓦、不明鉄製品	E・1
54	SA170 (SPO54)		ビット		土師器(中世-)皿、国産陶器類、平瓦、焼土、石切礎石	E・F・1
55			土坑		土師器(中世-)皿、緑釉陶器類、瓦器碗	E・F・1・2
56			ビット		土師器(中世-)皿、瓦器釜、平瓦・丸瓦	D・E・3
57			ビット		土師器(中世-)皿	E・3
58			溝	15C 前半	土師器(中世-)皿、国産陶器類、丸瓦	F・1
59			ビット		土師器(古代)皿	E・F・1
60		上層	井戸	遺物持 19C	土師器(中世-)皿、須恵器(古代)甕・甕、黒色土器B類鉢、瓦瓦土器陶器類、平瓦	B・1
		下層			土師器(中世-)皿、灰釉陶器甕、国産染付碗、国産陶器類、磁石、平瓦	
					土師器(中世-)皿、輸入白磁碗、国産染付碗・徳利、国産陶器類・甕・漆鉢・甕・皿、平瓦	
61			土坑		土師器(中世-)皿、白色土器蓋、須恵器(古代)甕、須恵器(中世-)皿、輸入染付碗、平瓦、焼土	C・1
62			土坑		弥生土器類、土師器(古代)高杯、土師器(中世-)皿、灰釉陶器甕	B・3
63			ビット		土師器(古代)皿、黒色土器A類鉢、平瓦、焼土	B・3
64			ビット		土師器(中世-)皿、須恵器(古代)甕、瓦器釜、平瓦	B・3
65			ビット		土師器(中世-)皿、須恵器(古代)甕、輸入白磁碗、平瓦	C・3
66			土坑		土師器(中世-)皿、緑釉陶器類、灰釉陶器甕、輸入青磁碗、輸入白磁皿、平瓦・丸瓦・軒平瓦	D・2
		陥方		13C 後半	土師器(中世-)皿、灰釉陶器類	
67			ビット		土師器(中世-)皿、須恵器(中世-)甕、緑釉陶器類、瓦器碗、輸入陶器甕	B・3
68			ビット		土師器(中世-)皿、不明鉄製品	C・3
69				欠番		
70	SX070	陥砂	石室		土師器(中世-)皿・つばね、国産染付碗・皿、国産陶器類・甕・用皿、平瓦・丸瓦、不明鉄製品、炭化物	C・D・1
	陥粘			土師器(中世-)皿・つばね、須恵器(古代)杯、輸入染付碗、国産染付皿、丸瓦		
	陥褐色土			土師器(中世-)皿、瓦質土器鉢・製伊・瓦器、国産染付碗・甕・甕・徳利、国産陶器類・甕・漆鉢、磁、平瓦・丸瓦・軒平瓦、土甕、埴器、磁器		

表 11 検出遺構および出土遺物一覧 (3)

5番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
70	SX070	掘方	石室		土師器(中世～)皿、須恵器(古代)甕、緑釉陶器碗、瓦器碗、輸入青磁碗、輸入白磁碗、国産染付碗、国産陶器鉢・漆鉢・甕、磁、平瓦・丸瓦・鬼瓦・楕、不明鉄製品	C・D1
71					欠番	
72			ビット		土師器(中世～)磁片、瓦器碗	E1・2
73			ビット		土師器(中世～)皿	E1・2
74		掘方	ビット	12C前半 土師器皿	土師器(中世～)皿、平瓦	F1・2
75			ビット		土師器(中世～)皿・釜、緑釉陶器碗、輸入白磁碗	D1
76			土坑	近世	土師器(中世～)皿、須恵器(古代)甕、須恵器(中世～)鉢(東播)、灰釉陶器碗・皿、瓦器釜、瓦質土器磁片、輸入白磁皿、輸入染付碗・甕、国産陶器鉢・山茶碗・鉢(備前)・漆鉢・甕、平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦・椀瓦、鉄釘、鉄、不明鉄製品	D・E1
77			ビット		土師器(中世～)皿・釜、瓦器碗	E1
78			ビット		土師器(古代)甕、土師器(中世～)皿・釜	D3
79			ビット		土師器(中世～)皿	D3
80		掘方	井戸	瓦製枠・18C	土師器(古墳)甕、土師器(中世～)皿、緑釉陶器碗、瓦質片貝粉、国産染付碗・皿・合子・瓶、国産陶器碗・皿・漆鉢・甕、銅、炭石、平瓦、土師、土製船、鉄釘、銅銭、貝殻(しじみ)	A・B2
			地溝		土師器(中世～)つばつば、国産染付碗、国産陶器碗・漆鉢、平瓦、土製人形	
81			土坑		土師器(中世～)皿、輸入白磁碗、国産染付鉢、国産陶器碗、平瓦・丸瓦、鉄釘	B1
82			ビット		土師器(中世～)皿、須恵器(古代)甕、緑釉陶器碗	A3
83			井戸		土師器(中世～)皿、国産陶器碗・鉢、平瓦・丸瓦	B1
84			土坑	16C	緑釉陶器碗、国産陶器漆鉢(信楽)・甕、平瓦・丸瓦、鉄、鉄片、埴土	A1
85			ビット		土師器(中世～)皿・釜、平瓦	D3
86	SA170 (SP086)		ビット	13C 土師器組が主	土師器(中世～)皿、須恵器(中世～)鉢(東播)、灰釉陶器碗、国産陶器甕	E2
87			ビット		土師器(中世～)皿、丸瓦	D3
88	SK088		土坑		土師器(中世～)皿、須恵器(古代)甕、緑釉陶器碗、灰釉陶器皿、瓦質土器鉢、輸入白磁皿、国産陶器碗、平瓦、不明鉄製品	E3
89			土坑	12C後半	土師器(中世～)皿、須恵器(古代)甕、灰釉陶器碗、瓦器碗、輸入白磁碗、国産陶器甕、平瓦、炭化物	D・E3
90	SK090		土坑		土師器(中世～)皿、白色土器皿・白色土器高杯、須恵器(古墳)甕、須恵器(古代)鉢・漆・甕、須恵器(中世～)鉢(東播)・甕(東播)、緑釉陶器碗、灰釉陶器碗、黒色土器B型鉢、瓦器碗(和泉・大和)・皿、瓦質土器深鉢、輸入白磁碗・皿、国産陶器蓋・鉢・甕、平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦、鉄釘、埴土、炭化物	A・B1・2
		北端			土師器(中世～)皿、須恵器(古代)甕、灰釉陶器碗、瓦器碗、国産陶器甕、平瓦・丸瓦・軒丸瓦、鉄釘	
91			ビット		土師器(中世～)皿、須恵器(古代)甕、灰釉陶器碗、黒色土器A型鉢	F3
92			ビット		土師器(中世～)皿	D3
93			土坑		土師器(中世～)皿、須恵器(古代)甕、灰釉陶器碗、国産染付香炉、国産陶器漆鉢、平瓦	E1
94			溝		土師器(中世～)皿、須恵器(中世～)鉢・鉢(東播)・甕、緑釉陶器磁片、灰釉陶器碗、釘、炭化物、タイル	F1・2
95			ビット		土師器(中世～)皿	E1・2
96			ビット		土師器(古代)高杯、土師器(中世～)皿	F1
97			ビット		土師器(中世～)皿、黒色土器A型磁片	F1
98			ビット		土師器(中世～)皿、瓦磁片	F1・2
99			溝		土師器(中世～)皿・釜、白色土器高杯、須恵器(古代)甕、灰釉陶器碗、輸入白磁碗	E1・2
100	SG100	褐色土			土師器(中世～)皿、須恵器(中世～)甕、緑釉陶器碗・磁片、灰釉陶器碗、瓦器碗・皿・釜、輸入青磁碗・皿、輸入白磁碗・皿、国産陶器(古瀬戸)・御厨(古瀬戸)・甕・土甕、炭石、平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦、釘、不明鉄製品、埴土	
			褐色土		土師器(中世～)皿、瓦器碗・鉢、平瓦・丸瓦・軒丸瓦	
		褐色砂			土師器(中世～)皿、白色土器皿、須恵器(古代)鉢・甕、須恵器(中世～)鉢(東播)・甕・磁片、灰釉陶器水注、瓦器碗、輸入青磁碗、輸入白磁碗・皿・甕、国産陶器甕・漆石、平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦、不明鉄製品	
		黒褐色土	池		土師器(中世～)皿、須恵器(古代)甕、須恵器(中世～)甕、緑釉陶器碗、灰釉陶器碗、瓦質土器浅鉢、輸入青磁碗、輸入白磁碗、輸入白磁碗、平瓦・丸瓦・軒丸瓦	A・D2・3
		灰粘			土師器(中世～)皿、白色土器皿、須恵器(古代)杯、須恵器(中世～)甕、緑釉陶器碗・磁片、灰釉陶器碗、磁片、黒色土器B型碗、瓦器碗(和泉)・皿・甕・釜、瓦質土器浅鉢、輸入青磁碗、輸入白磁碗、輸入陶器蓋、国産染付御厨(古瀬戸)、国産陶器山茶碗・甕、平瓦・丸瓦・軒丸瓦、埴土	
				淡褐色砂		土師器(中世～)皿、須恵器(中世～)鉢(東播)・甕、瓦器碗、丸瓦、不明鉄製品

表 12 検出遺構および出土遺物一覧 (4)

S番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
100	SG100	壁面	池		土師器(中世-)類、須恵器(中世-)鉢(東園)・甕(東園)、瓦器鉢・銅、輸入青磁碗、輸入白磁碗、輸入灰付箱、国産陶器土瓶、平瓦、タイル	A・D2・3
101			ビット		土師器(中世-)類・釜、平瓦	E2
102			土坑	12C 前平	土師器(古代)甕、土師器(中世-)類、須恵器(古代)甕、緑釉陶器碗、灰釉陶器碗、国産陶器甕、平瓦	F1
103			土坑		平瓦	F2
104			土坑	自然地形	土師器(中世-)類、須恵器(古代)甕・甕、平瓦	B・C1
105			土坑		土師器(中世-)類、須恵器(古代)甕・甕、平瓦、埴	C1
106	SD106		溝		土師器(中世-)類、白色土器高杯、須恵器(中世-)碗(漆器)、緑釉陶器碗、灰釉陶器碗、輸入白磁碗、平瓦	A1
107			土坑		土師器(中世-)類・甕(田輪台)、須恵器(古代)鉢、緑釉陶器碗、灰釉陶器碗、国産陶器甕・甕	F1
108			ビット		土師器(中世-)類、平瓦	E1
109			土坑	自然地形	土師器(中世-)類・釜、黒色土器A類碗、輸入白磁碗、平瓦、灰釉陶器碗、緑釉陶器碗、黒色土器A類碗、輸入白磁碗、輸入陶器甕、平瓦、タイル板、不明鉄製品	C1
110	SK110		土坑		土師器(中世-)類・鉢・甕、須恵器(古代)甕・甕、緑釉陶器碗、灰釉陶器碗、輸入白磁碗、国産陶器鉢・銅、平瓦・丸瓦、埴土	D・E1・2
111			ビット		土師器(中世-)類、丸瓦、埴土	B1
112			ビット		土師器(中世-)類、須恵器(古代)甕、緑釉陶器碗、輸入白磁碗	C1・2
113			ビット		土師器(中世-)類、緑釉陶器碗、平瓦	C1・2
114			ビット		土師器(中世-)類、平瓦	D1・2
115			ビット		土師器(中世-)類、須恵器(古代)甕、緑釉陶器碗片	C1・2
116			井戸		土師器(中世-)類、国産陶器碗、平瓦、土製門板	D1
117			土坑		土師器(中世-)類、須恵器(古代)甕、輸入灰付箱、平瓦	D1
118			ビット		土師器(中世-)類、輸入白磁碗	B3
119	SB160b		ビット		土師器(古代)杯・高杯、土師器(中世-)類、白色土器箱(漆器)、須恵器(古代)甕、平瓦、不明鉄製品	E2
120	SK120		惣地土か		土師器(中世-)類・鉢・鉢、須恵器(古代)甕・鉢、須恵器(中世-)鉢、灰釉陶器碗、黒色土器A類碗、輸入白磁碗、輸入陶器甕、平瓦、土製門板、不明鉄製品	E・F1・2
121	SB160a	柱穴 採取	ビット		土師器(中世-)類・磁片 黒色土器A類鉢 黒色土器A類碗	F1・2
122			ビット		木材	D3
123			ビット		土師器(中世-)類、須恵器(古代)甕	D3
124			ビット		土師器(中世-)類、須恵器(古代)磁片、緑釉陶器碗片、灰釉陶器碗、黒色土器A類磁片	D3
125			ビット		瓦製磁片、埴土	E3
126			ビット		土師器(中世-)類、磁片、瓦製磁片、埴土	E・F3
127			ビット		土師器(中世-)類	E3
128			ビット		土師器(中世-)類	E3
129			ビット		土師器(中世-)類、平瓦	D3
130	SD130	褐色土 肥砂 下層 裏込め 礎敷内	溝	漏水	土師器(中世-)類、灰釉陶器碗片、平瓦・軒平瓦、灰化物 土師器(中世-)類、須恵器(古代)杯、灰釉陶器碗 土師器(中世-)類、白色土器箱、須恵器(古代)鉢、緑釉陶器碗、黒色土器B類碗、輸入白磁碗、平瓦・丸瓦 土師器(中世-)類、平瓦、埴土 土師器(中世-)類、埴土 土師器(中世-)類、瓦器碗、平瓦・丸瓦	A・C1
131			ビット		土師器(中世-)類	D3
132				欠奉		
133			ビット		土師器(中世-)類	F3
134			ビット		土師器(中世-)類	C2
135			ビット	礎石有り	土師器(中世-)類 土師器(中世-)磁片	C1
136	SK136		土坑		土師器(古代)甕・甕、土師器(中世-)類、緑釉陶器碗、黒色土器A類碗	F1
137	SB160C		土坑		土師器(中世-)類、須恵器(古代)甕、緑釉陶器碗、黒色土器A類甕	E2
138			土坑		土師器(中世-)類、輸入白磁碗、埴土	F1
139				欠奉		
140	SK140	褐色土 灰砂 硝灰粘	土坑		土師器(中世-)類、輸入陶器甕、砥石、平瓦 土師器(中世-)類、須恵器(古代)甕、須恵器(中世-)鉢、緑釉陶器青砂・磁片、灰釉陶器碗・甕、黒色土器B類碗、瓦器鉢、輸入白磁碗、平瓦・軒平瓦、釘、埴土 土師器(中世-)類・鉢、白色土器高杯、須恵器(古代)碗・甕・甕、須恵器(中世-)碗、灰釉陶器碗、黒色土器A類碗、瓦器鉢、輸入白磁碗・甕、平瓦・丸瓦、不明鉄製品	E・F1・2
141			ビット		土師器(中世-)類	D3
142			ビット		土師器(中世-)類	C2
143			ビット		土師器(中世-)類、黒色土器B類碗、磁片	E3
144				欠奉		
145			土坑	15C	土師器(中世-)類、須恵器(中世-)鉢(東園)、瓦器鉢、輸入青磁甕、国産陶器甕、平瓦・丸瓦・軒平瓦	ZA1

表 13 検出遺構および出土遺物一覧 (5)

S番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
146			土坑		土師器(中世～)皿、須恵器(古代)杯、緑釉陶器、輸入白磁碗	Z A 1・2
147			土坑		土師器(中世～)皿、須恵器(古代)壺、瓦器、輸入白磁碗、国産陶器	A 1
148			ピット	土師器まもって出土	土師器(中世～)皿	A 2
149					欠番	
150	SG150	1期	池	S-130下	土師器(中世～)皿、緑釉陶器、平瓦	A・D 1・2
		土師器(中世～)皿、白色土器、須恵器(古代)壺、緑釉陶器・蓋、黒色土器B類蓋(三足)、輸入白磁碗、平瓦、埴土				
		土師器(古代～)高杯、土師器(中世～)皿、須恵器(古代～)壺、平瓦				
		土師器(古代～)壺、土師器(中世～)皿、須恵器(古代～)壺、緑釉陶器				
		軒平瓦・平瓦				
		土師器(中世～)皿、須恵器(古代～)壺・蓋、緑釉陶器、灰釉陶器、平瓦				
		Ⅱ期			土師器(中世～)皿、緑釉陶器、黒色土器A類碗、輸入白磁碗、軒平瓦・平瓦	
		Ⅲ期			土師器(中世～)皿、緑釉陶器	
		Ⅳ期			151～159は欠番	
160	SB160		竪立柱建物	S-119・121・137	土師器(中世～)皿・壺、須恵器(古代～)壺、須恵器(中世～)壺、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器A類碗、国産陶器、平瓦、丸瓦	E・F 2・3
161			土坑		土師器(中世～)皿、須恵器(古代～)壺、須恵器(中世～)壺、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器A類碗、国産陶器、平瓦、丸瓦	E・F 1
170	SA170		竪立柱建物	S-54・86	土師器(中世～)皿、須恵器(古代)壺、緑釉陶器、瓦器類・蓋、輸入青磁碗、輸入白磁碗、輸入白磁鉢、須恵器(中世～)皿、白色土器、須恵器(古代)壺・蓋、須恵器(中世～)壺(東播)・鉢(東播)、緑釉陶器・壺、灰釉陶器、瓦器類・皿・鉢、蓋、輸入青磁碗、輸入白磁碗、輸入青白磁鉢、輸入陶器壺・鉢、国産染付碗(器入)、国産陶器壺(信楽)・御皿(古瀬戸)・鉢(瀬戸)・漆鉢(瀬戸)、平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦、木製漆器、釘、鉄、不明鉄製品	E・F 1
		包含層			土師器(中世～)皿、須恵器(古代)壺、緑釉陶器、瓦器類・蓋、輸入青磁碗、輸入白磁碗、輸入白磁鉢、須恵器(中世～)皿、白色土器、須恵器(古代)壺・蓋、須恵器(中世～)壺(東播)・鉢(東播)、緑釉陶器・壺、灰釉陶器、瓦器類・皿・鉢、蓋、輸入青磁碗、輸入白磁碗、輸入青白磁鉢、輸入陶器壺・鉢、国産染付碗(器入)、国産陶器壺(信楽)・御皿(古瀬戸)・鉢(瀬戸)・漆鉢(瀬戸)、平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦、木製漆器、釘、鉄、不明鉄製品	
		整地土1			土師器(中世～)皿、白色土器、須恵器(古代)壺・蓋、須恵器(中世～)皿・壺、灰釉陶器・壺、瓦器類、輸入白磁碗、国産陶器鉢(東海系)、平瓦・丸瓦・軒丸瓦、土製門杭、釘	
		整地土2			土師器(中世～)皿、土師器(中世～)皿、白色土器類(須崎台)・白色土器高杯、須恵器(古代)壺、須恵器(中世)壺・蓋、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器A類碗、瓦器類、輸入白磁碗、輸入陶器壺、国産陶器、平瓦・丸瓦・軒丸瓦(器入)	
		整地土3			土師器(中世～)皿、須恵器(古代)杯・蓋、黒色土器A類碗・B類碗、平瓦・軒丸瓦	
		整地土5			緑釉陶器	
		ベース砂			土師器(中世～)皿、須恵器(中世～)鉢、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器A類碗、輸入青磁碗、軒平瓦、平瓦	
		第4面 掘り下げ			土師器(中世～)皿	
		第2面 整地			不明木製品	
		断別4	粘土		土師器(古代)壺、古式土師器	
			褐色粗砂		土師器(中世～)皿・壺、須恵器(中世～)壺・蓋、国産染付碗、平瓦、釘(鉄)	
		カクラン			土師器(古代)須恵器蓋、土師器(中世～)皿、白色土器高杯、須恵器(古代)壺・鉢、須恵器(中世)壺・蓋、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦質土器深鉢、輸入青磁碗、国産青磁壺・鉢、輸入染付皿、国産染付碗、国産陶器山茶碗・皿(唐津)・壺・鉢・小杯・土甕、土製用陶、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦、瓦、不明鉄製品、刀筥具(鏝)・銅製取手・耳かき	
		表土			土師器(中世～)皿、須恵器(古代～)杯・蓋、緑釉陶器、国産染付壺・色絵碗、平瓦	
		表採			土師器(中世～)皿、つぼつぼ・埴圴、国産染付碗・皿、国産青磁染付蓋、国産陶器類・皿・鉢	
		不明				

写真図版



調査前風景（南東から）



第1遺構面検出状況（西から）



SE010 土層断面 (東から)



SE010 完掘状況 (東から)



SE020 土層断面 (東から)



SE030 土層断面 (東から)



SE034 土層断面 (北から)



SE034 完掘状況 (南東から)



SE037 土層断面 (北から)



SE038 土層断面 (北から)



SE038 完掘状況 (西から)



SK024 土層断面 (南から)



SX040 土層断面 (北から)



SX040 完掘状況 (北から)



SX070 土層断面 (東から)



SX070 完掘状況 (南から)



SD031 土層断面 (南から)



SG100 礫検出状況 (北東から)



SG100 完掘状況（北西から）



SG100 土層断面（東から）



SK019 土層断面 (南から)



SK019 完掘状況 (東から)



第1遺構面完掘状況（西から）



第1遺構面完掘状況（東から）



第1遺構面完掘状況（北東から）



第1遺構面完掘状況（北西から）



SA170 礎石検出状況（南東から）



SD106 土層断面（東から）



SD106 礫出土状況（東から）



SK090 土層断面（南から）



第2遺構面全景（西から）



第2遺構面全景（東から）



第2遺構面全景（南東から）



SK110土層断面（南から）



第3 遺構面全景（西から）



第3 遺構面全景（東から）



SB160 全景 (東から)



SD130 と石組 (東から)



SD130 と石組（西から）



SD130 礫と SG150 州浜礫（東から）



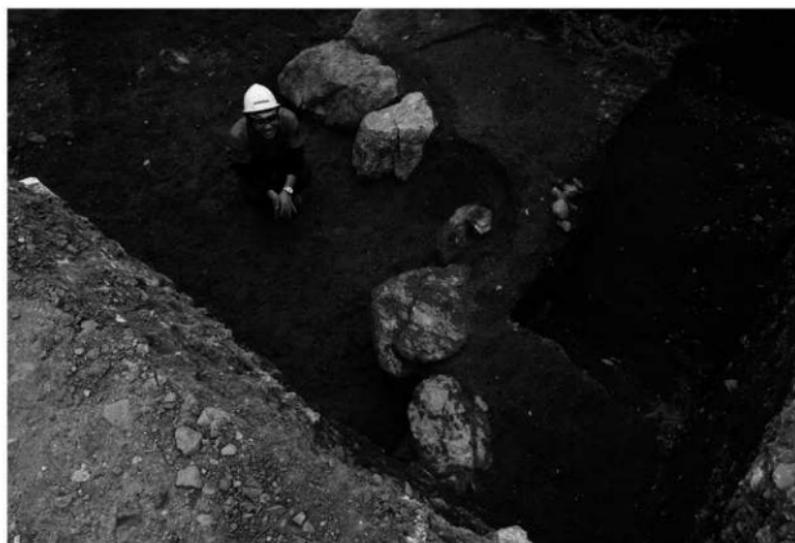
SG150 完掘状況（西から）



SG150 完掘状況（北西から）



SG150 景石（東から）



SG150 西端石組検出状況



SK088 土層断面 (北から)



SK140 土層断面 (東から)



SK120・136・140 完掘状況（東から）



第4遺構面完掘状況（西から）



第4遺構面完掘状況(東から)



北壁土層断面1(南から)



北壁土層断面 2 (南から)



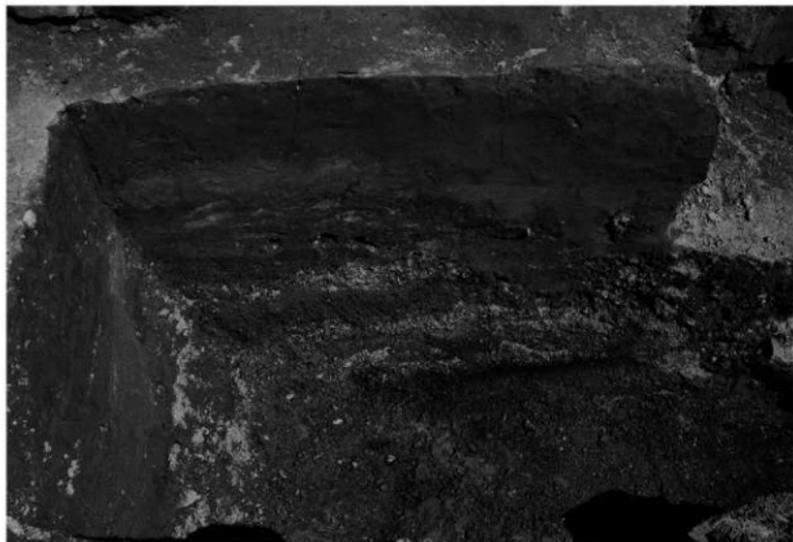
北壁土層断面 3 (南から)



北壁土層断面 4 (南東から)



断割 1 (北西から)

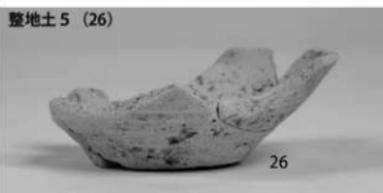
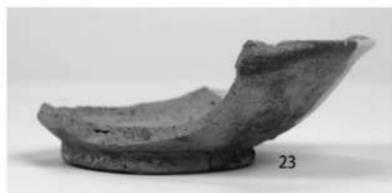
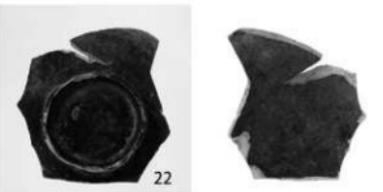
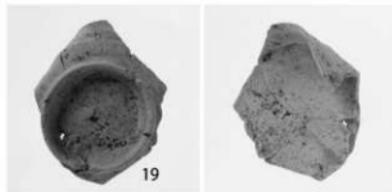
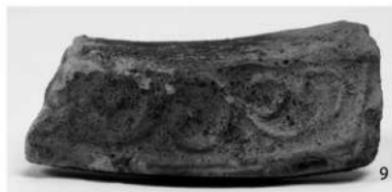


断割 2 (西から)

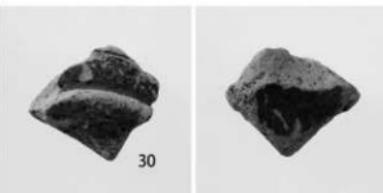


断割 3 (西から)

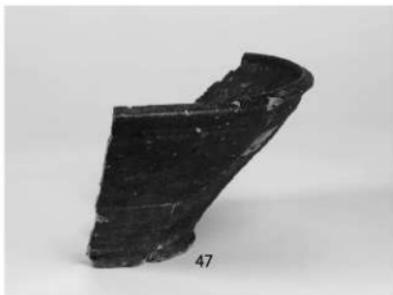
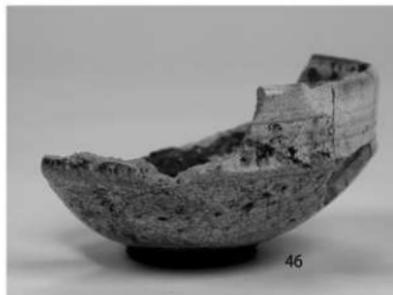
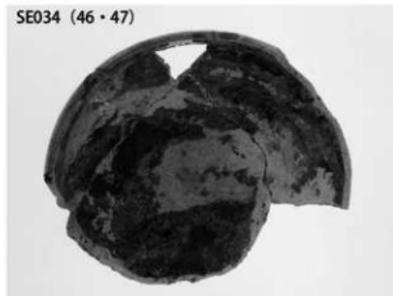
整地土 1 (6~9)



ベース土 (29・30)



SE034 (46・47)



SE038 (53)



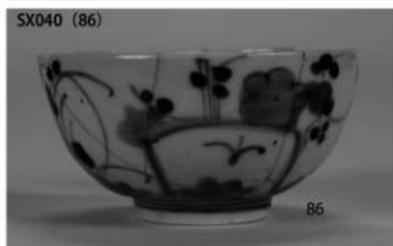
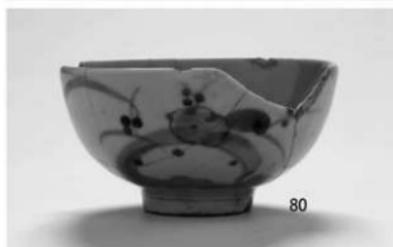
SK024 (54 ~ 56・65)



SK024 (66 · 70 · 71 · 73 · 75)



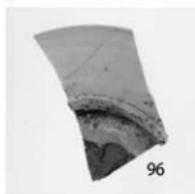
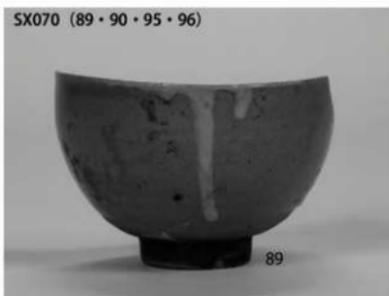
SK024 (77 · 78 · 80 · 81 · 83 · 85)



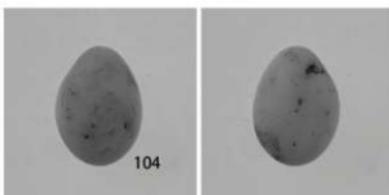
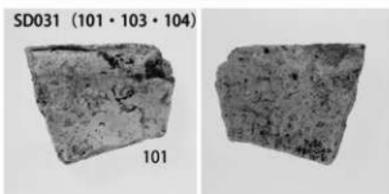
SX040 (87)



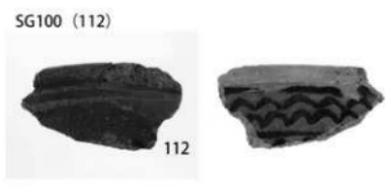
SX070 (89 • 90 • 95 • 96)

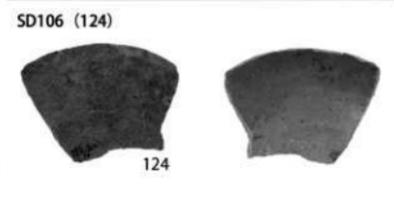
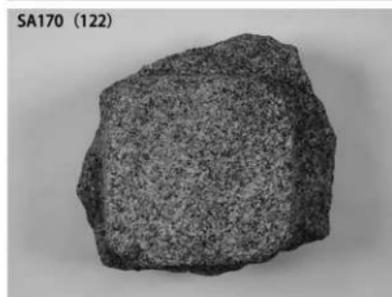
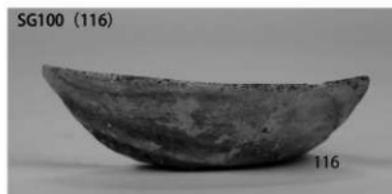


SD031 (101 • 103 • 104)

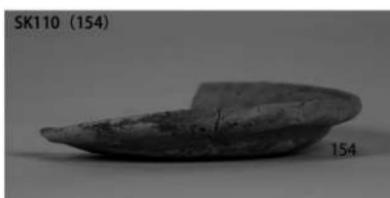
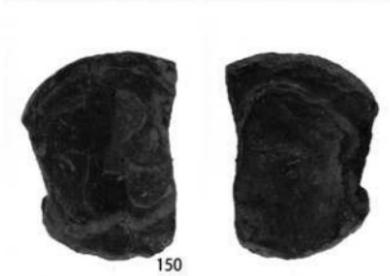
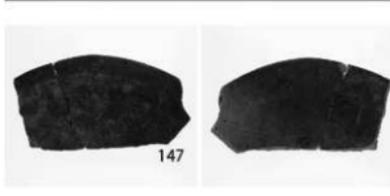
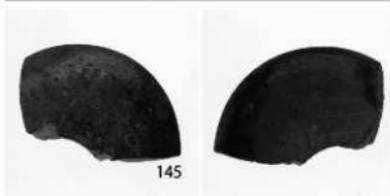
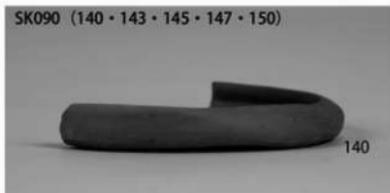


SG100 (112)





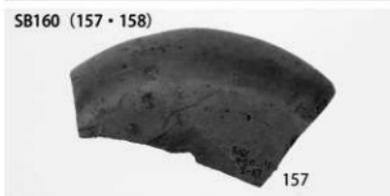
SK090 (140 · 143 · 145 · 147 · 150)



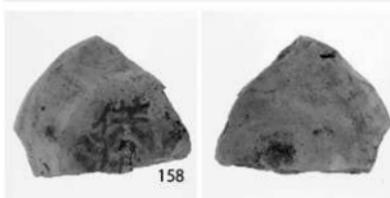
SK110 (154)



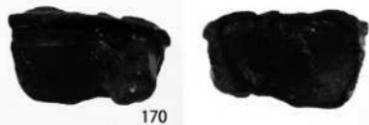
SG150 (163 · 164)



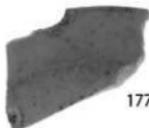
SB160 (157 · 158)



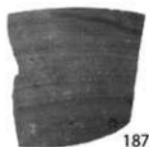
SG150 (170 ~ 172)



SK088 (177)



SK120 (184 · 186 · 187)



SK140 (190 ~ 193)



SK140 (194・202～204・206・208・209)



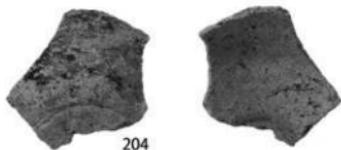
194



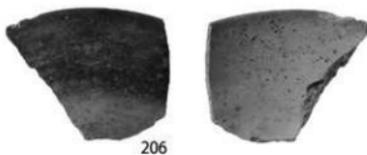
202



203



204



206



208



209

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうろくじょうにぼうじゅうにちようあと・からすまあやのこうじいせき							
書名	平安京左京六条二坊十二町跡・烏丸綾小路遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	佐藤亜聖、山口繁生							
編集機関	公益財団法人 元興寺文化財研究所							
所在地	〒 630-8312 奈良市中院町 11 番地					Tel 0742-23-1376		
発行年月日	西暦 2019年4月25日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	***	***	調査期間	㎡	調査原因
平安京左京六条二坊十二町跡 烏丸綾小路遺跡	京都市下京区油小路通六条 上るト味金仏町 181 番・ 184 番・186 番	26100		34° 59' 40"	135° 45' 13"	20180219 ～ 20180425	170ml	ホテル 建設
種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
都城・ 都市遺跡	弥生時代後期～近世		流路 土坑 井戸 池 ピット 掘立柱建物		土器 陶磁器 輸入陶磁器 石製品 銭貨		平安時代後期の景石を 持つ池状遺構を検出	
要約	平安京左京六条二坊十二町において、4面（一部5面）の遺構面を検出した。調査地周辺の基盤層は古墳時代以前の泥炭堆積物によって形成され、11世紀前半の整地によって平坦化される。11世紀末～12世紀初頭に景石を持つ池 SG150 が造られ、その後石組を配する大規模な改造が行われたのち、12世紀初頭には廃絶する。その後13世紀初頭の土師器皿大量集積（SK090）、14世紀の池 SG100 などがあるが、中世後期は低調である。現在の町屋空間は17世紀中葉頃から形成されたと考えられる。							

平安京六条二坊十二町跡
烏丸綾小路遺跡

2019.4.25

(発行・編集) 公益財団法人 元興寺文化財研究所

(印刷) 株式会社 明新社